

研究報告書 第59号

カリキュラムに関する研究

豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善

平成17・18年度

茨城県教育研修センター

## 目次

研究の概要	1
1 主題設定の理由	1
2 研究のねらい	2
3 研究の内容・方法等	2
豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（理論編）	3
1 カリキュラムの改善について	
・ カリキュラムをどのようにとらえたらよいでしょうか	3
・ なぜ、今カリキュラムを重視しなければならないのでしょうか	4
・ カリキュラムの改善とはどのようなことでしょうか	5
・ カリキュラムの改善のためには、どのようなことを行えばよいでしょうか	5
・ カリキュラムの改善をどのように次年度に生かせばよいでしょうか	7
2 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善のために	
・ なぜ、豊かな心をはぐくむことが重視されているのでしょうか	8
・ 豊かな心をどのようにとらえたらよいでしょうか	8
・ 特にはぐくみたい心をどのような手順で明確にすればよいでしょうか	9
・ 特に身に付けさせたい資質や能力にはどのようなものがあるのでしょうか	10
・ 授業をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか	11
・ 単元をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか	13
・ 年間指導計画をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか	15
・ 編成した教育課程をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか	17
・ 全教職員で改善を推進していく上で、留意すべき点は何でしょうか	18
豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（実践編）	20
《小学校実践事例》	20
1 「コミュニケーション能力をはぐくむカリキュラムの組織的な工夫・改善」	20
2 「総合単元的な道徳学習，その実践と改善のための組織的な取組」	26
3 「地域の人々との交流を生かした体験活動の実践と改善」	32
《中学校実践事例》	38
1 「ハートフル委員会による自己肯定感のはぐくみ」	38
2 「学年会を基盤とした校内研修の工夫・改善」	44
3 「小中連携から始めたカリキュラムの改善」	50
《高等学校実践事例》	56
1 「特活部を中心とした学校行事の評価・改善の取組」	56
2 「『豊かな心に関する意見発表会』の改善」	62
《特殊教育諸学校実践事例》	68
1 「自立心をはぐくむために幼・小・中・高の系統性を考えた体験学習の取組」	68
2 「人とかかわりの中で自立心をはぐくむための交流教育の改善」	74
豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（資料編）	80
1 「豊かな心をはぐくむ取組」に関する意識・実態調査の概要	80
2 意識・実態調査の結果	81
3 参考文献	87
研究協力校での実践から見える成果と課題	88
研究関係者一覧	90

## 研究主題 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善

### 研究の概要及び索引語

我が国の社会は、様々な面において大きく変化しており、教育においても、児童生徒の規範意識の低下や学力低下の傾向等、様々な課題が指摘されている。このような中、各学校は児童生徒の学びに着目し、教育活動全体を改善していくことが求められている。本研究では、2か年の継続研究として、研究助言者の講義及び助言等による理論研究、県内公立小・中学校、県立高等学校及び特殊教育諸学校への意識・実態調査等による調査研究、そして、研究協力校及び研究協力員による実践研究を基に、豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善の基本的な考え及び具体的方策等をまとめた。

索引語：豊かな心、カリキュラムの改善、授業評価、単元評価、年間指導計画の評価、教育課程評価、カリキュラム・マネジメント

## I 研究の概要

### 1 主題設定の理由

我が国の社会は、現在、国際化、高度情報化、少子高齢化、科学技術の発展、環境問題の関心の高まりなど、大きく変化している。教育においても、児童生徒の規範意識や自立心の低下、学力低下の傾向、家庭や地域社会の教育力の低下が見られるなど、様々な課題が指摘されている。こうした中、各学校は、創意を生かした特色ある教育活動を展開し、確かな学力、豊かな心、健やかな体のバランスのとれた質の高い教育を推進していくことが求められている。

各学校においては、確かな学力はもとより、豊かな心、健やかな体をバランスよく育成しようと、日々、熱心に実践がなされている。特に、豊かな心については、県としても力を入れて取り組んでおり、それぞれの学校でも、工夫された様々な実践が行なわれている。しかし、「なかなか豊かな心をはぐくまれない」、「これまでの取組でよいのだろうか」「さらなる工夫はないだろうか」という悩みをもっているのも事実である。

そのような現状から、豊かな心をはぐくむためには、カリキュラムの視点に立って、教師の指導計画や指導法だけでなく、児童生徒の学びや豊かな心をはぐくむための諸条件等に着眼していく必要があるのではないかと考えた。

中央教育審議会答申「初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について」（平成15年10月7日）には、「校長や教員等が学習指導要領や教育課程についての理解を深め、教育課程の開発や経営(カリキュラム・マネジメント)に関する能力を養うことが極めて重要である。」と述べられている。カリキュラムの改善には、学校の教育目標の実現を目指して、カリキュラムをつくり、動かし、これを変えていくという動的な営み、すなわち、カリキュラム・マネジメントが大切であると考えられる。そして、このような取組は、教職員一人一人にも求められており、学習指導要領に示された内容を画一的な指導計画にしたがって教えていく「カリキュラムユーザー」から、目の前にいる児童生徒の実態等に応じて、内容を自ら選択し、組織し、提供していく「カリキュラムメーカー」へと立場を変えていくことが求められていると言える。

そのため、本教育研修センターの統一研究主題「豊かな心をはぐくむ学びの創造」を受け、これまでの研究の成果を生かして、自主的・自律的な学校づくりの推進及び児童生徒の学びの質の向上を目指し、本主題を設定した。

## 2 研究のねらい

豊かな心をはぐくむためのカリキュラムの改善に関する研究を行い、学校教育の充実に資する。

## 3 研究の内容・方法等

### 研究主題

豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善		
主題設定の理由		
教育の今日的課題 ・ 自主的，自律的な学校経営 ・ 生きる力の育成	各学校の課題 ・ 確かな学力の育成 ・ 豊かな心の育成	課の研究の経緯・課題 ・ カリキュラムマネジメントに関する研究
研究の視点		
・ これまでの教育課程経営の研究や学校評価に関する研究の成果と課題を踏まえる。 ・ 県教育委員会の「豊かな心育成推進会議」「みんないっしょにマナーアップ事業」との関連を図る。 ・ 理論研究と調査研究に基づいて実践研究を進める。		
研究の内容・方法等		
研究の重点		
1 年次（平成17年度） 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善の基本的な考え方及び方策をまとめる。 2 年次（平成18年度） 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善の具体的方策を，特に，実践的研究を通して明らかにする。		
研究内容		
理論研究 ・ 大学教授の講義及び助言 ・ 文献研究	調査研究 ・ 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善に関する意識 ・ 実態調査（県内全公立小・中学校，県立全高等学校及び特殊教育諸学校） ・ 研究推進校視察	実践研究 ・ 研究協議会 ・ 研究協力校での実践 ・ 研究協力校訪問
研究成果の公表		
1 年次（平成17年度） ・ 中間発表：研究内容発表（教職教育課），実践発表（研究協力校） ・ Web ページでの研究内容の紹介 ・ 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善に関する Q & A 作成 2 年次（平成18年度） ・ 研究報告書配布 ・ 完結発表：研究内容発表（教職教育課），実践発表（研究協力校） ・ Web ページでの研究内容の紹介		

## II 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（理論編）

豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善の基本的な考え方を、Q&A形式でまとめました。「カリキュラムって何?」「なぜ今カリキュラムを重視しなければならないの?」という問いかけがあるとき、「豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善をさらに進めたい」「全教職員で共通理解を図りたい」というときなどに、ご活用ください。

### Q1 カリキュラムをどのようにとらえたらよいでしょうか

A ここでは、カリキュラムをどのようにとらえたらよいか、教育課程と比較しながら説明します。

#### 1 教育課程とは

教育課程については、「小学校学習指導要領解説 総則編 平成11年5月 平成16年3月 一部補訂 文部科学省」において、「教育課程は、各教科、道徳、特別活動及び総合的な学習の時間について、それらの目標やねらいを実現するように、教育の内容を学年段階に応じ授業時数との関連において総合的に組織した学校の教育計画であり、それを具体化した計画が指導計画であると考えられる。」と示されています。

つまり、教育課程は「教育目標や目的を達成するために、学習者の実態に応じて学習内容を総合的に組織、計画したもの」と言えます。本研究においても、教育課程を上記のとおりにとらえます。

#### 2 カリキュラムとは

カリキュラムを「教師の指導と児童生徒の学びにかかわるすべての経験内容」ととらえます。このことから、カリキュラムに含まれる要素として、以下のようなものが挙げられます。

- ・学習指導要領
- ・教育課程
- ・指導計画（年間指導計画、単元ごとの指導計画、授業計画等）
- ・学級・ホームルーム経営、学年経営、進路指導、生徒指導
- ・教師の指導
- ・児童生徒の学習活動
- ・教師の指導に影響を及ぼす環境・文化
- ・児童生徒の学習活動や学校・学級生活への適応に影響を及ぼす環境・文化
- ・児童生徒が学び取った知恵や要領
- ・学校・学級生活に適応する過程

#### 3 教育課程とカリキュラム

教育課程とカリキュラムを比較すると下記ようになります。

	教育課程	カリキュラム
用語の使われ方	・行政用語 ・学校や行政機関等で使われる。	・一般用語 ・学校だけでなく企業内の研修や民間の教育機関等でも使われる。
用語の指すレベル	・「計画」レベルのものを強く意味する。	・「計画」「実施」「結果」の三つのレベルのすべてが含まれる。

このように、カリキュラムは教育課程を含んだ、より広い範囲を示す用語をとらえます。

カリキュラムという場合、その意味するところの本質は「学習経験の総体」にあります。よって、学習指導要領、教育課程、指導計画、教師の指導と児童生徒の学習活動等の表にあらわれた顕在的なもの（顕在的カリキュラム）だけでなく、児童生徒が学び取った知恵や要領、学校・学級生活に適應する過程、適應に影響を及ぼす環境・文化等の裏に隠れた潜在的なもの（潜在的カリキュラム）も含めて、広い意味でカリキュラムをとらえていく必要があります。

## Q2 なぜ、今カリキュラムを重視しなければならないのでしょうか

A 今カリキュラムが重視される理由として、次のようなことが挙げられます。

### 1 自主的・自律的な学校づくりの推進

学習指導要領の改訂、そして、その後の一部改正により、教科等の目標や内容の大綱化が図られ、各学校においては、授業時数の運用を弾力化できるようになり、より創意工夫を生かした特色ある教育活動を学校の責任において展開できるようになりました。また、学校設置基準の制定や一部改正により、学校評価を実施し、その評価結果を公表することが求められるようになってきました。

このようなことから、各学校では、自主的・自律的な学校づくりの推進がいつそう求められています。この自主的・自律的な学校づくりでは、学校が独自に教育課程を編成し、実施するだけでなく、それを評価し、改善まで踏み込む動的な営みが特に重要になってきます。

これまで、各学校では、このようなことに積極的に取り組もうと努力してきたと思われま。しかし、教育課程の編成や実施に重点が置かれ、評価や改善までは、なかなか進まなかったのではないのでしょうか。

そこで、教育課程よりも広い概念であり、児童生徒の成長過程や学んだ内容を含めた用語であるカリキュラムを意図的に用いることによって、教職員一人一人が広い視野からの評価や改善の必要性に気づき、学校生活まで含めて改善する動的な営みが可能になってきます。

### 2 児童生徒の学びの質の向上

各学校では、学校の教育目標の実現（児童生徒一人一人の確かな成長）に向けて、教育課程を編成し、指導計画を立て、それに基づいて教育活動を実施しています。そのため、教師がどのような指導計画を立てたか、どのように指導したか、そして、指導の成果はどうであったかという「教師の指導」に重点が置かれがちになります。

教師の指導に着目することは、もちろん大切ですが、児童生徒一人一人の豊かな学びを保障するためには、それと併せて、児童生徒の実態や教育的ニーズに目を向けなければなりません。そして、児童生徒がどのような学習活動を求めているか、どのように学習活動を行っているか、結果としてどのようなことを学び、どのような成長が見られたのかをとらえ、「児童生徒の学びの質」を高めていく必要があります。

そのためには、児童生徒の学びに影響を及ぼす学級・ホームルームの雰囲気、人間関係、学校文化、教育資源等を重視し、そして、児童生徒の学びの側からみる視点を大切にすることが必要になってくるのです。

**Q3 カリキュラムの改善とはどのようなことでしょうか**

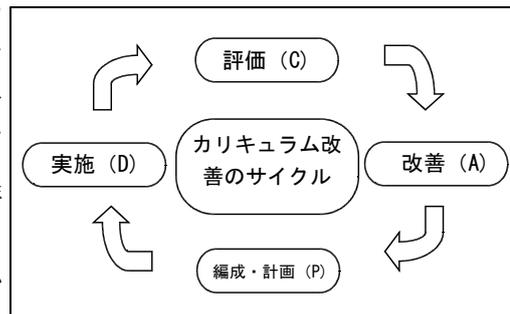
- A 本研究では、改善を「課題を解決すること」だけにとらえるのではなく、「成果にも着目し、成果については継続したり、一層充実させたりしていくこと」ととらえます。これを基に、カリキュラムの改善を次のようにとらえることにします。

学校の教育目標の実現に向けて、成果の上がっているカリキュラムについては、継続したり、一層充実させたりしながらも、一方大小差異はあるにせよ、課題のあるカリキュラムについては、解決したり、少しずつよくしたりしていくこと。そして、このような取組を日常的、計画的、組織的、継続的に行っていくこと。

**Q4 カリキュラムの改善のためには、どのようなことを行えばよいでしょうか**

- A カリキュラムを改善していくためには、カリキュラムを教育課程、年間指導計画、単元、授業レベルでとらえ、それらをつくり、動かし、変えていくという動的な営みとしてとらえることが大切です。この動的な営みをカリキュラム・マネジメントと呼びます。このカリキュラム・マネジメントでは、授業、単元、年間指導計画、教育課程の成果と課題を明らかにするために、評価が特に重要になります。

そこで、カリキュラム・マネジメントを進めていくにあたっては、従来のマネジメント・サイクルである「P (Plan:編成・計画)→D (Do:実施)→C (Check:評価)→A (Action:改善)」から、子どもの学びに着眼し、現在の子どもの姿や学習経験の評価(C)を起点とした「C→A→P→D」のサイクルに視点の転換を図っていくことが必要になってきます。



実際にカリキュラムの改善を進めていく手順を次ページの資料1に示します。まず、年間指導計画の実施場面である単元におけるカリキュラム・マネジメントに着目します。そして、その単元の評価（単元評価）を行い、単元のカリキュラムの改善を図っていきます。単元評価を行うためには、資料が必要になります。その資料の一つとなるのが授業に関する評価（授業評価）結果です。ここでは、観察や調査も評価ととらえます。次に、単元評価の結果等を資料として蓄積し、年間指導計画に関する評価（年間指導計画の評価）、そして、教育課程に関する評価（教育課程評価）を行っていくようにします。

このように、カリキュラムの改善には、「授業評価→単元評価→年間指導計画の評価→教育課程評価」へと、各評価の結果を次の評価に生かしていくことが必要になります。

**資料1 カリキュラムの改善を進めていく手順**

**※授業評価では、特に、学習活動の主体である児童生徒による評価を大切にします。**

授業 評価	目的	授業改善（指導力の向上）、単元評価の資料	時期	単元途中の1単位時間の終了時、単元の終了時、学期末、学年末
	評価者	児童生徒、授業者、参観者	内容	授業への興味・関心、授業内容の理解度や達成度、指導内容、指導方法、指導形態、進捗等
	方法	<input type="checkbox"/> 評価者に応じた評価シートを活用する。 <input type="checkbox"/> 児童生徒、参観者の授業評価結果と授業者の自己評価結果等を資料として活用し、授業改善に生かす。		



**※単元評価では、授業評価結果等を基にした部会での話し合いを大切にします。**

単元 評価	目的	単元目標の実現状況の把握、単元指導・評価計画等の改善、年間指導計画の評価資料	時期	単元終了後
	評価者	授業者 同じ単元を実施した同僚教師	内容	単元目標の実現状況、単元指導の展開状況、単元の指導内容、配当時間、指導形態、指導方法、学習環境等
	方法	<input type="checkbox"/> 小学校と特殊教育諸学校では、学年会を中心に単元評価を行う。中学校と高等学校では、教科については教科会で、道徳、特別活動等については学年会で単元評価を行う。 <input type="checkbox"/> 各教科、領域等にに応じた単元評価シートを活用する。 <input type="checkbox"/> 授業評価結果等を単元評価の資料として活用する。 <input type="checkbox"/> 部会等での話し合いを重視する。 <input type="checkbox"/> 評価結果から改善点を見いだし、単元指導・評価計画の改善点については、それを朱書する。		



**※年間指導計画の評価では、蓄積した単元評価の結果等に基づく話し合いを大切にします。**

年間 指導 計画 の 評価	目的	年間目標の実現状況の把握、年間指導計画や内容の改善、教育課程評価の資料	時期	学期末、12月～3月
	評価者	教職員 (学年会、教科部会等)	内容	各教科等（各教科・科目、道徳、特別活動、総合的な学習の時間、以下各教科等と表す）の目標の実現状況、各教科等の年間指導計画の実施状況、各教科等の年間指導計画の内容等
	方法	<input type="checkbox"/> 単元評価結果の蓄積、学力テスト（校内テスト、学力調査等）の結果、意識・実態調査、学期や年間の観点別学習状況の評価結果の分布状況等を基に、各教科等の目標の実現状況の評価する。 <input type="checkbox"/> 単元評価結果等を基に、年間指導計画の実施状況の評価し、年間指導計画等に記載する。 <input type="checkbox"/> 指導内容、教材、指導順序、各教科等及び各学年相互間の関連、指導時期、指導方法、指導形態、指導体制、教育・学習資源の活用、評価規準、評価方法等について評価し、改善策を年間指導計画等に記載する。		



**※教育課程評価では、教務主任を中心とした全教職員の話し合いを大切にします。**

教育 課程 評価	目的	教育課程の目標の実現状況の把握、教育課程の改善、学校経営の評価の資料	時期	学期末、12月～3月
	評価者	教職員	内容	教育課程の目標の実現状況、教育課程の編成、教育課程の編成と実施を支える諸条件等
	方法	<input type="checkbox"/> 各種部会等から出された年間指導計画の評価結果を資料として活用して、全教職員で教育課程の目標の実現状況や教育課程経営の条件整備の達成状況等について評価し、改善点を明確にする。 <input type="checkbox"/> これらの評価結果を基に、教務主任を中心とした教育課程編成の組織が中心となり、教育課程の編成等に関する改善を行う。		

**評価に活用した資料は、その結果とともに保管し、次年度へ引き継ぐことが大切です。**

**Q5 カリキュラムの改善をどのように次年度に生かせばよいでしょうか**

A 学校では新年度、教職員の異動等で学年の職員構成も変わり、前年度修正したことが十分生かされないことがあります。そうならないためには校内で全教職員が情報や資料を共有できる場所やシステムが必要になってきます。

授業評価、単元評価を通して作成した改善策を次年度の授業等に生かすためには、次の三つの方法が考えられます。

**1 カリキュラムに関する資料を蓄積させておく場所を確保すること。**

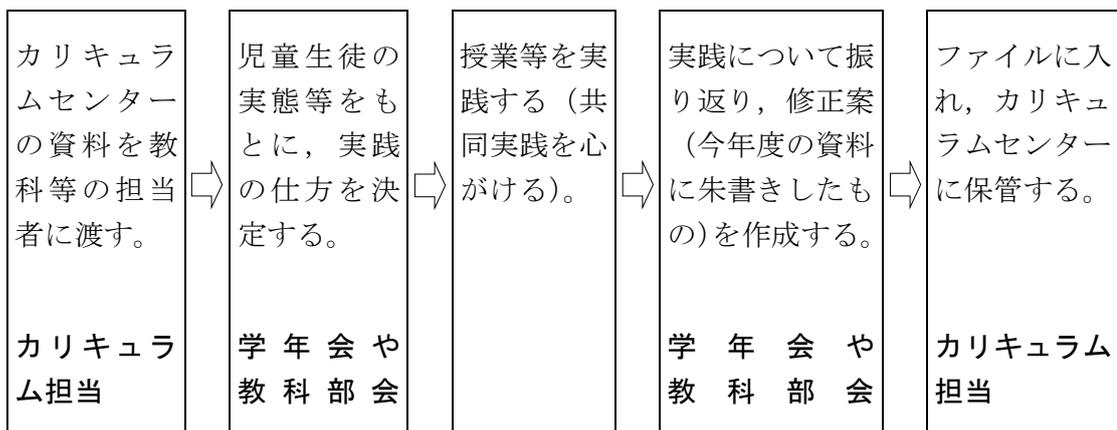
- ・ 空き教室や職員室の一角に、カリキュラムに関する資料を蓄積しておく場所（カリキュラムセンター）を確保します。
- ・ 学年別、教科別、月別に分けて資料を保管するための棚やケースを用意します。小学校では、「6年—4月—国語」で棚をつくるなど、細かく分けておくと、後から資料を見つけやすいので、活用されやすくなります。
- ・ 資料としては、学習指導案、ワークシート、児童生徒の活動記録、写真、指導者の反省等をクリアファイルにまとめて保管します。
- ・ 資料を蓄積するよさを少しずつ教職員に広め、理解者、賛同者を増やしていくためには、一つの学年、一つの教科から単元表や指導案、教材等の保管を始めます。

**2 カリキュラムを管理する担当者を決めること。**

- ・ 校内にカリキュラムを担当する組織をつくります。メンバーは教務主任と各学年のカリキュラム担当で構成します。人数は多くならないようにします。
- ・ カリキュラム担当職員は、次の月に使う資料を学年の教科等の担当に渡したり、資料の活用や保管の状況をチェックしたりします。

**3 カリキュラムの管理をシステム化すること。**

- ・ 授業等の実践とカリキュラムの管理は次のような手順で行います。



- ・ 毎年職員が変わるので、年度始めに教務主任やカリキュラム担当職員が中心となって、システム等についての共通理解の場を設けていくといいでしょう。

なお、カリキュラムの管理に関しては、千葉県館山市立北条小学校の実践が参考になります。（参考文献：『確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント』p. 206～p. 209「カリキュラム管理室によるカリキュラム評価の常態化」）

## Q6 なぜ、豊かな心をはぐくむことが重視されているのでしょうか

A 近年、豊かな心の育成が求められている背景には、小学生や中学生による殺人事件、いじめによる自殺等、青少年の複雑で多岐にわたる問題行動の多発が挙げられます。

また、児童生徒を取り巻く環境の変化に伴い、児童生徒が本来もっている「よりよく生きようとする心」を麻痺させかねない状況にあると考えられます。

このような状況下で、学校教育では確かな学力や健やかな体のみならず、豊かな心を含めて、これらがバランスよく育成されること、つまり「生きる力」の育成が社会の要請となっています。

そして、豊かな心をもった児童生徒の育成を目指して、道徳の時間はもとより、特別活動等を含め全教育活動で推進していくことが求められています。特に、児童生徒の規範意識や自立心、公共心、他人を思いやる心や生命を大切にする心をはぐくむことが求められています。

本県でも、心の教育の充実を図り、豊かな心をはぐくむことを重要課題として取り上げているところです。

## Q7 豊かな心をどのようにとらえたらよいのでしょうか

A 豊かな心については、「中学校学習指導要領（平成10年12月）解説―道徳―」の「道徳教育の目標」に、「例えば他人を思いやる心や社会貢献の精神、生命を大切にし人権を尊重する心、美しいものや自然に感動する心、正義感や公正さを重んじる心、他者と共に生きる心、自立心や責任感など、日常生活において豊かな心をはぐくむ必要がある。」と示されています。また、「本県の幼児児童生徒に『はぐくみたい大切な心』（茨城県教育委員会作成）」の中でも、豊かな心について次のように示されています。

〔豊かな心〕

- 美しいものや自然に感動するなどの柔らかな感性
- 正義感や公正さを重んじる心
- 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- 自立心、自己抑制力、責任感
- 他者との共生や異質なものへの寛容

各学校においては、これらのことを参考にして児童生徒にはぐくみたい豊かな心を具体的な姿としてとらえていくことが大切となります。

**Q8 特にはぐくみたい心をどのような手順で明確にすればよいでしょうか**

A 豊かな心にはQ7に示したように様々な心があります。各学校においては、学校経営の重点目標や教職員の願い、保護者の願い、児童生徒のアンケート調査等を基に、特にはぐくみたい心を絞り込み、その絞り込んだ心を重点的にはぐくむことが大切になります。以下にその手順を示します。

**1 調査の実施**

児童生徒にどのような心をはぐくまれているか等の調査をします。

調査の対象としては、児童生徒、保護者、教職員が挙げられます。

調査方法としては、聴き取り調査やアンケート用紙を活用した調査等が挙げられます。教職員を対象の調査用紙の例を右に示します。

児童生徒には、発達段階に応じて分かりやすく質問します。右下に高等学校の調査用紙の例を示します。特殊教育諸学校では、各部署で連携してアンケート項目を決定し、実施していくことが大切です。児童生徒、保護者、教職員に同様な質問をすれば、それぞれの受け止め方の違いを知ることができます。

**2 調査結果の集計**

担当者を決め結果を集計します。学年ごとの結果をグラフに表すなど、全教職員での話合いの資料を作成します。

**3 全教職員による話合い**

集計結果を基に、全教職員で話し合い、学校として、特にはぐくみたい心は何かを考えます。はぐくみたい心に優先順位をつけるという方法もあります。

校内研修を活用して、学年ごとの結果を比較したり、保護者と児童生徒の結果の違いを分析したりするのも有効な方法です。

**(教職員対象の調査用紙例)**

「豊かな心」に関するアンケート

本校では、豊かな心を、①感動する心、②柔らかな感性、③倫理観、④自立心、⑤責任感、⑥正義感や公正さを重んじる心、⑦思いやりの心、⑧社会貢献の精神、⑨寛容ととらえています。

次の1から3の質問にお答えください。

1 上記の豊かな心のうち、本校の児童に最もはぐくまれていると思われる心、最もはぐくまれていないと思われる心の一つずつを選び、番号を答えてください。また、選んだ理由も記入してください。  
[最もはぐくまれていると思われる心]

番号	選んだ理由

[最もはぐくまれていないと思われる心]

番号	選んだ理由

2 これまでの実践で、豊かな心をはぐくまれたと思う取組を三つまで挙げてください。

①  
②  
③

3 その他（豊かな心に関して自由に記入して下さい）

--

**(生徒対象の調査用紙例)**

「豊かな心」に関するアンケート調査用紙

☆アンケート調査を行うにあたって

皆さんには、本校での高校生活を送っていく中で、ホームルームや授業、たくさんの行事等を通して、学業のみならず心を成長させていってほしいと思います。そこで、下に挙げる10項目の「心」について自己評価してみてください。

アンケートの結果は、今後の行事等に生かしていきたいと考えています。

1 学年と性別 年（男・女）

2 下の①～⑩のことについて、どのくらいそう思いますか。5段階で評価してください。（あてはまる数字に○をつけてください）

	とても そう思う	4	3	2	1 全然そう 思わない
①感動する心 美しい行為や話・芸術作品を見たり聞いたりして、心が満たされたという感じがしますか？	5	4	3	2	1
⑩その他（ ） 上記以外にあれば書いてください	5	4	3	2	1

**Q9 特に身に付けさせたい資質や能力にはどのようなものがあるでしょうか**

**A** 豊かな心をはぐくむために、児童生徒に身に付けさせたい資質や能力として、人間関係形成能力や自己肯定感、自尊感情などが考えられます。豊かな心は、人と豊かにかかわることにより、より一層はぐくまれていきます。人とのかかわりには人間関係形成能力が必要であり、特に身に付けさせたい能力であると考えられます。

人間関係形成能力について、「児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進に関する調査研究報告書」（国立教育政策研究所生徒指導研究センター 平成14年11月）において、次のように示されています。

人間関係形成能力 他者の個性を尊重し、自己の個性を發揮しながら、様々な人々とコミュニケーションを図り、協力・共同してものごとに取り組む能力

また、人間関係形成能力について、具体的に二つの能力「自他の理解能力」「コミュニケーション能力」が示され、小学校、中学校、高等学校別に、職業的（進路）発達を促すために育成することが期待される具体的な能力・態度として次のように示されています。

	小学校			中学校	高等学校
	低学年	中学年	高学年		
自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切に行動していく能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の好きなことやいやなことをはっきり言う。</li> <li>友達と仲良く遊び、助け合う。</li> <li>お世話になった人などに感謝し親切にする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分のよいところを見つける。</li> <li>友達のよいところを認め、励まし合う。</li> <li>自分の生活を支えている人に感謝する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の長所や欠点に気づき自分らしさを發揮する。</li> <li>話し合いなどに積極的に参加し、自分と異なる意見も理解しようとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の良さや個性がわかり、他者の良さや感情を理解し、尊重する。</li> <li>自分の言動が相手や他者に及ぼす影響が分かる。</li> <li>自分の悩みを話せる人を持つ。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の職業的な能力・適性を理解し、それを受け入れて伸ばそうとする。</li> <li>他者の価値観や個性のユニークさを理解し、それを受け入れる。</li> <li>互いに支え合い分かり合える友人を得る。</li> </ul>
多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力	<ul style="list-style-type: none"> <li>あいさつや返事をする。</li> <li>「ありがとう」や「ごめんなさい」を言う。</li> <li>自分の考えをみんなの前で話す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分の意見や気持ちを分かりやすく表現する。</li> <li>友達の気持ちや考えを理解しようとする。</li> <li>友達と協力して、学習や活動に取り組む。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>思いやりの気持ちを持ち、相手の立場に立って考え行動しようとする。</li> <li>異年齢集団の活動に進んで参加し、役割と責任を果たそうとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>他者に配慮しながら、積極的に人間関係を築こうとする。</li> <li>人間関係の大切さを理解しコミュニケーションスキルの基礎を習得する。</li> <li>リーダーとフォロアーの立場を理解し、チームを組んで互いに支え合いながら仕事をする。</li> <li>新しい環境や人間関係に適應する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の思いや意見を適切に伝え、他者の意志等を的確に理解する。</li> <li>異年齢の人や異性等、多様な他者と、場に応じた適切なコミュニケーションを図る。</li> <li>リーダー・フォロアーシップを發揮して、相手の能力を引き出し、チームワークを高める。</li> <li>新しい環境や人間関係を生かす。</li> </ul>

各学校においては、上記の表を基に、各学校で育てたい人間関係形成能力を具体的に伝え、その育成のための方策を、教科や道徳、特別活動等教育活動全体で考えていきます。

## Q10 授業をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか

A 各学校においては、各教科・科目、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の授業（各教科等と表す）を中心に、豊かな心をはぐくむための様々な学習活動が展開されています。授業評価とは、児童生徒の授業内容の理解度や満足度、興味・関心、ねらいの実現状況や、指導内容、指導形態、指導方法等を調査することにより、授業についての改善策を明確にすることととらえます。授業評価には、1時間の授業を評価するもの、1単元等の授業全体を評価するもの、広く日頃の授業全般を学期毎に評価するものなどがあります。以下に、授業評価の方法と改善の手順を示します。

### 授業評価の計画の立案(単元に入る前に学年会や教科部会で)

- ・教職員が話し合いながら、評価場面と評価者を具体的に指導計画に位置付けます。
- ・授業評価は、毎時間行うのではなく、評価の資料を得るのに適した授業で行うようにします。
- ・学年や教科等で共通した評価シートを活用したり、結果の整理を同じ方法で行ったりします。資料2に、小学校児童用の授業評価シートの例を示します。
- ・授業評価では、特に学習活動の主体である児童生徒による評価を大切にします。

### 授業評価の実施

- ・下表に、授業評価の評価者、評価内容、評価方法等について示します。

評価者	評価内容	評価方法等
児童生徒	授業内容の理解度、満足度、興味・関心、授業の進み具合、潜在的カリキュラム、授業への要望等	・評価シートを活用し、計画的・継続的に行う。
参観者 (保護者等、 同僚教師)	学習活動状況、学習活動の内容、感想等	・評価シートに自由に記述できる欄を設け、率直な感想等を記載できるようにする。
授業者	授業のねらいの実現状況、指導内容、指導形態、指導方法、潜在的カリキュラム等	・児童生徒や参観者の評価結果を基に、ねらいの実現状況や指導内容等を評価し、記録する。

- ・児童生徒や保護者には、授業評価のねらいや評価結果の活用方法等について説明する場を設定し、ねらいや活用方法が十分に理解されるようにします。
- ・授業評価の結果を蓄積、分類・整理し、児童生徒のよさやつまずきの原因、要望の背景等を分析することにより、児童生徒の授業の理解度等を的確に把握するようになります。

### 授業評価に基づく授業の改善(授業者)

- ・豊かな心をはぐくむ授業の実現に向けて、授業の成果や改善点を生かせるものからすぐに、指導法の改善のために活用します。

### 単元評価の準備(授業者から学年会や教科部会へ)

- ・授業評価の結果を、次の単元評価の資料としても活用します。

資料 2

授業評価シート（例）

年 組 番 氏名( )

教科等（学校行事）

メリット・デメリットを検討した上で記名させるかどうかを決めます。

この授業評価シートは、授業をよりよいものにするために、児童の皆さんに意見を聞き、参考にするためのものです。成績とは関係ありません。この授業を振り返って、自分の思うとおりに答えてください。

A：そう思う B：ややそう思う C：あまりそう思わない D：そう思わないとして、あてはまる記号を○で囲んでください。

No.	評 価 内 容	評 価
1	今日の活動は楽しかったですか。	児童生徒の満足度、授業の理解度、興味・関心、授業の進み具合、授業への要望など授業評価のねらいにあわせて設定します。
2	役割分担に基づき、友達と協力して活動できましたか。	
3	友達や地域の人たちとの活動時間は十分でしたか。	A B C D
評価の集計にかかる時間を考慮して質問の数を決めます。	グループの人数は活動しやすかったですか。	A B C D
	他のグループの発表をよく聞けましたか。	授業参観などを利用して、保護者にも同様な質問をすれば、それぞれの受け止め方の違いを比較することができます。
	先生の活動の説明は分かりやすかったですか。	
	発表会場は楽しい雰囲気でしたか。	A B C D
8	(交流会の時の例) 地域の人たちとたくさんお話や活動ができましたか。	A B C D
9		7番まではいつも同じ質問とし、8番～10番の質問はその授業にあった質問を手書きするなど、簡単に評価用紙を作成できるように工夫します。
10		
	この授業についての感想や要望などを書いてください。	
	自由記述欄を作り、教師が設定した評価内容以外のことについても情報を得られるようにします。	

**Q11 単元をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか**

A 豊かな心をはぐくむための取組における単元とは、一つのまとまった学習活動ととらえます。豊かな心をはぐくむために、新たな活動を構想しがちですが、その前に、各学校で実践している活動の評価（単元評価）し、改善策を明確にしていくことが、効果的、効率的な改善につながります。単元評価とは、単元目標の実現状況や児童生徒の活動状況等をとらえ、単元等に配当された時間、指導内容、指導形態、指導方法等々を評価することです。以下に、単元評価の方法と改善の手順を示します。

**単元評価の準備(単元に入る前に学年会や教科部会で)**

- ・単元についての評価内容や評価方法を、具体的に話し合い、評価シートを作成します。その際、授業評価の結果が単元評価に生かせるよう見通しを立てます。資料3に、単元評価シートの例を示します。

**単元評価の実施と評価結果に基づく単元の改善(単元実施後に学年会や教科部会で)**

《単元評価の実施》

- ・単元評価シートを活用し、授業評価結果や蓄積しておいた資料に基づいて評価します。
- ・単元評価に活用できる資料としては、児童生徒による活動の感想や自己評価、ポートフォリオ、教師による指導の記録や活動の様子を撮った写真、ビデオ、前年度までに実施した同様の単元の評価結果等が考えられます。
- ・評価をより適切なものにするために、授業者一人で行うのではなく、学年会や教科部会でそれぞれの評価を共有するようにします。
- ・下表に、単元評価の評価者、評価内容、評価方法等について示します。

評価者	評価内容	評価方法等
授業者 同じ単元 を指導し た同僚教 師	単元目標の実現状況	・観点別評価の集計結果等を基に、単元目標の実現状況をとらえる。
	学習活動状況	・授業評価結果や児童生徒の学習活動に関する記録等を基に、児童生徒の学習活動状況の評価する。
	単元の指導計画の実施状況	・単元の指導計画にそって単元を展開できたか評価する。
	指導内容、教材、配当時間、指導形態、指導方法、潜在的カリキュラム、評価規準等	・授業評価結果や上記の評価結果をもとに、指導内容等を評価し、記録する。

《評価結果に基づく単元の改善》

- ・上記の単元評価の結果について、学年会や教科部会で話し合い、改善点を明らかにします。
- ・明らかになった改善点に基づき、単元の指導・評価計画を修正し、改善を図ります。次の単元において改善可能なものについては、実際に次の単元から改善していきます。

**単元評価結果の蓄積(単元評価者中心に)**

- ・単元評価の結果は蓄積し、年間指導計画の評価に生かすようにします。

資料 3

単元評価シート（例）

平成 年 月 日 記入者( )

行 事

学年・組 年 組

実施期間 平成 年 月 日～平成 年 月 日

評価（○：課題なし，改善の必要なし △：課題あり，改善の必要あり）

評価に精一杯で，改善に生かす時間的な余裕がなくなるないように，学期の重点単元に絞るなど計画的に行います。

項 目	評 価 内 容	評価	気付いた点及び改善策等
単元目標の 実現状況	行事の目標は適切だったか。		授業評価シートなどの資料を見ながら気付いたことなどを自由に書いていきます。
	行事の目標を実現できたか。		
学習活動状 況	興味・関心をもって活動していたか。		年間指導計画の評価につなげていくためにも，指導時数や実施時期について振り返ることが大切です。
	協力し合って活動していたか。		
指導計画の 実施状況	指導時数や実施時期は適切だったか。		
指導内容	地域の資源は有効活用できたか。		児童生徒の活動状況や指導計画及び内容，指導法等を評価項目とし，各項目について，その単元の指導の重点も踏まえながら評価内容を設定します。
	事前・当日・事後の内容は関連が保たれていたか。		
	児童生徒の発達段階に即した内容だったか。		
指導形態	指導形態は適切だったか。		
指導方法	指導方法は適切だったか。		
評 価	評価規準は適切だったか。		
	評価方法は適切だったか。		
その他	コミュニケーション能力の育成に役立ったか。		その他の項目に，豊かな心をはぐくむ取組の視点を中心に評価内容を設定します。
	豊かな心をはぐくむことができたか。		
備 考	上記の記入事項を総括して気付いたこと，次年度の改善点，他の単元等との関連などについてまとめておき，年間指導計画の評価の資料として活用します。		

**Q12 年間指導計画をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか**

A 各学校においては、豊かな心をはぐくむために年間指導計画に基づいて様々な学習活動が展開されています。年間指導計画の評価は、各教科等の年間の目標の実現状況や年間指導計画の実施状況、さらに年間指導計画の内容等について評価し、年間指導計画の改善策等を明確にすることととらえます。

各教科等の年間指導計画の評価の方法と改善の手順を示します。

**単元評価終了後における年間指導計画の評価と改善（単元評価者を中心に）**

- ・単元評価結果から得られた改善策を基に、実施した単元について修正します。コンピュータを活用したり、現在の年間指導計画に朱書したりして、学期ごとの見直しのための資料を蓄積していきます。単元終了後にその都度行うようにします。

**学期ごとの年間指導計画の評価と改善（学年会、教科部会を中心に）**

- ・蓄積した単元評価結果を踏まえて、学期ごとの年間指導計画を見直します。特に、他の教科との関連を見直します。
- ・長期休業期間を利用して、計画的、継続的に行います。
- ・次の学期に実施する年間指導計画の見直しも行い、必要に応じて改善します。

**今年度の年間指導計画の評価と改善（学年会、教科部会を中心に）**

- ・年間指導計画の評価シート（P.16参照）などを活用し、次の内容を評価します。

	評価内容	評価方法等
評価者は教職員	各教科等の目標の実現状況	・単元評価結果（学校行事を実施しての豊かな心に関する目標の実現状況）、学力テスト（校内テスト、学力調査等）の結果、意識・実態調査、観点別学習状況の評価結果、前年度の年間指導計画の評価結果等に基づいて総合的に評価する。
	年間指導計画の実施状況	・単元評価結果（実施時期、指導の順序）等を基に、年間指導計画の実施状況の評価する。各単元にかかった時間を集約しておき、予定した時間と比較・検討する。
	年間指導計画の内容等	・単元評価結果等を基に、指導内容、具体的な体験内容、教材、道徳や特別活動との関連、学年相互間の関連、配当時数、指導方法、指導体制、保護者や地域社会との連携、資源の活用、評価規準、評価方法等について評価する。

- ・実現されている目標については継続し、実現されていない目標については原因の把握と解決策の明確化に努めます。
- ・評価結果に基づいて次年度の年間指導計画の原案を作成します。
- ・「今年度と同様に継続する」「一部修正する」「取りやめる」「新たに立ち上げる」の四つの視点から見直すことも大切です。

**教育課程を編成している組織への引継（学年主任、教科主任から教務主任へ）**

- ・編成した次年度の教育課程に基づいて、年間指導計画の原案を改善したものが、次年度の年間指導計画となります。
- ・年間指導計画の評価結果は教育課程評価の資料にします。

資料4 年間指導計画の評価シートの例（小学校）

	前年度の評価結果	豊かな心に関する目標の実現状況		計画の実施状況	指導計画の内容
		学力テストや意識・実態調査から気付いたこと	はぐくみたい心（ ）とその実現状況		
国語	年度の始めに記入しておき、改善に生かすようにします。	学カテストや意識・実態調査から気付いたこと	はぐくみたい心（ ）とその実現状況	実施時期や指導の順序について	体験内容，他教科等との関連などについて
社会					
総合的な学習の時間	全部の教科等で記入しようとするのではなく，単元評価等で気がついたことを記録していくようにします。		自校で明確化した豊かな心を記入し，その実現状況の評価します。	他の教科との関連も考えます。	単元終了時，学期末などその都度行い，記録します。
道徳	今年度と同様に継続する，一部修正する，取りやめる，新たに立ち上げる，の四つの視点から見直します。				実際に各単元等にかかった時間と予定時間のずれの原因を記入し改善に生かします。
学級活動					
学校行事					
備考	上記の記入事項を総括して気付いたこと，次年度の改善点，各教科等との関連などについてまとめておき，教育課程の評価の資料として活用します。				

資料5 年間指導計画の評価シートの例（中学校・国語科）

	前年度の評価結果	豊かな心に関する目標の実現状況		計画の実施状況	指導計画の内容
		学力テストや意識・実態調査から気付いたこと	はぐくみたい心（ ）とその実現状況		
国語				実施時期や指導の順序について	体験内容，他教科等との関連などについて
総合的な学習の時間					
道徳	各教科等で統一した形式のものを使い，集約したり，全体を見渡しやすくしたりします。各教科の評価結果は全体で集約し，教育課程の評価に活用します。			道徳や，学校行事との関連を踏まえて，評価するように心がけます。	教科の年間指導計画についても，豊かな心をはぐくむための活動として振り返り，記入します。
学級活動					
学校行事					
備考	教科については教科主任が，道徳・総合的な学習の時間・学級活動・学校行事については学年主任が中心となって話し合い，評価します。道徳主任等は，各学年の評価結果を踏まえて総合的に判断し，それをまとめます。				

※ これらの評価シートを参考に，自校に合った形に評価シートを改善していくことが大切です。

**Q13 編成した教育課程をどのように評価し、改善につなげていけばよいでしょうか**

A 教育課程を評価していくことは、豊かな心をはぐくむためのよりよい教育課程を編成する上で大切な取組と言えます。教育課程評価は、教育課程の目標の実現状況や教育課程の編成に関する内容、教育課程の編成と実施を支える諸条件、教育課程の編成の手順や方法について評価し、教育課程に関する改善策等を明確にすることととらえます。教育課程の評価の方法と改善の手順を示します。

**全教職員での教育課程評価の共通理解（年度初めに職員会議で）**

- ・管理職と教務主任を中心とした組織とで、教育課程評価計画及び流れ図を作成します。
- ・各自が「いつ、誰と、何を、どのように評価し、評価結果をどのように活用するのか」を理解するようにします。

**学期ごとの教育課程の評価と改善（教務主任を中心とした組織で）**

- ・長期休業期間を利用して、下記の項目について評価します。

教育課程の目標の実現状況（年間指導計画の評価結果を基に）  
 教育課程の編成に関する内容（知・徳・体のバランス、児童生徒の実態、保護者や地域の期待、道徳教育の充実、総合的な学習の時間の取り扱い、授業時数等）  
 教育課程の編成と実施を支える諸条件（学年・学級経営、生徒指導、進路指導時間割、潜在的なカリキュラム）

- ・学年主任、教科主任等で構成した組織を作り、教務主任が中心となって行います。
- ・各教科等の年間指導計画の評価結果を基に話し合い、現段階での改善策を明確にしていきます。改善が必要なことはその都度改善していきます。（Q16の年間指導計画の評価シートを使い、各教科等の評価結果を集約したものを資料にして話し合います。）

**今年度の教育課程の評価と改善（教務主任を中心とした組織で）**

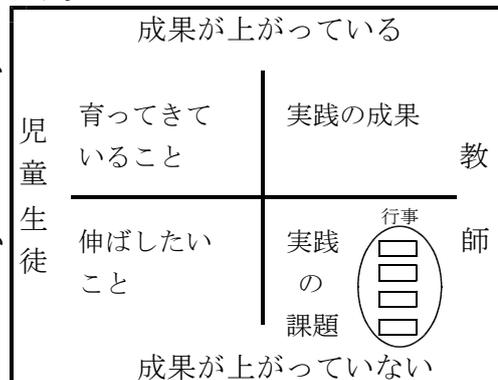
- ・上記の三つの項目に教育課程編成の手順と方法を加えて評価し、次年度の教育課程の編成に生かします。その際、組織での話し合いの過程を大切にします。
- ・各教科等の年間指導計画の評価結果や個々の教職員の評価結果なども参考にして総合的に評価します。個々の教職員の意見を生かした話し合いの仕方の例を以下に示します。
- ・評価結果に基づいて次年度の教育課程の原案を作成します。

**次年度の教育課程の編成（教務主任を中心に）**

- ・管理職から提示された教育課程の編成の基本方針を踏まえて、教育課程の原案を改善したものが、次年度の教育課程となります。

《個々の教職員の意見を生かした話し合いの仕方の例》

- 1 個々の教職員に、今年度の「豊かな心をはぐくむ取組」の成果と課題を付箋に書き（1枚1項目）、提出してもらいます。
- 2 記入内容が、育ってきていること、伸ばしたいこと、実践の成果、実践の課題のどれに当てはまるかを考え、付箋をA3の紙に分類していきます。
- 3 関連する内容は線で囲み、タイトルをつけます。
- 4 資料を見ながら、改善点について話し合います。



## Q14 全教職員で改善を推進していく上で、留意すべき点は何でしょうか

A 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善は、今まで述べてきた授業評価→単元評価→年間指導計画の評価→教育課程評価を積み上げていき、次年度の教育計画につなげていくことが大切です。それは教師個々に行われるべきものではなく、全教職員で、日常的、計画的、組織的、継続的に行われるべきものです。

全教職員で豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善を推進していくための留意点として、次のようなことが挙げられます。

**1 全教職員で、カリキュラムの改善の目的、改善のための評価の時期及び方法等について共通理解し、実践をとおしてカリキュラム改善の有用性を実感できるようにします。**

- ・授業評価、単元評価、年間指導計画の評価、教育課程評価を行い、改善策を一つ一つ確実に実践し、児童生徒の成長と教職員の変容等をとらえられるようにします。また、カリキュラムの改善の進み具合についても評価するようにします。
- ・自己点検票等の資料に基づいて全教職員で話し合い、共通理解・共通実践を図るようにします。次頁に「豊かな心をはぐくむカリキュラムの問題点発見のチェックポイント」を示しました。

**2 管理職のリーダーシップの下に、教務主任を中心とした教育課程編成の組織のメンバーが推進役となり、組織的にカリキュラムの改善を行います。**

＜管理職のリーダーシップ＞

- ・豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善を学校経営の重点施策とします。
- ・この重点施策を教職員、児童生徒、保護者、地域住民等に公表し、理解を得るようにします。
- ・教職員一人一人に対して、適切に指導助言していきます。

＜教務主任を中心とした教育課程編成の組織＞

- ・職務や研修を通して、カリキュラム改善の推進に必要な能力を高めます。
- ・豊かな心をはぐくむための実践を行う組織（学年会や教科部会、各種教育活動部会）との連携を図ります。
- ・教職員一人一人の取組を支援します。

＜主任を中心とした学年会や教科部会＞

- ・児童生徒の変容や学年での取組に関するデータ等を基にして、成果と課題を明確にすると同時に校内での共通理解を図ることができるようにします。
- ・特に課題や改善点について次の学年に引き継いでいきます。
- ・教職員一人一人の取組を支援します。

**3 3年間程度の長期の見通しをもち、カリキュラムの改善を学校に定着させていきます。**

見通しをもってカリキュラムの改善に取り組むことが大切なのは、人事異動等があってもカリキュラムの改善が継続して行われ、学校にカリキュラムの改善が定着することが求められているからです。具体的には、カリキュラムに関する資料を蓄積させておく場所を確保すること、カリキュラムを管理する担当者を決めること、カリキュラムの管理をシステム化すること等が考えられます。（詳細は7ページQ5を参考にしてください）

資料6 豊かな心をはぐくむカリキュラムの問題点発見のチェックポイント（例）

評価（○：課題特になし △：課題あり）

項目	評価内容	評価	気付いた点・改善策等
学校経営ビジョン	1 豊かな心をはぐくむための全体計画がありますか。		
	2 豊かな心に関する育てたい子どもの姿は明らかになっていますか。		
指導体制	3 教職員が協力して遂行できる体制を作っていますか。		
	4 各自の役割を全教職員が共通理解していますか。		
教職員間のコミュニケーション	5 教職員間で自由に話し合える雰囲気になっていますか。		
	6 学年会，教科部会などで反省や改善策について話し合う場を設けていますか。		
評価改善システム	7 豊かな心をはぐくむための評価に組織的に取り組んでいますか。		
	8 評価を基に，改善のための話し合いをしていますか。		
	9 改善策を実践したり，次年度に引き継いだりしていますか。		
管理体制	10 校内にカリキュラムセンターのような，指導案や教材，教具を保管する場所がありますか。		
	11 校内でカリキュラムを管理する担当者がいますか。		
学習環境	12 教室内外の学習環境づくりに工夫をしていますか。		
授業評価・単元評価	13 児童・生徒の意見を取り入れていますか。		
	14 単元終了後，見直しのための話し合いをしていますか。		
保護者・地域との連携	15 保護者や地域に積極的に情報を発信していますか。		
	16 保護者や地域の理解・協力を得ていますか。		

### Ⅲ 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（実践編） 《小学校実践事例》

#### 「コミュニケーション能力をはぐくむカリキュラムの組織的な工夫・改善」

水戸市立常磐小学校 URL <http://www.magokoro.ed.jp/tokiwa-e>

#### 1 学校の概要

本校は、県都水戸市の北西部、日本三名園の一つ偕楽園にほど近い市街地に位置する。旧常磐村の中心校として、その歴史は古く、今年度創立133年を迎える伝統校である。周辺は住宅地だが、その開発は比較的早く、県内一の規模の時期もあったが、現在は児童数544名で18学級（特殊教育2学級）である。平成15・16年度県教育委員会学びの基礎を培う学校教育支援事業研究推進校として、「心を通わせ、豊かな人間性をはぐくむ指導の在り方」について研究を行ってきた。続いて、平成17年度には、水戸市教育委員会英会話教育研究開発指定校として、「表現力を高めコミュニケーション能力を楽しむことができる児童を育てるための英会話教育の在り方」について研究を行ってきた。

#### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) 豊かな心の明確化とコミュニケーション能力育成のための英会話の位置付け
- (2) 学年会を中心とし、組織を生かした英会話カリキュラムの作成
- (3) 児童の自己評価、教師の授業評価を生かした計画的、継続的なカリキュラムの改善

#### 3 実践内容

##### (1) 豊かな心の明確化とそのはぐくみ方

豊かな心をはぐくむカリキュラム改善のために、本校職員への豊かな心に関するアンケート調査を実施し、本校児童の実態について分析を行った。

これまで本校では、体験活動を通じた心の教育の研究を進めてきており、調査結果からその成果として「思いやりの心」がはぐくまれてきていることがうかがえた。しかし、その一方、相手の「思いやりの心」を感じ受け止める「柔らかな感性」が不足している、と感じている職員が多いことがわかった。

そこで本校では、これまでの道徳教育の研究成果を踏まえ、「柔らかな感性」という豊かな心を、コミュニケーション活動という体験活動の中ではぐくみたいと考えた。そして、その場合の具体的なはぐくみたい心については、以下のようにとらえ、共通理解を図った。

豊かなコミュニケーションを行うためには、豊かな人間関係が前提となる。お互いが相手の存在を認め合い、そして相手がどのような思いをもって言葉を発しているのかを受け止める心が必要である。その心をコミュニケーション活動における「柔らかな感性」ととらえる。

この「柔らかな感性」をもつには、まず、自分を肯定的に認め、自分に自信をもち、自分を価値あるものと誇れる気持ち、つまり、「自尊感情」の育ちが必要である。また、自分をかけがえのない存在であると思えるとき、相手のこともかけがえのない存在として受け止めること、つまり「他者理解」ができるようになると考えられる。

そこで本校では、はぐくみたい心である「柔らかな感性」を、「自他を尊重し受け容れる心（自尊感情・他者理解）」として全職員で共通理解し、本研究を進めることにした。

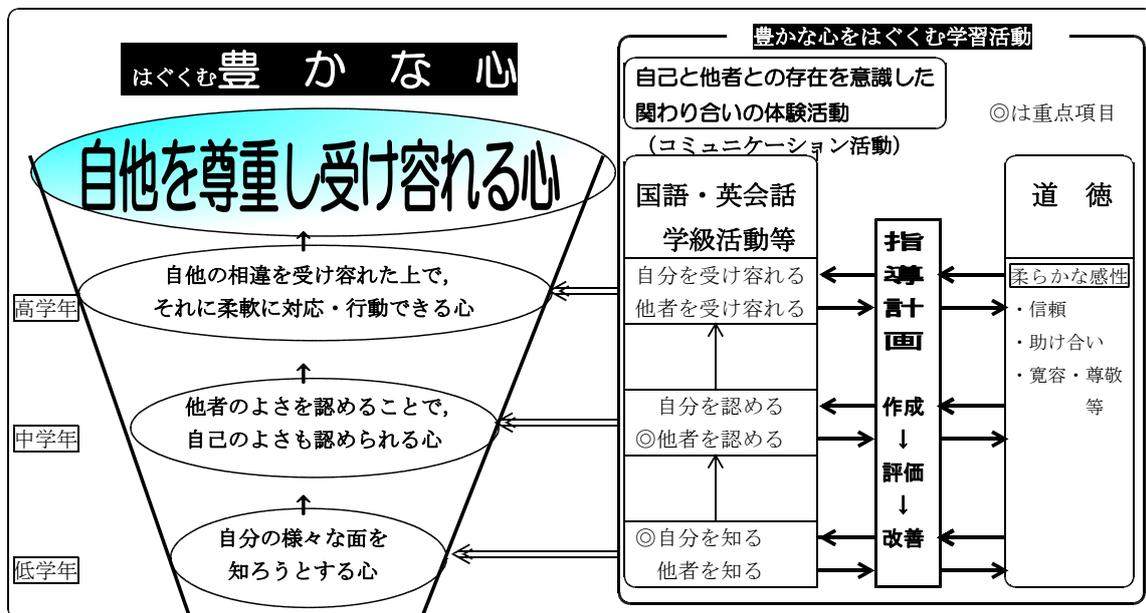
(2) コミュニケーション能力をはぐくむ英会話カリキュラムの位置付け

① 豊かな心をはぐくむ学習活動の全体構想

まず、「自他を尊重し受け容れる心（自尊感情・他者理解）」について、低・中・高学年の各児童の発達段階において期待される行動や心の育ちを分析することで、発達段階に応じた具体像を明らかにした。

次に、豊かな心をはぐくむ学習活動について以下のように考えた。

前年度までの総合単元的な道徳学習の研究成果から、「自他を尊重し受け容れる心（自尊感情・他者理解）」をはぐくむには、道徳学習だけでなく自己と他者との存在を意識したかかわり合いの体験が必要であると考えた。そこで、その体験の場として、コミュニケーション活動を学習活動の中に位置付けた。具体的には、教科（国語・英会話等）・学級活動などの指導計画を道徳学習の指導計画と関連付け、さらに、児童に期待する価値・行動についても明確にし、双方の指導計画を作成・評価・改善していくことで、豊かな心をはぐくむことができると考え、全体構想としてまとめた。



豊かな心をはぐくむ学習活動の全体構想図

② コミュニケーション能力をはぐくむ英会話カリキュラムの位置付け

本校では、全体構想でとらえたコミュニケーション活動の柱として、本市で教科として始まった英会話を位置付け、そのカリキュラムの作成・改善を中心に取り組むことにした。その理由は、英会話を活用しコミュニケーション能力を高めることが、「自尊感情」「他者理解」をはぐくむのに、以下のような点で効果的であると考えたからである。

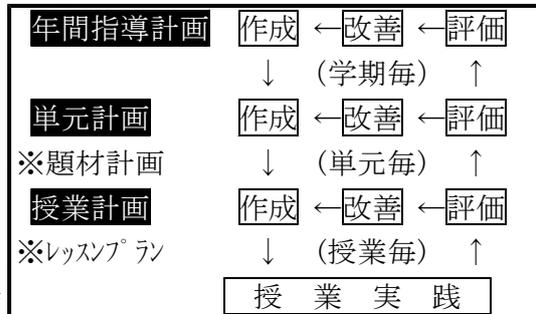
- ・ 会話が目的の学習なので、高学年でも、日常では話しにくい自分自身について照れないうで話すことができ、「自尊感情」をはぐくむことにつながる。
- ・ 身近な日常生活に見られる自己と他者との相違に気付く会話活動の設定が容易なので「他者理解」の場を多くもつことができ、その理解度についてもとらえやすい。
- ・ 児童に共通する会話内容や体験の場が豊富に設定でき、カリキュラムの作成・評価・改善において、教師の裁量による工夫がしやすい。

(3) コミュニケーション能力をはぐくむ英会話カリキュラムの作成

① 英会話カリキュラム作成の手順

英会話を教科ととらえているため、年間指導計画から単元計画、授業計画の作成といった教科カリキュラム作成の流れに準じ、系統性や発達段階を考慮して下図のように行った。なお、豊かな心をはぐくむという視点では、以下の点に留意した。

- ・年間指導計画においては、はぐくみたい心の発達段階を意識して作成を行う。毎学期、見直しを図る。
- ・単元計画においては、豊かな心をはぐくむ体験活動を各単元内に位置付ける。
- ・授業計画については、実践のスタート時期であり、授業を実践しながら毎時間、前時の評価を生かし、その都度作成していく。

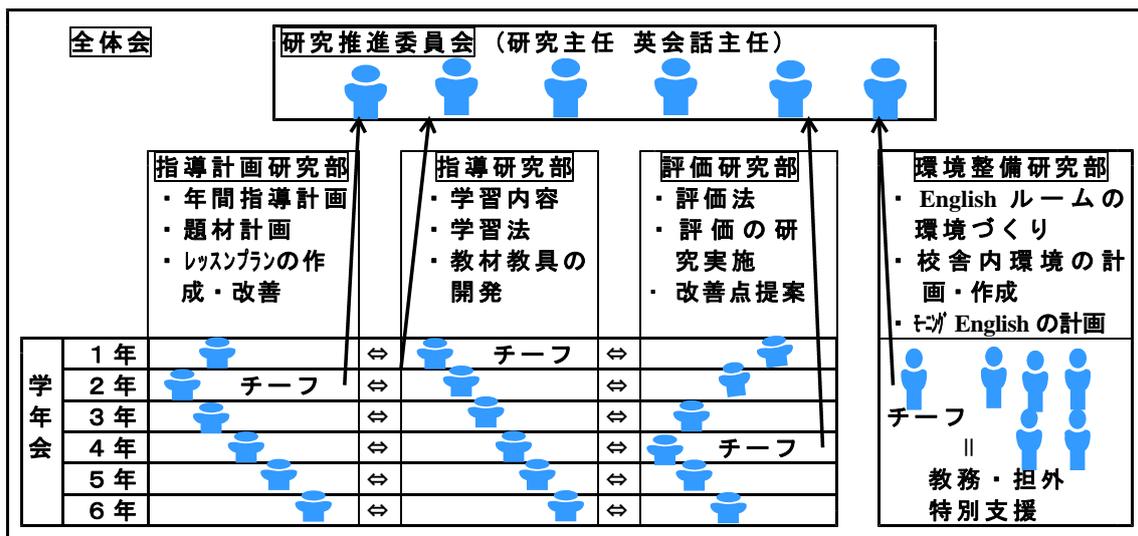


カリキュラム作成の流れ (※は本校の呼称)

② 英会話カリキュラム作成にあたって

ア 学年会を中心とした研究組織

本研究における本校の研究組織は下図のとおりである。



研究組織図

カリキュラムの作成にあたっては、指導計画研究部で原案をつくり、実際の作成は各学年が中心となって行う。各学年の指導計画研究部員からのカリキュラム作成方針を受けて、指導研究部で打ち合わせた指導法や教材、評価研究部で話し合った改善点など、各研究部で打ち合わせた情報を学年に持ち帰り、学年会において学年職員で相談しながら、作成に取り組んだ。

このように、各研究部の縦割りの組織と、学年会という横の組織を意図的・計画的に組み合わせることで、部員会から学年へ、かつ学年から部員会へというように、情報の組織全体での共有化がスムーズに漏れなくでき、効果的で効率的なカリキュラムづくりができたと考える。また、この情報を推進委員会や全体会で共有することにより、さらに教務や担外職員等による効果的な環境づくりもできた。

イ 「はぐくみたい心」を位置付けた年間指導計画の作成

年間指導計画は、水戸市教育委員会作成の年間指導計画を基本として 本校独自のものを作成した。作成にあたっては、「自尊感情」や「他者理解」についての「はぐくみたい心」を位置付け、豊かな心の表れとして「期待される活動」や、その具体的な表現例として「自己表現」の項目欄を設け、評価の観点とした。「題材」名についても、コミュニケーション活動に適した名称にし、さ

例	○水戸市教育委員会作成の英会話教育年間指導計画	
	題材	学校で使うものなあに？（市は11月配当）
	言語材料	・ book notebook pencil desk chair ・ Do you have a book?
	↓	
	○本校の英会話教育年間指導計画	
	題材	お店に行こう（食べ物、学用品、形容詞）
	言語目標	・ (What's your favorite book?) I like story. 以下省略
	はぐくみたい心 (期待される活動)	自分のおすすめの給食を発表することができる 自分の欲しいものを堂々と注文できる <自尊感情>
	自己表現	I like red pencil. She (He) likes red pencil, too.

さらに言語目標の設定や配当月の変更を行い、本校独自の年間指導計画にした。

ウ 体験活動を位置付けた題材計画・レッスンプランの作成

豊かな心をはぐくむ体験活動場面として、下図のように、題材計画の後半の授業の中に「All About Me」（互いに自分について話し合う）を、学期の最終題材として、「Let's Play」（習ったことを使って話し合ってみよう）を位置付けた。

「All About Me」は、題材計画の後半で、既習の英会話表現を用いて、他者に自分の思いや考えを伝える活動で、基本的な自己表現力を高めるとともに、自己理解による「自尊感情」・「他者理解」などの深まりに基づいた発言や行動を発揮する場面として、設定した。

「Let's Play」は、学期末の月を復習の月として設定した。各月の「All About Me」を発展、複合し、さらに、活動時間を十分確保することで、一層はぐくみたい心に近づけたいと考えた。

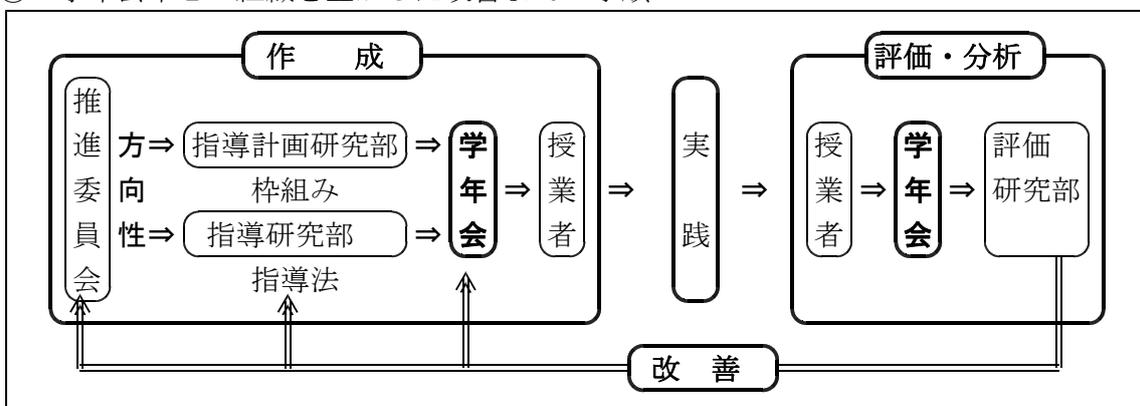
4月				5月				6月				7月			
1	2	3	4	1時間目	2時間目	3時間目	4時間目	1	2	3	4	1	2	3	4
省 略				Greeting	Greeting	Greeting	Greeting	省 略							
				Warm-up	Warm-up	Warm-up	Warm-up								
				Conversation	Conversation	Conversation	Conversation								
				Activity	Activity	Activity	Activity								
						All About Me	All About Me								
		Farewell	Farewell	Farewell	Farewell										

題材計画（単元計画）の一例

(4) コミュニケーション能力をはぐくむ英会話カリキュラムの評価と改善

作成した各指導計画は、実践・評価活動を行い、平成18年度に向けて改善を行った。

① 学年会中心の組織を生かした改善までの手順



② 児童の自己評価、教師の授業評価を中心とした改善

ア 児童の自己評価を生かした改善策と自己評価カードの見直し

豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善のための評価活動として、児童自身の自己評価を重視した。自己評価にはその妥当性に疑問がなくもないが、児童の活動に対する素直な取組の様子を評価の対象とした。

自己評価は、単元末実施の自己評価カード（下図）により行った。平成17年度は、単元内容に関係なく回答の選択肢を固定したが、選択肢を単元内容に即した方が、より適切な改善のための評価ができると考え、選択肢の内容の改善を図った。また、高学年を中心に、選択した理由等の自由記述欄も設けた。これらの自己評価の活用と改善は、年間指導計画や単元計画の改善に有効であった。

イ 教師の授業評価の毎時実施

カリキュラムの評価改善の二つ目の柱として、授業を行い、直に児童と向き合っている教師の授業評価を重視した。方法として、授業後にレッスンプランへの記入を行うとともに、毎時間、学年会で話題として、教師間で評価し合った。このことが直後のレッスンプランの改善に生かされた。授業評価を随時行うことで、子細に適切なカリキュラム改善が図られた。

③ レッスンプラン・題材計画・年間指導計画の改善

ア 楽しさ中心から会話中心のレッスンプランへ

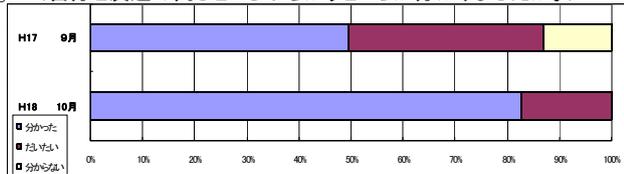
レッスンプランは毎時、児童の実態等に応じ改善を図ってきたが、豊かな心をはぐくむ視点から、特に、「All About Me」を改善の柱とした。昨年度まではゲーム的な活動が多く、楽しくコミュニケーションできたという自己評価結果は得られた。しかし、コミュニケーションの深まりが十分でなく、豊かな心をはぐくむ体験活動場面として機能しにくいとの教師の授業評価もあった。そこで、ゲーム性を少なくし、会話が充実するよう他教科との関連ももたせるなど、現実の生活場面に即した会話のやりとりを多くするよう改善を図った。その結果、自己評価カードからも、会話の充実に満足してきている様子が見えてきた。今後は、道徳や特別活動、総合的な学習の時間、家庭科等の教科を含めた総合的な年間指導計画の作成を視野に入れ、より効果的な改善につなげたい。

イ 交流会の計画的導入を図った題材計画へ

平成17年度の児童の自己評価の自由記述欄には、会話が級友やALTとに限定されているため、さらに多くの外国の方との英会話を望む声が多く書かれていた。そこで今年度は、児童のさらなるコミュニケーションへの意欲を満たすために、どの学年にも1度は外国の方との交流会を年間指導計画に位置付け、実施した。その結果、平成18年度の児童の自己評価からは、各学年とも「自尊感情」「他者理解」に関して向上が認められた。この結果は、教師の観察等による授業評価結果とも一致した。

右図は、児童の自己評価である。これらのことから、交流会は、今年度同様、次年度も位置付けていくこととした。その一方、課題として挙げられたのは、今後交流会の規模をどうするかであった。

＜自分と友達と同じところやちがうところが分かりましたか。＞



交流会実施月の4年生の自己評価

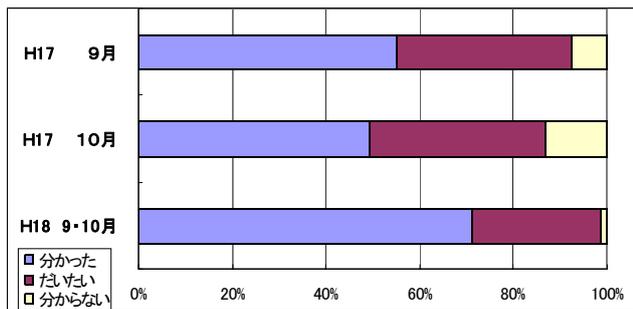
ウ ロングスパンの単元を導入した年間指導計画

平成17年度の教師の授業評価及び児童の自己評価の分析において、一月一単元の設定が短すぎるのではないかと課題が出てきた。その理由として、技能面でせっかく覚えた会話を、十分に使えないうちに次の単元に入ってしまう、消化不良を起こしていることが挙げられた。また、豊かな心の育ちを目指す上でも、高学年では、自分のことを語らせるために単語調べなどに時間が必要だという意見が教師から多く出された。その一方で、低学年からはあまり長いと飽きてしまうという授業評価も見られた。そこで、平成18年度は、1年に1度、一月半から二月程度にまたがる、下図のようなロングスパンの単元を導入した年間指導計画に改善した。

例 5年の自己評価で検証

H17	9月	10月
	好きな運動 (4時間)	わたしの朝食 (4時間)
H18	9月	10月
	わたしの好きなサラダ, 朝食 (8時間)	

＜自分と友達と同じところやちがうところが分かりましたか。＞



ロングスパン実施月の5年生の自己評価

授業実施後、右図の児童の自己評価や教師による授業評価の分析により、ロングスパンの単元の導入は、豊かな心をはぐくむ上で効果が認められたと考える。特に高学年では、十分な英会話活動ができたことで、児童の満足感も高まったと評価できる。また、教師からは、活動内容にバリエーションをつくる楽しさが出てきたとの評価が得られた。その一方、低学年からは、題材的なロングスパンは飽きが来るとの意見もあるため、次年度は、中・高学年についてのみ、年複数回にロングスパンの単元を増やすことにした。

4 本校からの提言

- (1) 教師によるアンケートを実施し、豊かな心を明確化し、共通理解する。明確化した心をはぐくむために、具体的な体験活動を重視したコミュニケーション能力の育成に重点をおき、そのきっかけとして英会話を位置付ける。そのカリキュラムを開発して実践することにより、豊かな心（自他を尊重し受け容れる心）をはぐくむことができる。
- (2) 研究の組織を、学年会を中心とし、各研究部や推進委員会と連携がスムーズに行える部員構成になるよう工夫することにより、組織全体の情報の共有化が図れ、目的の達成に向け効果的で効率的なカリキュラムの改善を推進することができる。
- (3) 評価活動（授業者評価の授業毎の実施・自己評価の単元末実施）を計画的に行い、その結果を、学年会で話し合う。毎学期終了後には学年及び学校全体の分析を行う。この計画的、継続的な評価活動により、カリキュラムの改善が効果的に実施できる。

## 「総合単元的な道徳学習，その実践と改善のための組織的な取組」

土浦市立右粕小学校 URL <http://www.tsuchiura.ed.jp/~migisho/>

### 1 学校の概要

本校は昭和54年4月1日，地域の期待を担って土浦市立中村小学校，東小学校から分離し，開校した。学級数は13で，在籍児童数382人である。本校は開校以来，地域老人会（わかば学級）との連携により，菊づくりやあいさつ運動に継続して取り組んでいる。保護者は教育に対する関心が高く，地域の方々も協力的である。学区に陸上自衛隊霞ヶ浦駐屯地を抱え，全国各地からの転入者が多く，保護者の価値観も多様化している。

### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) 豊かな心をはぐくむための総合単元的な道徳学習の実践
- (2) 改善のための研究組織の見直しと評価の蓄積
- (3) 学年会による単元構想の改善

### 3 実践内容

#### (1) 基本的な考え方

##### ① 豊かな心とふれあい活動について

本校の教育目標である「心身ともに健康で主体的に行動する子どもの育成」を目指して，平成16年度から平成17年度まで土浦市教育委員会研究推進校として道徳教育に取り組んできた。この取組において，研究テーマを「豊かな心をもち，よりよく生きようとする子どもを育てる指導の在り方」と設定し，道徳と教科，体験活動との関連を図りながら総合単元的な道徳学習を展開する中で，豊かな心をはぐくむ実践を行ってきた。その際，本校で特にはぐくみたい豊かな心について，「他を思いやる心，人のために働く心，感動する心，命を大切に作る心」とした。

今年度は，これまでの取組を改善するために教員や保護者にアンケートを実施

し（表1，2），本校ではぐくみたい豊かな心を見直すことから始めた。

これらの結果を基に，職員で話し合いを行った。本校児童のよい点は，素直で優しくよく働くというところであり，一方では言われるまで待っている児童も多く，粘り強さに欠け，あきらめやすいという面も持っているにとらえた。

一方，保護者へのアンケートでは，優しく協力できる子どものよさを認めているという結果が出た（図1）。

表1 右粕小学校の児童のよい点（人）

項 目	人 数
素直	12
よく働く	6
思いやり，助け合いができる	5
縦割り班による支援関係ができています	5
言われたことはきちんとやる	4
あいさつがよくできる	4
明るい	3

（平成18年4月実施 職員18人）

表2 右粕小学校の児童に身に付けたい力

項 目	人 数
粘り強さ	7
自己判断力	6
表現力，コミュニケーション能力	6
自主性，主体性	3
思いやり	2

（平成18年4月実施，職員18人）

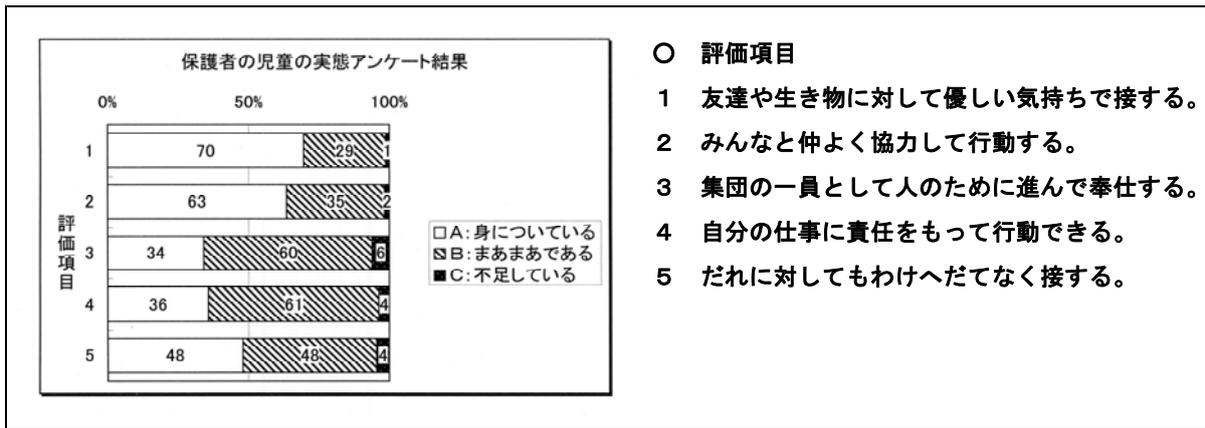


図1 平成17年度保護者のアンケート

(平成18年1月20日実施 保護者246人 回収率 88.2%)

以上の結果をふまえ、本年度の研究の方向性を検討した。その結果、特に本校児童のよさである「思いやりの心」を伸ばすことを中心として、これまでの研究成果を生かすとともに課題となっている点を改善していくことで共通理解を図ることができた。具体的には、本校の特色である異学年集団や地域のお年寄りの方とのふれあい活動を組織的、計画的、継続的に実施していくことで、豊かな心をはぐくもうと考えた。

② 実践に当たっての改善の視点

実践に当たって、次の4点を改善の視点とした。

- ・ 単元構想の実施期間の見直し
- ・ 道徳と学校行事、道徳と教科や特別活動との関連や組み合わせの検討
- ・ 単元構想図の見直し
- ・ 研究組織及び各研究部での活動内容の見直し

③ 改善のための組織の見直し

本校では、研究を進めていくために以下のような組織を考えた。

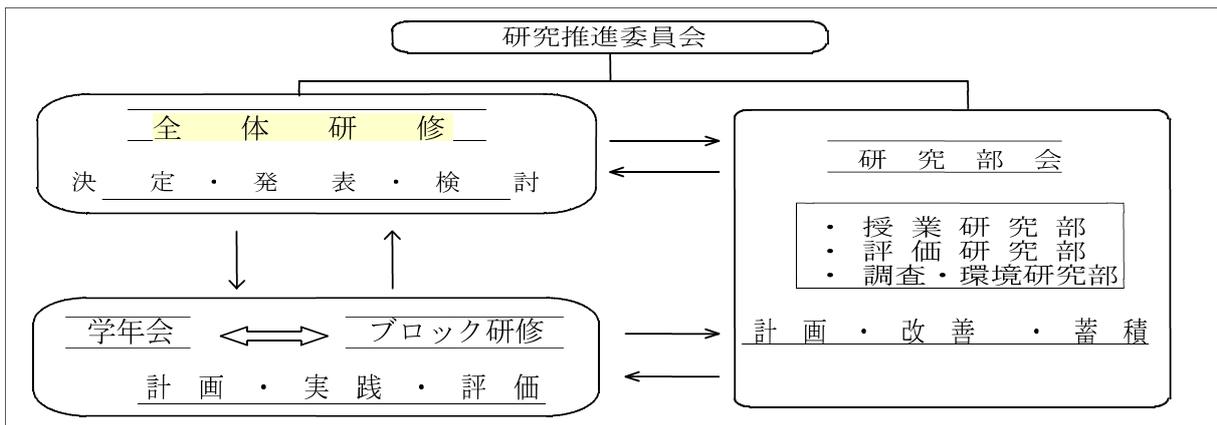


図2 平成18年度の研究組織

昨年度は、総合体験研究部で体験活動と道徳との関連表を作成したり、単元構想図の見直しなどを行ったりしてきたが、2年間の研究でほぼ研究の成果がみられたと考え、活動内容を学年の活動とし、評価研究部を新設した。それは、昨年度までの研究から単元評価や児童の振り返りを計画的に行っていくことが必要であると感じたからである。

新たな研究組織では、学年会やブロック研修の活動と各研究部会での活動を全体研修でまとめ、検討していくことにした。

各研究部会は、学年2クラス編成であるために低・中・高学年の学年ブロックの部員がどの研究部にも属するようにした。そして、各学年の状況や各研究部の様子などが的確に把握できるようにした。従って、各学年からの検討事項が学年ブロックでの話合いを通して、各研究部に伝わるようにした。

(2) 総合単元的な道徳学習の見直し

① 単元構想について

授業研究部を中心に、本年度の単元構想について検討をした。昨年度の反省とアンケート結果を基に、本年度の単元構想として、まず第1に児童の意識の流れを途切れさせないように単元の実施期間の短縮を図ることを考えた。

平成17年度

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
第一学年	単元名 ともだちっていいな (14時間)				単元名 ともだちっていいな (16時間)			

第2に本校の特色であるふれあい活動を充実させ、特に児童の優しさ、思いやりの気持ちをはぐくみたいと考えた。

平成18年度

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月
第一学年	単元名 ともだちっていいな (11時間)				単元名 ともだちっていいな (14時間)			

図3は、平成17年度と平成18年度を比較したものである。

図3 年間計画の比較

ふれあい体験を重視しながら教科等の精選を図ることにより、1学期に実施した単元名「ともだちっていいな」を3時間、単元名「ともだちっていいな」を2時間減らした。

次に、単元構想図(図5)の見直しを図った。「気づくー深めるー広げるー生かす」の4段階は変更せずに、どのような児童の姿が見られたら目標が達成できたかが評価できるように「めざす児童像」を加えた。

② 評価方法の改善(図4)

評価研究部を中心に、昨年度作成した評価シート(茨城県教育研修センター作成の評価シートを基にして作成した)と実施時期方法の検討を行った。評価は、全学年共通している道徳の授業を中心とし、単元終了後教師が評価することにした。評価は、ABCの3段階で、自由記述を大切に、学年の話合いで記入していくことにした。1学期の実践の後、各学年で評価をし、方法、内容等の検討を行った。

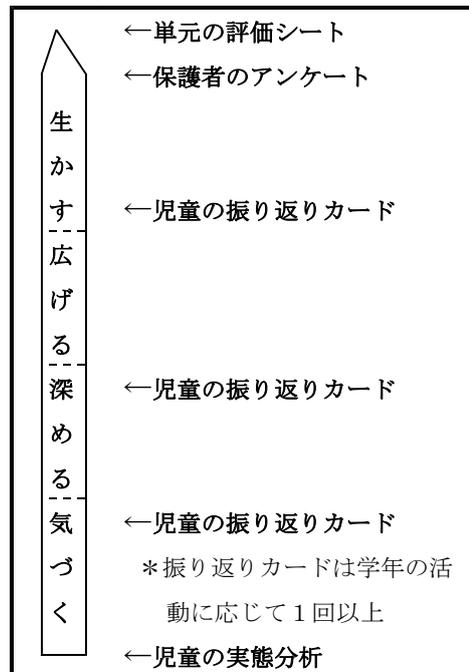


図4 単元での評価の流れ

さらに、教師側の評価だけでは児童の様子が十分には伝わってこないことや、具体的な数値が必要であろうという反省が出され、2学

期の単元では、評価シートに付け加えて児童の振り返りカード(表3)と、保護者から見た児童の成長のアンケート(表4)を実施した。

(3) 改善の実践例(第1学年)

昨年度の単元評価結果を基に、2学期の総合単元的な道徳学習の計画の改善を行った。昨年度は、実態を考慮して学年内でのふれあいを中心ととらえ、信頼・友情をはぐくむ実践をしてきた。ふれあいの充実と体験の重視という見直しの結果と、昨年度の反省の引き継ぎから、単元計画の中に体験的な活動を多く取り入れることにした。

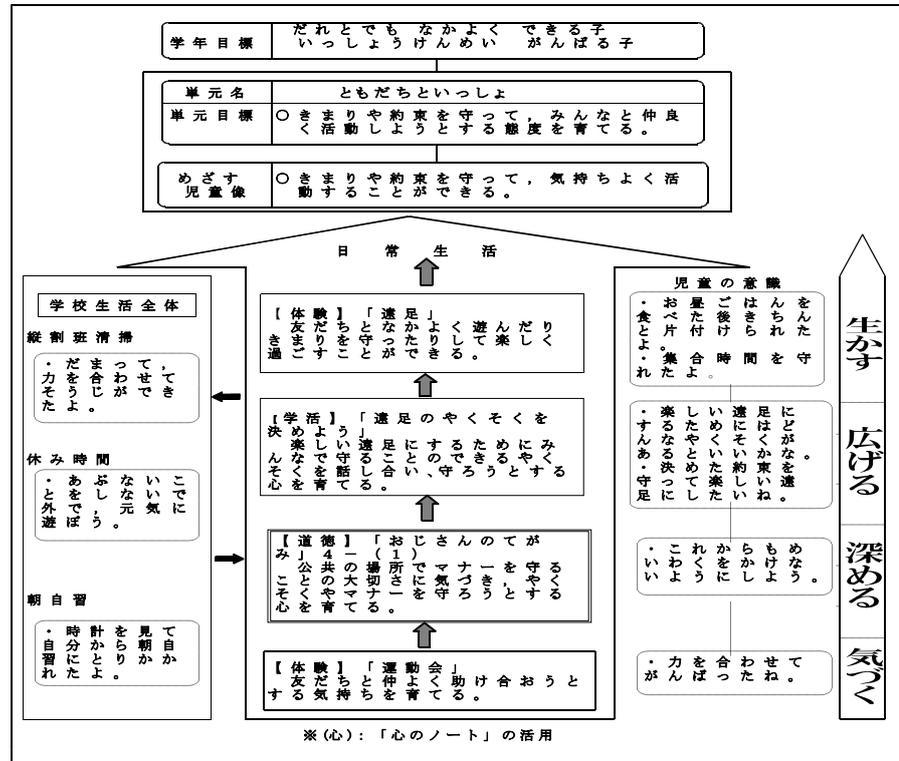


図5 第1学年総合単元的な道徳学習単元構想図

まず、児童の実態を学年会で検討した。

1学期の総合単元的な道徳学習の目標「身近にいる友達と仲よく活動し、助け合うことの大切さに気付こうとする気持ちを育てる。」ことは、「生かす」段階での公園探検を通して、児童からの振り返りカードや観察からほぼ達成できていると判断した。そのため、2学期は総合単元の目標を大きく変え、「きまりや約束を守って、みんなと仲よく活動しようとする態度を育てる。」とした。昨年度と比べると、1学期の目標は同じであったが、2学期は「信頼・友情、助け合い」に「規則の尊重」を加え、自分以外の人とのふれあいを通して得られる集団生活の規範意識の育成という視点を入れてみた。

さらに、体験として運動会と遠足を入れ、多くの人とかわる中で目標にせまれるように考慮した。運動会での上級生の姿やみんなががんばったことなどから、協力することの大切さに気付くことができた。

表3 1年遠足の振り返りカード集計(%)

項目	よくできた	できた	あまりできなかった
① みんなでできたやくそくがまもれましたか。	82	15	3
② あいさつやおれいのことばをいえましたか。	94	4	2
③ みんなとなかよくなつてきましたか。	78	16	6
④ まもれないともだちにおしえてあげられましたか。	62	25	13

自由記述  
 ・友達に教えてあげた。  
 ・バスの中で大声を出さなかった。  
 ・お弁当のゴミが拾えた。  
 ・お手伝いしてあげた。  
 ・運動会の手紙を友達に渡した。

(1年生68人実施)

表4 1年生保護者児童の成長アンケート(%)

項目	成長している	よくできている	できている	成長があまりない	できていない
① お家の方のやくそくや学校のきまりを守ろうという意識が高まっていますか。	16	34	38	12	0
② お家の方のやくそくをきちんと守っていますか。	7	25	48	19	1
③ 公園等の公共の場で、まわりに迷惑をかけないように気をつけている様子が見られますか。	13	27	39	21	0
④ お子さんが、まちがいを正したり、注意している場面を見たことがありますか。	9	24	46	16	5

上の③や④で見られた子どもの具体的な姿  
 ○ 順番に並んで遊んでいる。  
 ○ ルールを守れない子に注意してあげている。  
 ○ 自分から謝ることができるようになってきた。  
 ○ ゴミを持ち帰ったり、公衆トイレを汚さないように使ったりしている。

(平成18年10月25日実施 68人提出)

この気付きを基に約束やきまりを自分たちで考える場面をつくり、その意味を実感できるような活動の流れを考え、実践を進めた。その結果、遠足後の振り返りカードには、約束を守れたことで自信を深めたり、約束の大切さに気付いたりする内容が見られた。振り返りカードの活用は、児童が自分の行動やがんばったことに気付き、学習を振り返る機会となるとともに、教師側は児童の変化のみとりに感じられることができ、有効であった。

(4) 総合単元的な道徳学習の改善への組織的な取組

① 研究組織でのカリキュラム改善

ア 評価研究部会

評価研究部は単元評価シートの作成及び改善をし、道徳を中心にした単元評価結果の蓄積を行っている。

学年で評価したものを研究部で回収し検討した後、学年ごとのファイルに入れ、いつでも見られるようにしている。道徳的価値とふれあい体験活動との関連性については、大きく変わることはないので、学年による見直しにとどめている。

今年度、振り返りカードの作成と検討を行った。実施時期と回数については、単元の中で特に児童の主体的な活動が求められるときに実施することにした。継続的な活動により、学年のファイルに蓄積され、児童の変容のみとりにもつなげる結果となった。始めは「縦割り班でゲームをして楽しかったです。」などの表面的な記述が多く見られたが、後に「花送り集会で6年生の言葉を聞いて、わかば学級の先生方に感謝の気持ちが深まりました。」など児童の気持ちの深化がうかがえる内容が多く見られるようになった。

イ 授業研究部会

授業研究部は、昨年の単元構想図に目指す児童像を入れて、単元として目標がより具体的に実現できるよう改善を図った。各学年で作成された単元構想の期間が短縮されているか、ふれあい活動が強化されているかを検討し、全体計画の作成を行った。また、授業研究の計画、実施を行った。

ウ 調査・環境研究部会

調査・環境研究部では、昨年度までの教室や廊下の環境整備を継続して行った。また調査に関しては、昨年度は学期に1回定期的に、多岐にわたる内容のアンケートを学校全体で実施していたが、広く児童の変容をみるには有効であっても、総合単元的な道徳学習を実施し、単元毎に児童の変容をみるには不十分であるとの意見が多く出た。そこで、今年度は総合単元的な道徳学習の活動前と後にアンケートを実施することにした。活動のねらいとする点を細かく項目化してアンケートを作成し、実施、分析することにした。このアンケートをとったことで、児童の小さな変化もみとることができるようになった。また、保護者への児童の成長アンケート（表4）を実施した結果、学校で力を入れて取り組んでいる内容の理解にもつながり、家庭でも子どもの変化を意識して見守ってもらうことができた。さらに、家庭でも、ねらいにせまる働きかけや声かけを協力してもらえる結果となり、児童へのよい環境づくりにもつながった。

② 学年会での取組

計画・実践の中心となる各学年では、昨年度の評価や反省を引き継ぎ、児童の実態に

合わせて単元を構想した。児童が書いた感想やアンケート等を蓄積していく必要性を感じ、学年ごとにファイルに保存し、来年度の改善に役立てることにした。

(5) 児童の変容

2学期が終了したところで教師のアンケートをとった。その結果は以下（表5）のとおりである。

本校で目指す豊かな心はぐくまれているかという視点で考えてみると、素直でよく働くことに加え、思いやりや縦割り班による支援関係での伸びが読み取れる。それは、児童の多くがふれあい体験活動の中で、豊かな体験をしたことによるものと考え。目指す児童像として掲げた目標に沿って指導され、児童が多くふれあい活動の中で、思いやりの心を醸成し、それぞれの学年で成果がみられたものと考え。

表5 教師に対するアンケート調査

項 目	○	●
素直	16	0
よく働く	14	2
思いやり	17	1
縦割り班による支援関係	17	0
言われたことはきちんとやる	12	5
あいさつがよくできる	10	7
明るい	15	3
粘り強さ	0	16
自主性、主体性	1	15
表現力、コミュニケーション能力	0	16

4 本校からの提言

(1) 総合単元的な道徳学習について

単元構想の段階で、単元構想図に基づいて学年で話し合うことで、道徳と体験学習のつながりを考えながら、道徳的な価値の日常化を図る計画を立てることができる。

よくできるようになったところ ○  
まだ指導が必要だと思われるところ ●

(2) 研究組織の見直し

新たな評価研究部を立ち上げるなど、組織の見直しを行うことで、教員の実践への意欲を高めることができる。

(3) 評価を蓄積する

評価の蓄積により、年度末の学年毎のファイルには単元の評価シートや児童の振り返り、保護者によるアンケートなど様々な評価結果が綴じられる。

評価の蓄積が改善の基になる。それを数年蓄積していくことが必要である。本校はまだその途中にある。特に児童の変容をみとれる評価を大切に、蓄積していく必要がある。

(4) 評価の視点を明確にする

単元の流れ（気づく→深める→広げる→生かす）の中に評価を位置付けたことは、確かな学習の流れを保障することになる。そして、児童の振り返りカードや保護者からの成長アンケートなど多面的な評価の必要性も職員の声として出てきた。評価の視点を明確にすることで、評価者はより質の高い評価を得ようとする。

(5) 学年会による単元構想の改善をする

単元計画を作成し実行し改善していく原動力は学年会である。児童のことをよく知っている学年担当が、児童のよさを伸ばすことを第一に考え、児童の成長を確かめながら、単元構想に取り組むことができる。

## 「地域の人々との交流を生かした体験活動の実践と改善」

古河市立八俣小学校 URL <http://www.koganet.ne.jp/~yamatae/>

### 1 学校の概要

本校は、古河市の東端に位置し、緑豊かな田園の中に新興住宅地が点在する地域にある。学校規模は、児童数524人、学級数19学級である。広い敷地に樹木や草花が育ち、飼育している動物も多いなど、豊かな情操をはぐくむ環境があり、児童も明るく伸び伸びと生活している。

### 2 特に力を入れてきた取組

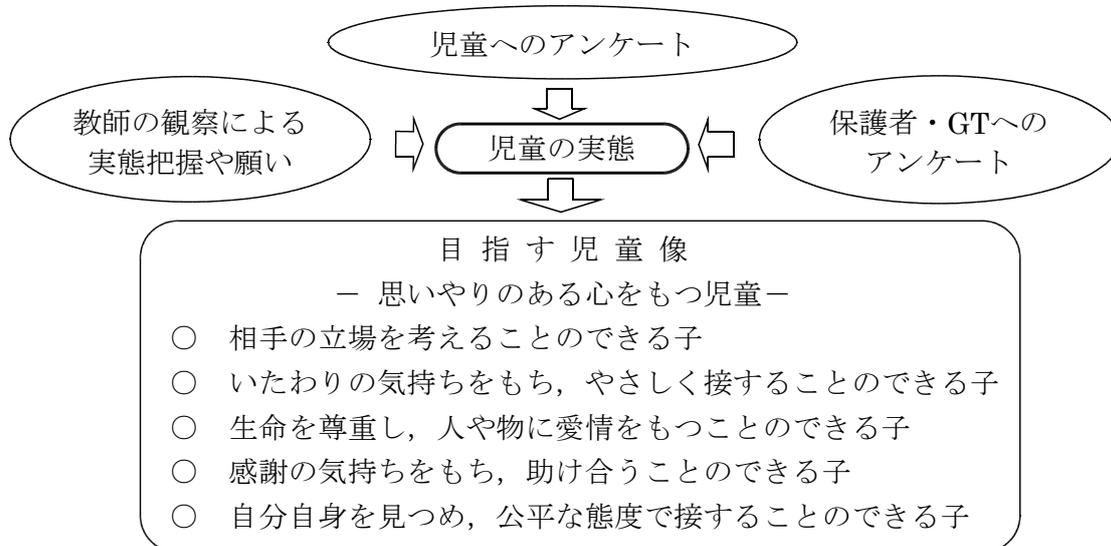
- (1) 目指す児童の姿の明確化
- (2) 地域の人的資源を生かした体験活動の積極的導入
- (3) 多様な評価を生かしたカリキュラムの見直し・改善

### 3 実践内容

#### (1) 目指す児童の姿の設定

指導の中心となる道徳の時間における価値の明確化を図るために、目指す児童の姿を設定し、教師が共通理解するようにした。

目指す児童の姿の設定にあたっては、児童の生活状況について、学年会や道徳部員会で話し合うとともに、保護者やゲストティーチャーにもアンケートを実施した。また、児童にも道徳性に関するアンケートを実施し、実態を把握するようにした。



#### (2) 地域の人々との交流を生かした体験活動の計画・実施

本学区は学校に協力的な地域であり、これまでも多くの保護者やゲストティーチャー、ボランティア団体などが本校の教育活動にかかわってきた。一方で、年々核家族化が進行し、地域の行事等も少なくなってきたり、児童の地域への所属感も薄れつつある。

そこで、学校の教育活動において、児童が地域の人々と交流することを通して、本校の目指す「思いやりのある心をもつ児童」の姿にせまることができると考え、地域の人材等を生かした多様な体験活動を計画した。

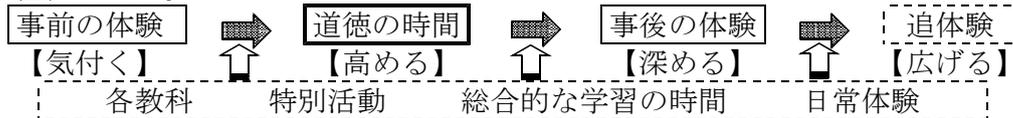
① 交流を生かした体験活動の基本的なとらえ方

児童の発達段階や生活経験を考慮し、各学年ブロックごとに、交流を生かした体験活動を次のようにとらえた。

- ・低学年：地域の幼稚園児や生き物との交流を通し、目指す児童の姿にせまる。
- ・中学年：地域の団体や人々との交流を通し、目指す児童の姿にせまる。
- ・高学年：地域の施設や団体、多くの人々との交流を通し、目指す児童の姿にせまる。

② 指導過程における体験活動の位置付け

児童の道徳性の発達を効果的に促すことができるよう、体験活動を以下のように指導過程に位置付けた。



【事前の体験】 道徳の時間に取り扱う道徳的価値への気付きと意識付け

【事後の体験】 道徳の時間に高めた道徳的実践意欲を発揮する場の確保

【追体験】 道徳的実践意欲の定着と道徳的習慣の形成

③ 体験活動の内容（平成18年度）

	教科等及び単元・活動名	交流する人材及び活動内容
第1学年	生活「ともだちいっぱい作るんだ」 「異学年との交流会」（事前：5時間） 生活「おおきくなったね、かわったね」 「ポニー教室」他（事後：3時間）	幼稚園児・2年生・6年生：交流給食，学校案内，歌や遊びでの交流，水泳 小動物との触れ合い：ウマやヒツジの毛刈り
第2学年	生活「みんなでつくろうフェスティバル」 「フェスティバルをしよう」（事後：2時間）	自然博物館学芸員：標本を使用した生き物についての説明 地域住民：野菜栽培の説明や畑作りの協力，手話 保護者：作物の収穫や町探検での手伝い 1年生：学校案内や遊び
第3学年	特別活動「ぼく・わたしのたん生」 「保健師さんの話を聞こう」（事前：1時間） 社会「くらしを守る」 「消防署に行こう」（事後：2時間）	保健センター職員：胎児の話，人形を使つての赤ちゃんの抱き方や扱い方の説明 消防署員：安全な暮らしを守るための仕事についての話
第4学年	音楽「お祭りや民謡めぐり」 「和楽器に親しもう」（事前：3時間） 社会「きょう土に伝わるねがい」 「昔のくらしについて聞いてみよう」（事後：2時間）	地域のお年寄り：民謡・太鼓・三味線・尺八等の演奏，太鼓の打ち方の指導 地域のお年寄り：昔の道具や暮らしについての説明
第5学年	総合「広げよう福祉の輪」 「車いす・高齢者疑似体験」（事前：4時間） 「特別養護老人ホーム訪問」（事後：3時間） 「ビデオレターで元気を届けよう」（追体験：10時間） 「一人一鉢運動」（事後：常時）	特別養護老人ホームのお年寄り：車いすを押してのオリエンテーリング，お茶の時間の手伝い，体操，ビデオレター，お花のプレゼント
第6学年	総合「地球発見！世界の中の日本」 「そば打ち体験」（事前：2時間） 「日本文化体験」（事後：2時間）	地域住民・保護者：日本そばの打ち方の指導，お世話になった方々へのご馳走 夢現100塾出前講座の講師：茶道・華道・着付け・日本舞踊・和太鼓・三味線の指導

④ 地域の人材等の活用における工夫点

本校では、多くの地域の人々や団体等に学校の教育活動に参加していただくにあたり、以下のような工夫をしている。

- ・協力をいただく人材等について、学年会のみでなく研究推進委員会でも話し合うことで、より広い範囲から適任者をお願いできるようにする。
- ・協力をいただいた人材等について、学校の人材バンクに登録する。その際、氏名や所属のみでなく、児童との活動内容等も記録し、次年度に引き継ぐようにする。

(3) 総合単元的な道徳学習の「単元構想案」の作成と見直し・改善

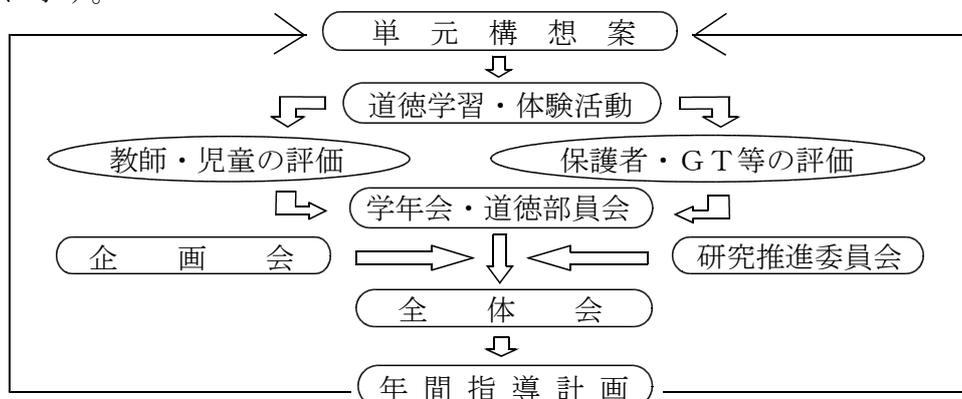
① 総合単元的な道徳学習の「単元構想案」について

児童の豊かな心は、学校においては全教育活動を通してはぐくむものであり、また、心をはぐくむためには長い時間を要することが多い。そこで、本校の目指す「思いやりのある心をもつ児童」を育てるために、道徳の時間を中心に、各教科、特別活動、総合的な学習の時間を関連させ、体験活動を生かしながら長いスパンの見通しをもって指導にあたるよう、次ページに示すような総合単元的な道徳学習の「単元構想案」を、各学年で作成した。作成にあたっては、次のような点を工夫した。

- ・全教育活動を通して思いやりの心をはぐくむために、各教科や学校生活における思いやりと関連する活動を洗い出し、一覧とする。
- ・道徳の時間をかなめとする中心となる活動については、時系列的に示すことにより、活動の流れを把握しやすくする。

② カリキュラム改善の流れ

上記の「単元構想案」を実施し、その結果に対する評価を基に構想案を見直すことを通して、豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善を図っている。その全体的な流れを下の図に示す。



③ 多様な評価を生かした「単元構想案」の見直し・改善の実践例（第5学年）

ア 平成17年度の実践から

総合的な学習の時間に実施した「特別養護老人ホーム訪問」について、学年会の話し合いによる評価より、次のような課題や解決策が明らかになった。

- ・訪問を事前に行ったので、高齢者と触れ合う経験の少ない児童にとっては、どのように接してよいか分からないまま終わってしまうこともあった。そこで、高齢者の思いを知る手がかりとするために、事前活動として、高齢者擬似体験や車いす体験を実施する。そして、「特別養護老人ホーム訪問」は事後活動に位置付けた方が、効果的であると思われる。

また、年度末の学校評価においては、次のような成果や課題が指摘された。

- ・「一人一鉢運動」でお世話になった方に花を届ける活動を行うことで、1学期に交

流した特別養護老人ホームの高齢者と再び交流できたのはよい体験となった。しかし、冬の訪問は、老人ホーム側からはあまり歓迎されない。

平成18年度 思いやりのある心をもつ児童を育てるための単元構想案 (第5学年)

総合的な学習の時間	体験活動		各教科, 特別活動, 学級経営
<p>「<b>広げよう福祉の輪</b>」 全ての人の幸福と、そのために自分にできることは何かを考え、それについて調べ、自分たちにできることを実行する。</p> <p>○<b>車いす体験</b> ○<b>高齢者擬似体験</b> 車いすで生活することや体が思うように動かないことの大変さを体験し、相手の立場に立った介護の在り方について考える。</p> <p>○<b>特別養護老人ホーム訪問</b> 特別養護老人ホームで高齢者と交流し、思いやりの心で接する。</p> <p>○<b>点字体験</b> ○<b>手話体験</b> ○<b>盲導犬体験</b> ボランティアリーダーの指導のもとに、点字や手話、盲導犬の体験活動を行い、体に障害のある人々に対する理解を深める。</p> <p>○<b>一人一鉢運動</b> 種から花を育て、お世話になった特別養護老人ホームの人たちに届け、交流する。</p>	<p><b>登下校</b> 通学班で、下級生に対して親切にする。</p> <p><b>道徳コーナー</b> ○「<b>やさしさの広場</b>」 友だち、家族、地域の人たちとの交流の中で、親切に対しての「ありがとうカード」を書き、感謝の気持ちをもつ。</p> <p><b>2年生との交流</b> 2年生との交流の中で、思いやりの心をもって接したり、親切にしてあげたりする。</p> <p><b>交流給食(給食)</b> 他の学年と給食の準備や会食を通して交流する。</p>	<p><b>【事前の体験】</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>「<b>広げよう福祉の輪</b>」(総合) 各自の課題に沿って調査活動を進める。 ☆<b>車いす体験</b> ☆<b>高齢者擬似体験</b></p> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p><b>【道徳の時間】</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p><b>困った人の身になって</b> 「<b>がんばれおばあちゃん</b>」 困っている人を見たときには、その人の身になって考え、親切にしようとする態度を育てる。</p> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p><b>【事後の体験】</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>「<b>広げよう福祉の輪</b>」(総合) すべての人の幸福について、自分たちにできることを考え、実行する。 ☆<b>特別養護老人ホーム訪問</b> ☆<b>一人一鉢運動</b></p> </div> <p style="text-align: center;">↓</p> <p><b>【追体験】</b></p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> <p>「<b>ビデオレターで元気を届けよう。</b>」(総合)</p> </div>	<p>各教科, 特別活動, 学級経営</p> <p><b>係活動</b> 学級のために自分の係の仕事を誠意をもって行う。</p> <p><b>委員会活動</b> 全児童が楽しい学校生活を送れるように、自分の仕事を責任をもって行うとともに、下級生の役に立つ行動をとる。</p> <p><b>国語</b> 「<b>新しい友達</b>」 互いのよさ、個性を認め合うことが真の友情であることを感じ取る。</p> <p><b>宿泊学習</b> 友だちと力を合わせて働き、生活する中で、友だちのよさを見つける。</p> <p><b>理科</b> 「<b>生命のつながり</b>」 動物の発生や成長について調べることを通して、命が大切なものであり、お互いの命、個性を尊重することの大切さを感じることができる。</p> <p><b>音楽</b> 「<b>音の重なり</b>」 音の重なり合う美しさを求め、友だちと協力しながら活動することを通して、友だちの演奏のよさを聞き取る。</p> <p><b>運動会</b> 運動会を成功させるために、自分に与えられた係の仕事を一生懸命行い、友だちと協力する中で、信頼関係を築く。</p> <p><b>社会</b> 「<b>わたしたちの生活と工業生産</b>」 人にも地球にもやさしく安全な車の開発について調べる。</p> <p><b>家庭</b> 「<b>家族とのふれあいを楽しもう</b>」 家族を思いやり、楽しく困らんするためにはどうしたらよいかを考え、計画を立てる。</p> <p><b>学級活動</b> 「<b>友だちのよさを見つけよう</b>」 お互いの長所を認め合い、仲良く生活しようとする。</p>

そこで、道徳部員会の話し合いを基に、次年度に向けて次のような改善を図ることとした。

- ・思いやりの心育てる総合単元的な道徳学習の事前の体験として、「車いす体験」、「高齢者擬似体験」と「2年生との交流」を位置付けるとともに、心のノートに思いやりのある

行動について記入させ、自分自身の思いやりや親切について考えるきっかけとする。

- ・ 1学期の終わりに事後の体験として「特別養護老人ホーム訪問」を位置付け、思いやりのある行動の実践の場とする。

イ 平成18年度の「単元構想案」の作成と実践

上記アの見直し・改善を生かし、平成18年度の「単元構想案」を前ページのように作成し実施した。(表中 **.....** の枠が見直し・改善を反映させた部分、矢印は活動の流れ)

ウ 平成18年度の見直し・改善

7月の「特別養護老人ホーム訪問」の活動について、教師の観察、児童の反省カード、保護者の感想記入用紙から、次のような評価が得られた。

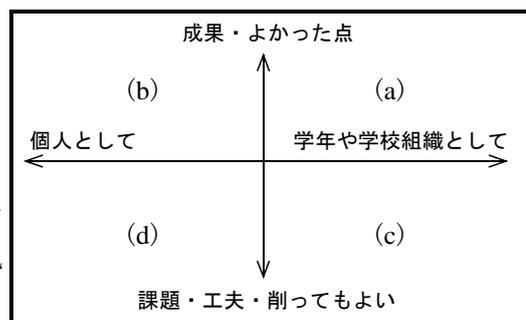
- ・ 事前に高齢者の大変さを学んでおいたことにより、高齢者のペースに合わせて交流しようとする児童が多かった。
- ・ 高齢者が喜ぶ姿に感動したり、喜んでもらったことへの充実感を感じたりする児童が多く、活動後の「体験活動振り返りカード」には、「継続して訪問したい。」という内容の感想が多く見られた。
- ・ 保護者からも、1回きりの訪問のための親切ではなく、続けて交流する中で思いやりや親切を身に付けてほしいとの感想をいただいた。

さらに、10月の道徳の授業「人の心にふれて」においても、児童から特別養護老人ホームの再訪問を希望する声が多く聞かれた。

そこで、これらの評価を基に研究推進委員会で話し合い、年度途中における追体験として「ビデオレター」の活用による交流（特別養護老人ホームよりかぜ予防のため冬場の訪問は遠慮してほしい旨の要望あり）を設定し、実施した。（「単元構想案」の表中 **=====** の枠部分）

なお、2学期末には、これまでの地域の人々との交流を生かした体験活動への取組を評価し改善するため、次のような研修を行った。

- ・ 各教職員が、これまでの取組について「成果・よかった点」、「課題・工夫・削ってもよい」の視点から振り返り、その内容を付箋紙に書き出す。
- ・ 付箋紙を、右のシートの上に分類して貼る。その際、内容の類似するものどうしをまとめ、見出しを付ける。
- ・ 分類した結果について話し合い、成果の上がった取組については今後さらに発展させ、課題については改善策を考える。



今回の評価では、表中(a)としては、豊かな心をはぐくむことについての学校教育目標の具現化や保護者・地域との連携、(b)としては、ゲストティーチャーとのチーム・ティーチングによる成果、(c)としては、授業時数の確保やゲストティーチャーとの事前打合わせの充実、(d)としては、教職員の忙しさなどが挙げられた。そして、(c)や(d)の課題に対しては、「単元構想案」を中心とした指導計画におけるねらいのさらなる明確化と指導内容の精選などの解決策が出された。

また、以上の実践や研修を通して、各教職員は話し合いによる評価と改善の有用性を実感

するようになり、その後の教育課程の見直し・改善への取組の充実につながった。

④ 他学年における体験活動の見直し・改善

	平成17年度	改善点	平成18年度
第1学年	生活「ともだちいっぱい作るんだ」 <b>「2年生との交流会」</b> (事前:5時間) ・歌や遊びなどを通して交流する。	・かかわりを、2年生の他に高学年や幼稚園児にも広め、思いやりの心を高めたい。	生活「ともだちいっぱい作るんだ」 <b>「異学年との交流会」</b> (事前:5時間) ・学校案内や交流給食などの活動を加え、幼稚園児や6年生とも交流する。
第2学年	生活「みんなでつくろうフェスティバル」 <b>「フェスティバルをしよう」</b> (事後:2時間) ・1年生を招待し、おみこし、お店やさんなどを、1・2年生全員で行う。	・G Tを招待したり、2部構成にしたりすることで、多様な活動の中で多くの触れ合いができるようにする。	生活「みんなでつくろうフェスティバル」 <b>「フェスティバルをしよう」</b> (事後:2時間) ・1年生やG Tを招待し、第1部「教えてあげよう」、第2部「楽しく遊ぼう」にする。「ありがとうの木」を利用し、感想発表の時間を確保する。
第3学年	総合「古河市について調べよう」 <b>「ふきの芽会との交流」</b> (事前:2時間) ・「ふきの芽音頭」を教わる。	・地域の「ふきの芽まつり」などで、既に「ふきの芽音頭」を知っている児童もいるので、活動の内容を変更する。	特別活動「ぼく・わたしのたん生」 <b>「保健師さんの話を聞こう」</b> (事前:1時間) ・赤ちゃんの抱き方などについて教わる。
第4学年	特別活動「地域の人とふれあう」 <b>「ゲートボールを教わろう」</b> (事後:2時間) ・地域のお年寄りからゲートボールを教わる。	・児童のゲートボールへの親近感が薄いので、他の活動で地域のお年寄りと交流するようにする。	社会「きょう土に伝わるねがい」 <b>「昔の暮らしについて聞いてみよう」</b> (事後:2時間) ・地域のお年寄りから昔の暮らしについて聞く。
第6学年	総合「地球発見、世界の人とふれ合おう！」 <b>「そば打ち体験」</b> (事前:2時間) ・地域の人や保護者からそば打ちを教わる。	・三和町から古河市になり、外部講師を招聘できる範囲が広がったので、新たに伝統的な日本文化についての専門的な講師を招聘し、体験活動を行う。	総合「地球発見！世界の中の日本」 <b>「そば打ち体験」</b> (事前:2時間) <b>「日本文化体験」</b> (事後:2時間) ・夢現100塾出前講座により、茶道や華道、着付けなどの日本文化について、体験を通して学ぶ。

4 本校からの提言

- (1) 豊かな心をはぐくむための指導計画の作成にあたっては、目指す児童の姿を明確化するとともに、長期的な見通しの下に、道徳性の発達の視点から各活動を段階的に設定する。
- (2) 児童が人とかかわりながら豊かな心をはぐくむ取組を充実させるために、学校の外部の人的資源にも目を向け、地域の人々との交流を生かした体験活動を積極的に導入する。
- (3) 児童や教師に加え、保護者やゲストティーチャー等の外部の人々からも評価をもらうことで、地域の人的資源を生かした活動のよりよい見直し・改善を図る。また、その際には、学年会や研究推進委員会等の組織による話し合いを充実することにより、より効果的な教育活動を展開する。
- (4) 本校では、本実践を通して評価や見直し・改善に対する教職員の意識が高まり、話し合いにおいても多くの意見が出されるようになった。実際に全教職員で活動の評価や見直しと改善に取り組むことで、その有用性を実感することが大切である。

《中学校実践事例》

「ハートフル委員会による自己肯定感のはぐくみ」

日立市立多賀中学校 URL <http://www.taga-j.hitachi-kyoiku.ed.jp/>

1 学校の概要

本校は日立市の中央に位置し、通常の学級14、特殊学級3の計17学級という中規模校である。周辺には、茨城大学工学部をはじめ高等学校や専門学校があり、市内でも文教地区として保護者の教育的関心が比較的高い地域である。本校では、平成12年度から現在まで、学校経営方針の中に「広場」の概念を取り入れ、それを基本理念として活力ある教師集団による開かれた学校づくりに努めている。

2 特に力を入れてきた取組

- (1) 「広場」の概念と「豊かな心」についての共通理解
- (2) 組織的な取組を機能させるためのハートフル委員会の新設
- (3) 自己肯定感を高める全教科、領域における授業評価や単元評価の実践

3 実践内容

本校では、平成12年度から「広場」の概念を生かした教育実践に取り組んでいる。特に平成17年度からは、下図のように今までの実践を生かした豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善に取り組んでいる。

＜カリキュラムの改善に関する取組の概要＞

	平成12～16年度	平成17年度	平成18年度
テーマ	「広場」のある授業の創造	自立心をはぐくむ「広場」づくり ⇒自己肯定感を高める「広場」づくり	自己肯定感を高める教育活動の実践
組織	◎課題研究全体研修 ◎研究推進委員会 ◎教育課程検討委員会	◎学校課題研究組織（継続） ◎ハートフル委員会（新設） ◎教育課程検討委員会（継続）	◎ハートフル委員会
主な取組	○「広場」の概念の確立 ○「広場」の様相の具現化 ○授業改善 ・学習意欲を高める授業づくり ・分かる授業の創造 ・個に応じた指導の充実	○確かな学力の定着を図る授業改善 ○豊かな心をはぐくむ校内体制作り ・個に応じた指導の充実 ・「広場」の概念についての再確認 ・豊かな心の理解 ・豊かな心をはぐくむ組織づくり ・カリキュラム改善のイメージづくり	○生徒一人一人の自己実現を図り豊かな人間性の基礎をはぐくむ教育活動の工夫改善 ・「広場」の概念の理解促進 ・組織の見直しと役割分担の明確化 ・学校評価の充実と活用 ・研修内容の充実
実践例	・研修内容の精選と研修体制のスリム化 ・一人一研究の実践 ・授業研究の実践 ・「広場」の様相を具現化した指導案作り ・評価基準の明確化 ・実態調査と分析結果の共有 ・補助簿、個人カルテの作成と活用 ・自己評価、アンケート評価の活用 など	・学習形態を工夫した「広場」のある授業の実践 ・発問、板書、資料活用の工夫 ・研修内容の検討と研修計画の作成 ・豊かな心に関するアンケートの実施と分析 ・学校行事を中心とした教育課程の見直し ・学校経営評価、授業評価、生徒用アンケートの実施と分析 ・単元計画及び年間計画の修正 など	・教科の特性に応じた自己実現のとらえ方についての認識と共有 ・一人一人が生きる学習内容と形態の工夫実践 ・生徒を主体とした特別活動の充実と推進 ・個人の意見が尊重される道徳授業の実践 ・授業評価の実践と分析結果の共有 ・ハートフルセンターによる資料の共有、保存 ・学校行事の単元計画作成 など

- (1) 「広場」の概念と「豊かな心のはぐくみ」との関連における共通理解

本校における「広場」の概念は、“学力のはぐくみ”と“心のはぐくみ”という両面を併せ持っていたにもかかわらず、「確かな学力の定着」の側面だけに主眼が置かれていた。また、時の経過とともに、教師間の「広場」のとらえ方にばらつきが出てきたため、原点に戻り、平成17年度より全体研修会を実施しながらその内容についての共通理解を図った。

本校で言う「広場」とは、生きる力の習得をねらいとして教師により意図的に構成された学習の場と環境である。この

「広場」の様相	豊かな心をはぐくむ学習活動の場
温かい人間関係と交流	磨き合い、高め合い、助け合いの場
個性が認められる	関心・意欲，存在感が感じられる場
間違いが許される	間違いから新しい学びが生まれる場
身近な教材の活用	保護者や地域の人と学べる場
具体的，操作的，体験的な活動	見て聞いて，体験しながら学べる場
時間的，空間的なゆとりがある	学習の過程で評価される場
厳しさがある	基本的なルールが学べる場

図1 「広場」の様相と「豊かな心のはぐくみ」との関連

「広場」の様相と「豊かな心のはぐくみ」を図1のように関連付け、本校の今までの取組を土台にした実践の共通理解を図った。

(2) ハートフル委員会の新設

本校では、例年12月に教育課程検討委員会を立ち上げ、次年度の教育課程編成上の改善点を明らかにしてきた。平成17年度には、カリキュラムの改善のための組織として「教育課程検討委員会」と新たに「ハートフル委員会」を立ち上げた。しかし、二つの委員会の連携がとれず、組織としての機能を十分に果たすことができなかった。そのため、平成18年度からは次の3点に関して組織の改善を図り、カリキュラムの改善に取り組んでいる。

① ハートフル委員会と教育課程検討委員会の一歩化

ハートフル委員会と教育課程検討委員会が別々に存在すると、活動内容が重複し、組織としての機能が十分に果たせなかった。そこで、仕事の効率化とカリキュラム改善の方向性の明確化を図るために図2のように「ハートフル委員会」として組織を一本化した。

② 評価検討部とハートフルセンターの新設

ハートフル委員会における協議・検討の無駄を省くために、研究部の人数を絞り、役割を明確化することで、担当の専門性が発揮できるように二つの部署を新設した。

③ 教科・領域部員会及び学年会の組織化

カリキュラムの改善に向けた共通理解が図れなかった原因の一つとして、教科・領域部員会と学年会との連携が十分に図れなかったことが挙げられる。全体が共通理解をもって改善への取組をするためには、教科・領域部員会及び学年会の有機的な連携が不可欠である。そこで、話し合いを定期的に位置づけ、協議の機会を保障したり、カリキュラムの改善に関する課題提示を計画的に行ったりするために組織化を図った。

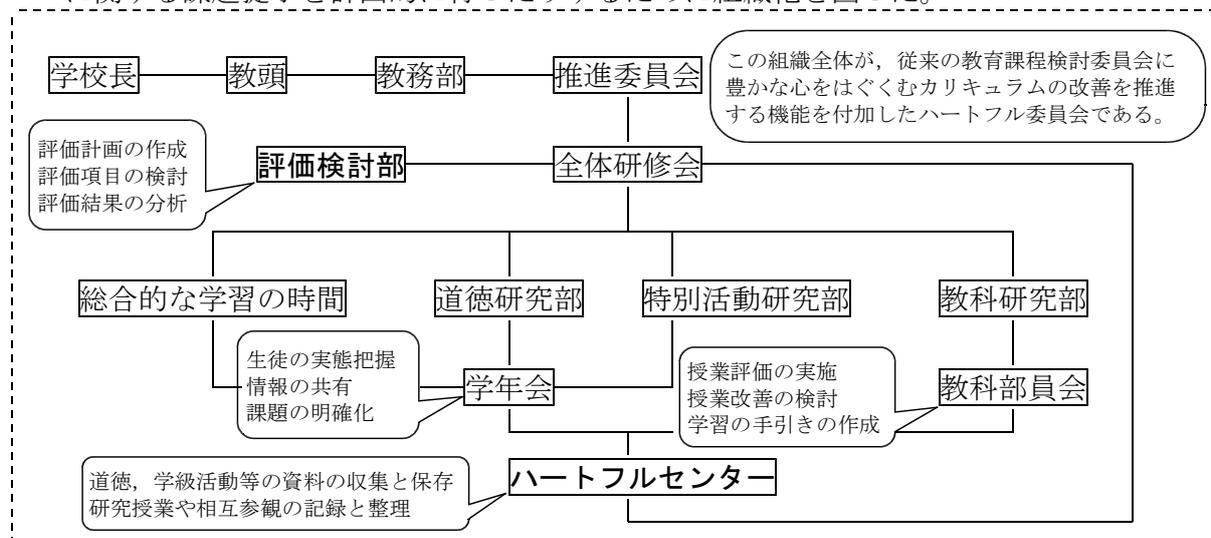


図2 平成18年度のハートフル委員会

(3) 自己肯定感を高める教育活動の実践

① 自己肯定感から自立心へ

本校の生徒に身につけさせたい“豊かな心”について、教師を対象にアンケート調査を行った結果、「自立心のある生徒の育成」を共通の課題ととらえた。しかし、「自立心」の定義が広範囲にわたり、指導の手立てや変容をとらえることの難しさを感じたため、「自立心」をはぐくむ土台となるという視点から「自己肯定感」に焦点を絞り、そのはぐくみを達成目標に設定した。

本校の生徒に対する生活アンケートの調査結果等を見ても、学習に無気力な生徒の存在や不登校生徒の増加が大きな課題であり、これらに共通する要因の一つとして自己肯定感の低さが挙げられる。そこで、教育活動全般における生徒の主体的な活動や人との交流の中で、他者から認められる機会を意図的に設定したり、集団の中で自己を客観的に見つめる機会を与えたりすることによって、生徒に自己肯定感をはぐくむことができると考えた。一人一人が獲得した自己肯定感は、図3のように本校が目指している豊かな心の要素である「自立心」を高め、学習意欲やたくましく生きる豊かな心をもった生徒の育成につながると考えている。

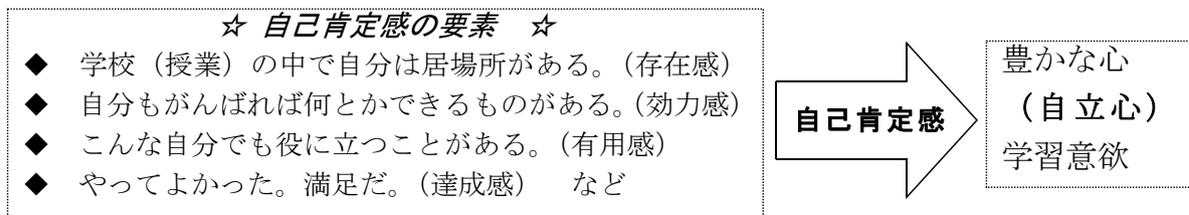


図3 自己肯定感と豊かな心の関係

② 教科指導における授業改善の実際

本校では、「広場」の概念を取り入れた授業の実践に努めてきた。しかし、実践のねらいや方法に関する共通理解が十分に図れなかったために、教科担当者や授業者によって取組に差が見られた。

そこで、図4のような流れで課題への対応策を考え授業改善に向けた取組を共通実践した。これにより、生徒側にも友人と協力しながら意欲的に学習に取り組んだり積極的に発表や質問をしたりするなど、コミュニケーション力の高まりが見られるようになった。

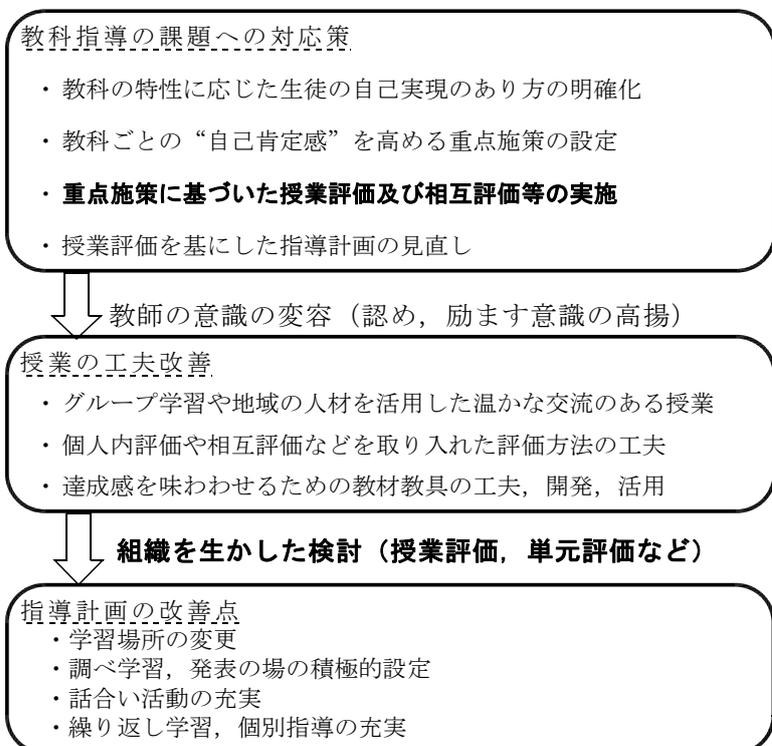


図4 カリキュラムの改善の流れ

ア 授業評価の実際

各教科の指導では、単元のねらいを明確化し、そのねらい達成のための授業の実践を行っている。実践後には授業評価を行い、授業や単元の改善に役立っている。特に、「自己肯定感のはぐくみ」に視点を当てた授業評価を工夫し、授業改善を実施している。授業評価シートは、評価検討部から事前に示された基本形式のものに、各教科ごとに評価内容などを追加して使用している。(資料1)

イ 組織を生かした検討

カリキュラムの改善に必要な資料は、授業評価や単元評価、年間指導計画の評価等の評価結果である。資料2は、授業評価からの授業改善の例である。評価結果を基に検討資料を作成し教科部員会において分析検討を行った。

ここで大切なことは、部員会を実施し多くの職員で改善を実践することである。

② 生徒の主体的な活動の推進を目指した学校行事の改善

本校の学校行事を振り返ってみると、実施する際、生徒主体の企画・運営が十分に行われていなかった。その結果、自分の考えで活動できない生徒の姿が目立っていた。

改善策として、教師側の対応と生徒側の活動の両面からの学校行事の改善を図った。

資料1 授業評価シートの例

授業振り返りシート 年 組 番 氏名 月 日

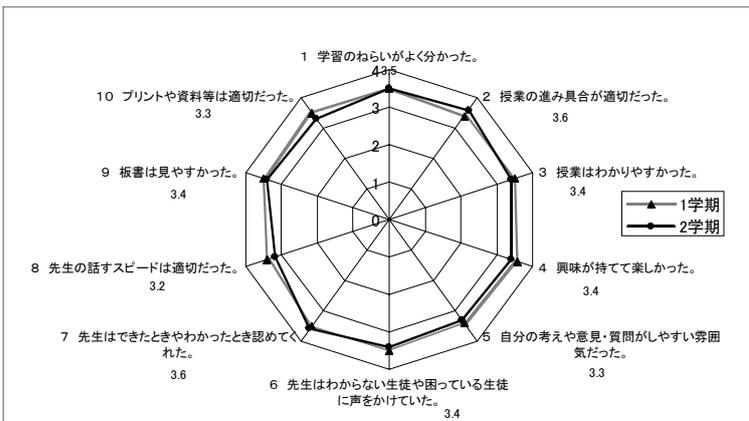
このシートは、生徒の皆さんが授業を受けていて、どのような感想をもったかを知り、その内容によってよりよい授業が行えるようにするためのものです。成績には直接関係することはありませんので、自分の素直な気持ちで答えてください。気持ちが強い順に4～1の数字に○をつけてください。

4：あてはまる， 3：どちらかというあてはまる  
2：あまりあてはまらない， 1：あてはまらない

	振 り 返 る 項 目	1～4の数字
1	学習のねらいがよくわかった。	4-3-2-1
2	授業の進み具合が適切だった。	4-3-2-1
3	授業はわかりやすかった。	4-3-2-1
4	興味が持てて楽しかった。	4-3-2-1
5	自分の考えや意見・質問がしやすい雰囲気だった。	4-3-2-1
6	先生はわからない生徒や困っている生徒に声をかけていた。	4-3-2-1
7	先生はできたときやわかったとき認めてくれた。	4-3-2-1
8		4-3-2-1
9		4-3-2-1
10		4-3-2-1
自 由 記 述 欄		

基本的形式に教科ごとに評価内容を検討して追加する。

資料2 授業評価の例<1学年、技術・家庭(家庭分野)>



「1年」・調理実習を通して、食中毒を防ぐ方法や調理の仕方などを学ぶことができた。これからの生活で実際に学習してきたことを生かしていきたい。

- 調理実習で、食材の分量が量って用意してあったり、先生のお手本がとても分かりやすかったりしたので、とてもスムーズに取り組むことができた。
- プリント学習は授業の流れがまとめてあり、分かりやすくてよかった。
- 発表する機会がたくさんあって、手を挙げやすい雰囲気だった。

「改善点」

調理実習では、実習後家庭で復習した生徒の平均が約55%であった。実習後の反省では、「自分には無理だと思っていたものが少しずつできるようになり、まわりにも褒めてもらい、少し自信になった。」との記述も見られることから、調理実習の自信と自己肯定感を伸ばす有効性は高いと考える。しかし、本年度は授業時数の都合上調理実習を2回しか設けることができなかった。再度年計を見直し、来年度からは3回実施できるようにしたい。

ア 教師側の対応の留意点

学校行事の企画・運営を生徒の主体的な活動とするために、教師側としての意識の共通理解を図った。

- ・生徒の活動を温かく見守る雰囲気を作る。
- ・生徒の自発的、自治的な生徒会活動の推進を目指す。

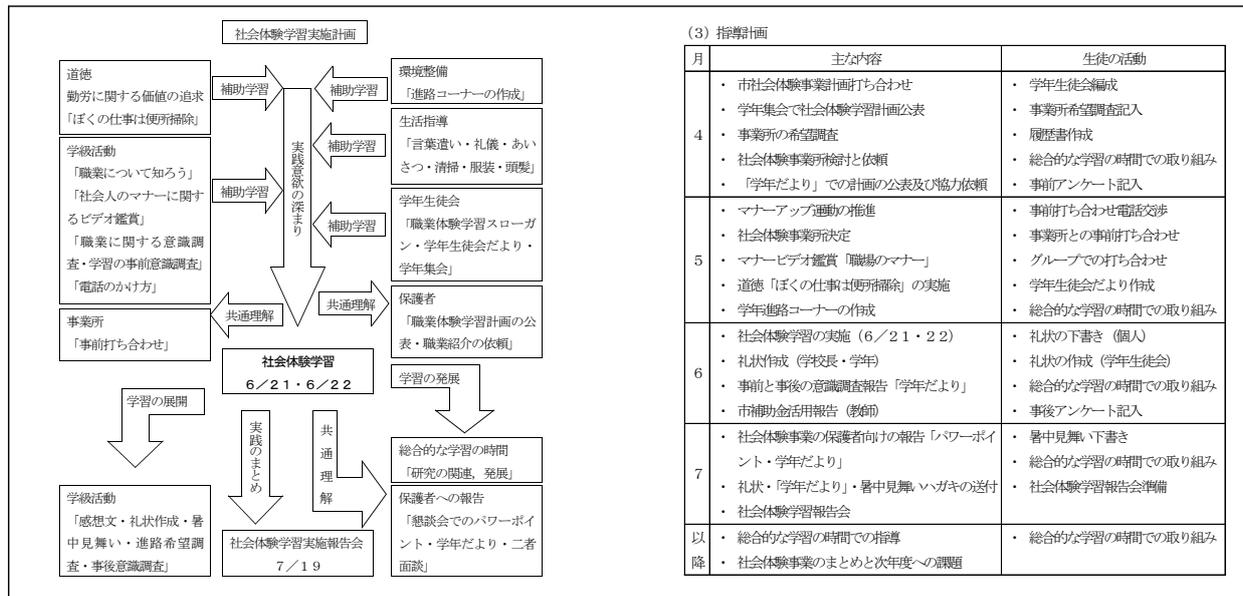
イ 総合単元的な学校行事の実践と評価

前年度とのつながりを意識し、学校に根付いた行事を実施するために、一つの行事を総合単元的にとらえ、道徳や学級活動、総合的な学習の時間等との関連を図った（資料3）。特に、ねらいや留意点の明確化、生徒の実態を踏まえた事前と事後の指導の工夫改善に努めた。

その結果、教師や生徒に以下のような活動が見られるようになった。

- ・生徒の主体的な活動が保証されたため、生徒が自主的に運営を行った。
- ・文化祭や体育祭においても、生徒の創意工夫を生かした企画・運営を行った。
- ・ボランティア活動や学年生徒会の活動に生徒が自信をもって意欲的に参加した。
- ・行事のねらいや育てたい生徒像が明確になり、全教師の協働による実践ができた。
- ・生徒の活動を多面的に評価できた。
- ・今年度の取組を次年度の参考資料としてハートフルセンターに保管した。

資料3 総合単元的な学校行事の実践計画と月別の指導計画（2学年、社会体験学習）



③ 道徳教育の共通実践とハートフルセンターへの資料の保存

本校の道徳の授業は、学級ごとに指導計画に基づいた指導を行っていた。また、道徳の授業で使用した資料等は個人が管理しており、同学年内において共有されることがほとんどなかった。そこで、豊かな心のはぐくみのためには、道徳指導の充実は欠かせないと考え、資料の共有と保管、効果的な授業の工夫などに取り組んだ。

ア 体験的な活動を絡めた総合単元的な道徳の授業の展開

総合単元的に道徳の授業を実践するために、指導計画の中に進路指導や学校行事との関連を持たせた題材を配置し、指導案にその関連性と学習の流れを明示した。

その結果、教師側では、授業のねらいが焦点化され授業の流れを明確に意識できるようになった。また、生徒の変化としては、眼前に迫った問題として学習課題をとらえることができ、社会体験学習や総合的な学習の時間における福祉体験への参加態度に、真剣さと前向きな様子が見られるようになった。

イ 一人一人が自由に自己表現でき、それぞれの意見が尊重される授業の実践

生徒の意見が尊重され、自己肯定感が高められる授業例としてモラルディスカッションの授業展開について理解を深める研修会を行った。

その結果、友達と意見を交換しながら自分が他者から認められたり、進んで自分なりの意見を述べたりする生徒が多くなり、道徳の授業を楽しめるようになった。道徳的価値を自分なりに実生活の中で発展させていこうという思いや課題意識が培われてきたことが大きな成果として挙げられる。

ウ ハートフルセンターへの資料等の保管

ハートフルセンターにおいて、モラルジレンマに関する資料等、授業で使用した教材を収集した。月に一度はその資料を用い同学年内で同じ内容の授業を行った。

資料の保管については、空き教室のスペースに書棚を設置し、学年別、月別に資料を保管することとし、順次、資料等を増やしている。

その結果、道徳の授業実践がしやすくなり学級間による学習内容の不均衡が減った。また、授業後に資料や授業の流れについて教員同士で話し合う機会ができた。今後は、道徳の資料のみならず、特別活動に関する資料も含め収集すると共に、ハートフルセンターの使いやすい環境作りを、担当部署を中心として全員で行っていききたい。

#### 4 本校からの提言

(1) 学校にある潜在的なカリキュラムを特色ある学校づくりや教育活動の実践に適用していくことが重要である。

本校では「広場」の概念が教育活動の基本理念として存在していたが、時の経過や教師の人事異動によりその内容のとらえ方にばらつきが出てきたため、年度当初に新しく赴任してきた職員を中心に研修会をもち理解と意識付けを図った。また、全体研修会や部員会の際にも再確認をし、それぞれの教育活動における具現化に努めたことにより、個人の取組から学校全体の取組として定着し、互いに共有できるようになった。

(2) 組織的な取組を充実させカリキュラムの改善を効果的に行うためには、単に組織を立ち上げるだけでなく、一人一人が積極的に自己の教育活動に対する点検を実施し、主体的に取り組む意識をもつことが大切である。

取組を合理的に進めるために組織構成を変え、それぞれの役割分担も明確にしてきたが「教育課程とカリキュラム」の違いを十分に理解できなかったために、カリキュラムの改善を全員で行うという意識を高めるのに苦労した。カリキュラムに対する共通理解を図り、組織を十分に機能させるためには、校内研修の充実が大切であると考えた。

(3) 授業評価や単元評価を行うことにより、豊かな心のはぐくみや授業のねらいの達成状況等を確認でき、よりよい改善につなげることができる。

「自己肯定感を高める」をテーマとしてその具現化に努めたことにより、教科領域両面におけるねらいが明確化し、取組に厚みが増すとともに、教師の言動にも好ましい変化が見られるようになった。また、一人一人が主体的に活動できる学習場面や経験の提供、効果的な資料の活用等により、一人一人の意見が尊重され自己表現が自由にできる教科学習や道徳学習を実践することができた。

## 「学年会を基盤とした校内研修の工夫・改善」

鹿嶋市立鹿野中学校 URL <http://www.sopia.or.jp/kanochu/>

### 1 学校の概要

本校は、1年生78人、2年生82人、3年生82人の全校生徒数242人という小規模校である。鹿嶋市の中心に位置し、保護者の教育に対する関心も高く、学校に協力的な家庭が多い。生徒たちは、思いやりの気持ちがよく育っており、和気あいあいとした雰囲気の中、落ち着いた学校生活を送っている。一方、お互いに切磋琢磨する雰囲気が少なく、与えられたことはよくやるが、積極性にやや欠ける。そこで現在、自立心をはぐくむ取組を全職員一丸となつて行っている。

### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) 学年部会、教科部会を主体としたワークショップ型校内研修
- (2) 全職員による授業研究と授業評価結果に基づく年間指導計画の改善
- (3) 目指す生徒像の明確化と教師用自己評価表の作成
- (4) 毎月の教育活動評価と学期末の行事検討委員会の連動

### 3 実践内容

- (1) 豊かな心をはぐくむための取組の重点化

#### ① 小規模校のよさを生かして育ってきた生徒の姿

本校は平成15・16年度にかけて、ハートいっぱい推進事業の指定を受け「広げよう！思いやりの心・はぐくもう！豊かな心～高齢者との交流会から育てる思いやりと優しさ～」をテーマに実践に取り組んだ。「思いやりの心」を育成するため、生徒会を中心としたボランティア活動に力を入れたところ、多くの生徒が参加し様々な活動を行うことができた。また、保護者や地域の方もボランティア活動には協力的であり、連帯意識が強く、そのような地域のよさを生かして「高齢者との交流会」も成功させることができた。これらの実践により「豊かな心」のうち、「思いやりの心」、「責任感」、「感動する心」に以下のような変容が見られるようになった。

教職員を対象として行ったアンケートの結果から（平成17年6月10日実施）

「思いやりの心」について…給食、清掃などの場面で、周りの様子を見て手を差し伸べる生徒が多く、生活班のリーダーを中心に班内の協力（助け合い）がしっかりできている。等  
 「責任感」について…自分の役割分担をきちんと理解し、それをしっかりこなしている。等  
 「感動する心」について…学校行事後の感動の涙や作文等から感じられる。等

#### ② 授業ではぐくむ自立心

本校の生徒において、上記のような変容が見られるようになった反面、自分の判断で行動できず、付和雷同的になってしまう生徒が少なくない。また、甘えの心が見られ、自分の力で何かしようと思わない傾向の生徒が見られるなど、本校の課題として、自立心の欠如が浮き彫りになった。

教職員を対象としたアンケートの結果を踏まえ議論を重ねた結果、自立心を育む場面としては授業が最適であるという結論に達した。それは、授業の中には、考える場、発表する場、コミュニケーションする場、ねばり強くがんばる場、困難を乗り越える場、自ら進んで学習しようとする場、自己決定する場等、自立心を育む上で大切な要素が多く含まれていると考えたためである。よって、生徒会を中心とした活動は継続

しつつ、授業の工夫・改善に全員一丸となって取り組むことにした。

(2) 伝達型研修からワークショップ型研修へ

これまでの研修は、どちらかという伝達や報告が中心の受動的研修であった。これでは一方通行であり、お互いに意見交換の場が少なく、話合いが深まりにくかった。そこで、月1回月曜日に実施していた校内研修の内容と方法を見直した。授業の工夫改善に関することを中心とし、学年や教科ごとに分かれた少人数での話合いと全体への提案の2部構成で行うことにした。研究主任が中心となって話合いのテーマを設定し、教職員の情報交換も重視しながら、授業の工夫改善のための具体的な方策を考えるようにした。本校では、このような研修をワークショップ型研修と呼んでいる。

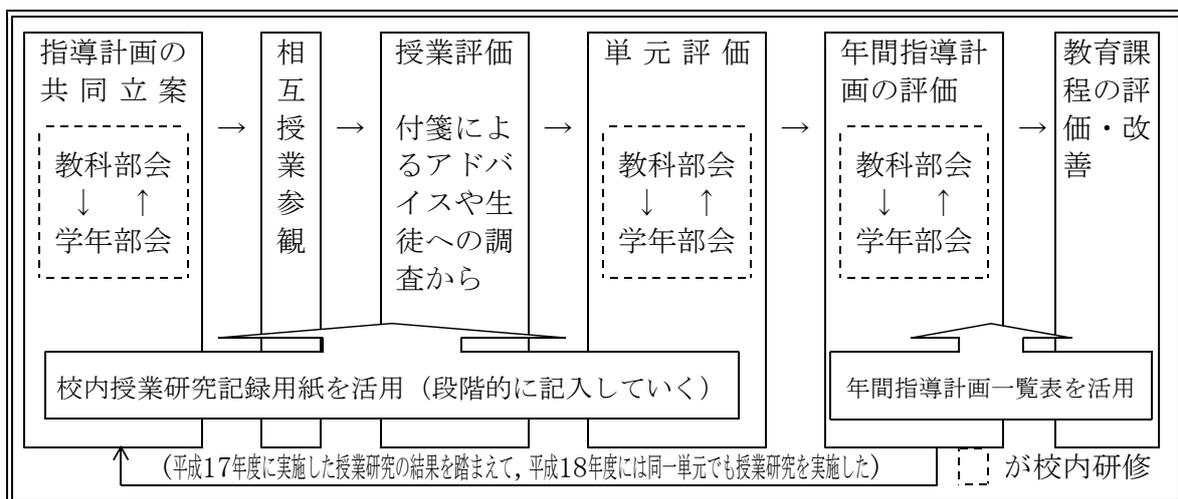
一回の校内研修の流れは次のようになる。

最初に、研究主任がその日の研修のテーマについて説明する。次にそのテーマについてグループ編成を工夫しながら話し合う。まず、学年ごとに小グループを作り話し合う。次に教科等で小グループをつくり、学年ごとに話し合った内容を報告したり、さらに話し合ったりする。そして、再び学年ごとのグループに戻り、議論することを通して、より深めていく。最後は全体会を設け、研修内容を発表し合い、情報を共有化する。

話合いのテーマは、「自立心がはぐくまれた生徒の姿を授業の場面で考えたらどのようなか」、「教師はどのようなことに気を付けたらよいか」、「それぞれの教科等でどのような工夫を行いどのような成果が上がっているか」、などであった。

また、授業研究に向けた指導計画の作成、単元評価、年間指導計画の評価などにおいても、ワークショップ型研修を活用した。

特に、全員が授業研究を実施し、それに基づき単元評価、年間指導計画の評価を行い、カリキュラムの改善につなげていった。カリキュラムの改善につなげる授業研究等の実施は次のようになる。



先生方からも「これまでの研修に比べ、他の先生方の工夫点が分かり、学年や教科の枠を超えて参考になる点を共有できた。」「豊かな心をはぐくむための施策の共通理解を図ることができ有意義であった。」などの感想が寄せられ、改善の効果を感じることができた。

(3) 全職員による授業研究

平成17年度の授業研究は、9月から12月にかけて全職員が実施した。教科部会において

指導案を共同立案するとともに、この授業で育てたい力を記載し、授業を見るときの視点が明確になるようにした。また、学年部会においても自立心を育てるための方策を教科の枠を超えて話し合った。授業後は、単元評価、年間指導計画の評価を校内研修で行い、年間指導計画を改善した。平成18年度は昨年度の取組を生かし、改善された指導計画に基づいて、同一単元での授業研究を実施した。授業参観にあたっては、「自立心をはぐくむための施策」を明記した校内授業研究記録用紙を事前に配布し、授業評価に生かせるようにした。また、平成18年度は「昨年度の実践を生かした改善点」という項目を追加し、改善の効果も評価するようにした。以下に、数学科（第3章1次関数）の校内授業研究記録用紙と校内研修の一例を紹介する。

8月の校内研修で、教科等でグループを作り、一学期の実践から実施した単元の年間指導計画を見直した。また、右の図のような校内授業研究記録用紙と昨年度の校内授業研究記録用紙、授業評価・単元評価結果などを資料として、今年度の授業実施に向けて、共同立案し、必要事項を記入した。(昨年度の実践を生かした改善点まで記入) また、各自で授業研究を実施する日時を決定し、授業研究日一覧を作成した。

授業研究日には、各自が校内授業研究記録用紙を活用しながら授業を参観し、授業後のアドバイスを付箋に記録した。また、全体研修会は開かず、アドバイスの欄に参観者の付箋を貼り、それを参考に各自で、授業に対する自己評価の欄を記入した。

全員が授業を実施した後、校内授業参観記録用紙を活用しながら、11月の校内研修の機会に、全員の授業について振り返った。校内研修は、教科等のグループでの話し合い、学年グループでの話し合い、全体へ提案の順で行った。

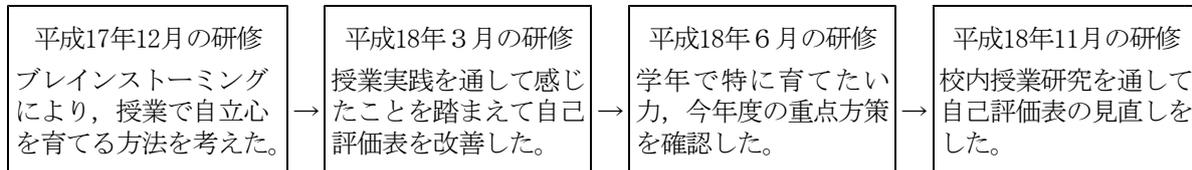
これまで授業研究は、授業者の授業反省や全職員一斉での話し合いが中心であったが、少人数での話し合いや教科を超えた話し合いにより、各教科の課題が明確になり指導計画の改善点や教科を超えた工夫も話し合われるようになった。また、教師全員で関わるようになったので、学校全体で自立心を育てていこうという意識も高まってきた。授業研究を中心とした指導計画の改善の様子の一例を次に示す。

授業者		授業日	10月16日(月)
単元	1次関数(17時間取り扱いの15時間目)		
本時のねらい	○身の回りの事象の中から二つの数量を取り出し、それらの変化や対応を調べることを通して、1次関数の関係を見だし表現し考察することができる。		
学習課題	(紙面の都合で省略する)		
自立心をはぐくむための施策	○昨年度の実践のよいところは継続する。 ○「ゴミ処理」という身近な事象の中から、1次関数の関係を見だし、問題を解決していくようにする。等		
昨年度の実践を生かした改善点	○自分で課題を見付け自ら解決していこうとする活動を通し、学習内容の定着を図ると同時に意欲を起こさせるような学習課題を開発した。(総合的な学習の時間とリンクさせたゴミ処理問題を課題とする) ○第4章「平行と合同」と第7章「確率」をそれぞれ1時間減とし、時数を2時間増やす。		
授業に対する自己評価	○課題作成からその自力解決まで生徒主体の授業を組んだが、授業評価の結果では、理解が十分でない生徒が数名いた。等		
先生方からのアドバイス	○身近なゴミ問題から自分で課題を見つけるプログラムがうまく工夫されていた。 ○授業の展開と場の工夫がよかった。等		

	平成17年度授業参観からの改善点	平成18年度の授業の様子	平成19年度に向けた改善点
国語	班活動をより活発にするため、個人の発表準備にもっと力を入れる。	個人の意見の内容がよくなった。また、班活動が活発になり話し合いも深まってきた。	表現の能力をさらに高めるため、総合的な学習の時間との関連を一層深める。(総合的な学習の時間で表現の能力を高めるプロジェクトを実施する予定である)
美術	制作の際に完成のイメージがもてるようにする。イメージをもっているかどうかで質問内容が違っている。	「次はどうするのですか」から「こうしたいのですが、どうすればいいですか」という質問をするようになった。	自他共に認め高め合う活動を通して、完成のイメージをさらに深めるようにする。

(4) 教師用自己評価表の作成

自立心を明確にとらえ、全職員が共通理解のもとに取り組めるよう、自己評価表を以下の手順で作成した。これは、授業を行う上での指針となるものであり、常に授業を振り返る手だてとしている。



作成した教師用自己評価表

	第1学年 好ましい習慣の定着	第2学年 自主的活動の推進	第3学年 質の向上
目指す生徒像	<ul style="list-style-type: none"> <li>支援を受けながら、自分で考えて行動できる生徒</li> <li>支援を受けながら自分の考えをしっかりとる生徒</li> </ul> →支援を受けて考える (教師の支援のもと)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で考えて行動できる生徒</li> <li>自分と他の考えを比較検討し自分の考えを表現できる生徒</li> </ul> →自分で考えて課題を見つける (自ら学ぶ生徒)	<ul style="list-style-type: none"> <li>自らを高めようと、考えて行動できる生徒</li> <li>他のよさに気づき自分の考えを深められる生徒</li> </ul> →自らを高めようと考える (生徒間の向上心)
教師がと評き価のす視る点	<ul style="list-style-type: none"> <li>時に教師の支援を受け自分のやるべきことをしたか (朝の読書, 清掃, 家庭学習, 生活ノートなど)</li> <li>自ら考えようとしたか</li> <li>自分の考えを表現しようとしたか</li> <li>自分と他の考えを比較検討しようとしたか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分で気づき行動を正したか</li> <li>自ら考えたか</li> <li>自分の考えを表現したか</li> <li>自分と他の考えを比較検討したか</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>向上的変容を目指しているか</li> <li>自分の考えをもてたか</li> <li>自分の考えを明確に表現したか</li> <li>他のよさに気づき自分の考えを深めたか</li> </ul>
授業等の場面で留意すること	<ul style="list-style-type: none"> <li>やるべきことはしっかりさせる (呼びかけ続ける)</li> <li>じっくり考えさせる</li> <li>表現の仕方を身につけさせる</li> <li>聞く態度をしっかりと身に付けさせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己決定させる</li> <li>自ら考え, 課題を発見させる</li> <li>自分の言葉で表現させる</li> <li>自分の考えと比較しながら聞かせる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己実現させる</li> <li>新たな課題を見いださせる</li> <li>自分の考えを自分の言葉で表現させる</li> <li>他のよさを認め, 自分の考えを深めさせる</li> </ul>
共同実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒が意欲的に取り組んだり, よい行いや発表などをしたときは賞賛する。</li> <li>学習課題を工夫し, 生徒に興味関心を持たせる。(常に教材発掘・研究)</li> <li>生徒指導の機能を取り入れた授業を展開する。</li> <li>手をかけすぎない。(支援のしすぎに注意する)</li> </ul>		
関連行事	各学年 ・キャリアフォーラム	各学年 ・職場体験学習 ・豊かな心をはぐくむ体験活動 (地域間交流)	各学年 ・高校体験学習 ・高齢者とのふれあい活動
学校	入学式, 卒業式, 体育祭, 合唱コンクール, ピアカウンセリング, 一声あいさつ運動, あしながPウォーク10, ベルスタートキャンペーン, 清掃の扉等		

作成にあたって、全職員が何回も話し合いを重ねたことが有意義であったと感じた。内容はまだまだ改善の余地があるが、作成の過程を通して共通理解をすることができたと考える。

(5) 道徳・特別活動を中心とした取組

年間指導計画に基づいた週1回の授業を確実に実施し、大切にしていくことはもちろんであるが、道徳の授業においても相互参観することにより、情報交換等を行い、工夫改善しながら質の向上に努めてきた。さらに反省点を生かし、同一指導案で他教師が授業を行うという取組もしてきた。その結果、自立心をはぐくむための手だて（準備資料の有無やその有用性、中心発問設定の吟味等）についてより理解を深めることができた。また、資料や中心発問の設定においては、年々改善が加えられるなど、その積み重ねにより授業の質も向上し、生徒たちの発言にも深まりが見られるようになった。

特別活動においても、生徒会が中心となって企画運営している活動への教師の関わり方を中心に見直し、改善を行ってきた結果、自主的な活動が増えてきた。

(6) 年間指導計画の評価から教育課程の評価へ

年間指導計画の評価は、各学期末に単元評価結果や生徒のアンケート結果に基づいて行った。これも校内研修で行い、教科等のグループでの話し合いの後、学年グループでの話し合いを設けるようにした。

今年度は、右のような年間指導計画一覧表を作成し、それをを用いて、各教科等で連携を図った方がよい内容についても検討する時間を設けた。

これまでは、年間指導計画の改善といえば、学校行事や各教科ごとの計画の改善が中心であった。また、他の教科がどのような内容を教えているかについてはあまりよく分からなかった。学校行事は学年で、教科等は、教科主任が行っていたが、教科の枠を超えた話し合いにより、自立心をはぐくむための施策を教科等で統一したり、教科等の関連を図ったりすることができた。例えば、国語と美術と総合的な学習の時間で同じような内容を扱っているの、時数を見直すとともに、文章表現は国語科で、レイアウトの工夫は美術科で、取材活動は総合的な学習の時間で扱うなどの改善策も提案された。次年度は、これらの意見を踏まえて教育活動を実施する予定である。

年間指導計画一覧表（一部抜粋、数字は時数）

		10月	11月
国語	1年 2年 3年	蓬萊の玉の枝(古典)⑧ 提案の仕方を工夫しよう(表現)⑧ 故郷(物語文)⑧	今に生きる言葉(古典)⑤ 扇の的(古典)⑤ 君待つと・夏草(古典)⑥
社会	1年 2年 3年	地域の規模に応じた調査(地理)⑫ 世界と日本の自然環境・文化(地理)⑫ 地方の政治と自治、私達の生活と経済(公民)⑫	中世の日本(歴史)⑨ 第一次世界大戦とアジア(歴史)⑩ 私達の生活と経済、市場経済と金融(公民)⑩
道徳	1年 2年 3年	勤労の尊さ 国際理解と平和 生きる喜び	自他の尊重 感謝と思いやり 向上心
総合的な学習の時間	1年 2年 3年	私たちの生活 職業について 自分史作り	私たちの生活 進路について 自分史作り
学校行事等		合唱コンクール 教育相談 高齢者とのふれあい活動(3年)	あしながPウォーク10 学校公開(地域公開)

年間指導計画の評価から出された改善点

- 数学(1次関数)と理科(オームの法則、バネの実験等)のグラフの指導について関連をもたせる。
- 国語の学習で養ったプレゼンテーションの技法を生かして、理科のまとめの発表を行う。
- 総合的な学習の時間で、評価規準を生徒に提示した後、同一テーマに対するプレゼンテーション大会を実施する。また、各教科の発表との関連を踏まえるようにする。
- 技術の時間に学習したグラフ作成などのスキルを、総合的な学習における資料作成に生かす。
- 音楽と美術の連携(音楽から絵画、絵画から音楽)
- 国語、美術と総合的な学習の時間の総合単元化(自分史と私のアルバムづくりの学習を関連させる) 等

また、年度末の教育課程の見直しは、2月から3月にかけて次の手順で行っている。



まず、これまでの様々な評価結果を踏まえて、教務主任が検討事項を作成する。その際年間指導計画の評価の結果とともに、毎月実施している教育活動の評価（下表参照）の結果も参考にしている。次に、職員で3つのグループを作り、分担された課題の改善策を検討し、全体で発表する。そして企画会で検討し、全体での確認を経て次年度の企画立案をしていく。

平成17年度の反省を生かした生徒会活動の改善の一例としては、ピアカウンセリングが挙げられる。「来談者をただ待っているだけで、うまく機能していない」という課題を解決するために、平成18年度は、来談者を1年生に限定し、あらかじめ相談用紙を配布しておいた。このように昨年度末の検討の

教育活動の評価（7月）	氏名	評価
経営の努力点	〇生徒一人一人が1学期を振り返り、自らの課題を明確にするとともに、2学期…（省略）	
生徒指導	「1学期を反省し有意義な夏休みにするために、計画をしっかり立てよう」	
学年学級経営		
学校行事等	チャレンジテスト（4日） 地区総体壮行会（11日）	
学級活動	1年 2年 3年	毎月記入し、教務主任に提出します。教務主任が結果を集約し、職員会議で報告します。課題解決のための話し合いは、学期末、年度末に行います。
進路指導		
道徳		
生徒会活動		
その他		

成果を生かして改善したところ、来談者も増え、生徒会も自信をもって相談にのることができた。さらに、教科間の関係も留意しながら、教育課程を考えることができた。

#### 4 本校からの提言

- (1) 校内研修では、学年部会での話し合いと教科部会での話し合いの機会を設定する。その際、グループの人数を少なくし、お互いの情報交換も大切にします。

教科や学年が違っていると、指導方法等について情報交換することも少なかった。研修の方法を改善することで、話し合いが活性化し他の職員の様々な考え方をすることもできた。

- (2) 共同立案、相互授業参観、単元評価などを通して、豊かな心をはぐくむための取組を共有化していく。

忙しい中で授業研究を行うためには工夫が必要である。授業研究日の放課後等に話し合いを設けず付箋で意見を交換するとともに、単元評価の際に話し合い、改善に結びつけるようにした。その結果、授業改善への意欲とともに職員の協働性が高まってきた。また、前年度と同一単元で授業研究を行うことも、授業改善には有効であった。このような取組により、授業改善も進み、発展的な内容について、自主的に調べていこうという姿勢が多くの子に見られたり、自信をもって発表できる生徒が多くなったりするなど、自立心が芽生えてきた。生徒会においても活動が大いに活性化してきている。

- (3) 結果ではなく作成の過程を大切にする。

本校の課題である自立心について、各学年の発達段階に応じ明確化すべく議論を重ね、教師用自己評価表を作成した。その作業を通じて、各教師は授業場面での働きかけについて具体的に話し合うことができた。また、自分の課題として考え、共通理解し、自立心の育成という大きなテーマに向かい、全職員一丸となって取り組むことができた。

- (4) 年度末の話し合いは、それまでの様々な評価結果を基に行う。

育てたい力との関連を踏まえて教育活動を月ごとに振り返り、データを蓄えた。それらを集約し、教務主任が原案をつくり、解決すべき問題に絞って話し合いをしたため、効率的な話し合いをすることができた。年度末に様々な検討委員会を新設し、話し合うことにより、効果的な方法であると思われる。

## 「小中連携から始めたカリキュラムの改善」

龍ヶ崎市立城南中学校 URL <http://www.ed.city.ryugasaki.ibaraki.jp/jonan/>

### 1 学校の概要

本校は市街地と農村部からなり少子化が進み、生徒の数は年々減少している。保護者の多くは本校の卒業生であり、学校への愛着が深く、PTA活動や学校教育に関心を持ち、協力的である。しかし、近年、家庭の教育力の低下が指摘されている。

生徒の多くは明るく活発で活力ある行動が見られる反面、学習内容の定着が不十分な生徒も多く、自立心の育成と学力の向上が本校の大きな課題となっている。

### 2 特に力を入れてきた取組

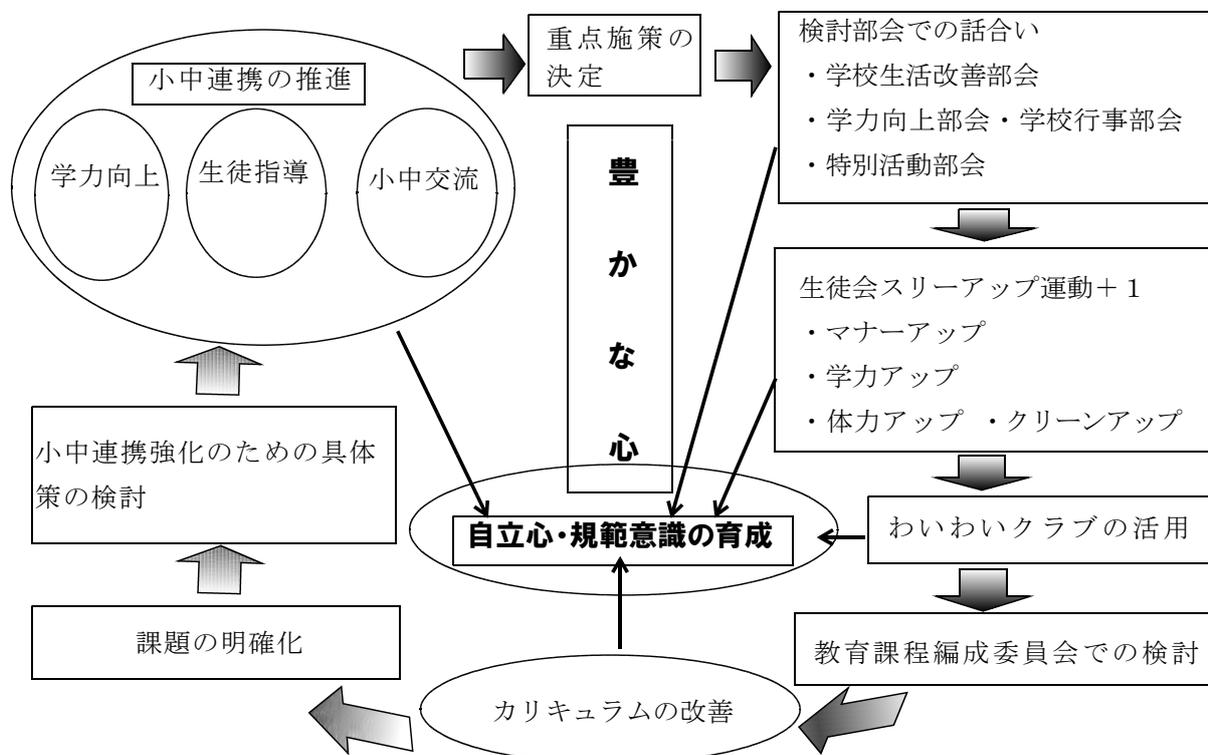
- (1) 小中学校の教職員による児童生徒の実態の共有と、連携の強化に向けた継続的な取組
- (2) 小中連携から生まれた「スリーアップ運動+1」の支援と、四つの部会による教育課程の検討
- (3) 協働体制を充実するための「わいわいクラブ」の実践

### 3 実践内容

#### (1) 小中連携の構想

小中学校の教職員が、児童生徒の実態を基に9年間を見通した指導を連携して行い、児童の中学校入学時への不安を解消し、基礎学力の向上と基本的な生活習慣・規範意識の育成を目指し、昨年度から「学力向上における連携」、「生徒指導における連携」、「小中交流」に視点をあて、研究を推進している。

【小中連携から始まるカリキュラムの改善の流れ図】



(2) 小中学校教員による児童生徒の実態の共有と、小中連携の強化に向けた継続的な取組

① これまでの取組と推進部会の設置、共通実践内容（三校：龍ヶ崎小、大宮小、城南中）

平成17年度取組		平成18年度取組	
学 力 向 上 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力診断テスト結果の共同分析</li> <li>・三校が一貫して取り組む内容の明確化 国語：読むこと、書くこと、言語事項の指導の充実</li> <li>算数・数学：計算力の定着、学力の二極化を踏まえた指導の充実、基礎事項の確実な定着</li> <li>・成果と課題のまとめ</li> </ul>	学 力 向 上 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学力診断テスト結果の共同分析</li> <li>・三校が一貫して取り組む内容の定着</li> <li>・各学校での取り組む内容の自校化</li> <li>・自校化に基づいた実践</li> <li>・学習評価カードの活用</li> <li>・成果と課題の明確化</li> <li>・次年度の取組内容の明確化</li> </ul>
生 徒 指 導 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な生活習慣の定着を図る共通実践（あいさつの励行、整理整頓、時間を守る、正しい言葉遣い、静かに話を聞く）</li> <li>・小中相互の授業参観及び意見交換会（各校の自由参観日に実施）</li> <li>・成果と課題のまとめ</li> </ul>	生 徒 指 導 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・基本的な生活習慣の定着を図る共通実践</li> <li>・マナーアップキャンペーンの協同実践（6年生と中学1年生の合同クリーン作戦）</li> <li>・小中相互の授業参観及び意見交換会（各校の自由参観日に実施）</li> <li>・成果と課題の明確化</li> <li>・次年度の取組内容の明確化</li> </ul>
小 中 交 流 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学6年生の中学校訪問</li> <li>・龍ヶ崎小と大宮小の6年生同士の交流会（球技会）</li> <li>・中学校教師による小学校での出前講座（小学生を対象とした教科の授業）</li> <li>・小中連絡会（5月と3月）</li> <li>・成果と課題のまとめ</li> </ul>	小 中 交 流 部 会	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小中連絡会（旧小学6年生担任の中学1年生の授業参観と情報交換）</li> <li>・城南中学校吹奏楽部の出前演奏</li> <li>・小学6年生による中学校訪問</li> <li>・龍ヶ崎小と大宮小の6年生同士の交流会</li> <li>・中学校教師による小学校での出前講座（小学生を対象とした教科の授業）</li> <li>・小中連絡会（新中学1年生学級編制情報交換）</li> <li>・成果と課題の明確化</li> <li>・次年度の取組内容の明確化</li> </ul>

課題を工夫

→

三  
校  
合  
同  
研  
修  
会

課題を工夫

→

三  
校  
合  
同  
研  
修  
会

課題を工夫

→

三  
校  
合  
同  
研  
修  
会

② 評価・改善に向けた三校合同研修会

三校の教職員の連携に対する意識を高めることと、連携強化への具体的な施策を明確にすることをねらいとして、三校の教職員全員が参加する合同研修会を開催した。

各部会からの報告、KJ法的手法を用いた小集団討議などを通して、改めて、この小中連携の大切さを確認し合うことができた。また、課題については、「相互の授業公開だけではなく、教材づくりを含めて小中連携を行っていく。」「9年間を見通した教育課程をつくる。」「出された課題を今後ぜひ三校の先生方で協力し合って解決していきたい。」等との具体的な意見も聞かれた。

このように、小中連携の強化に向けた取組を進めるにつれ、城南中学校の教育活動を全教職員で見直す必要に迫られてきた。そこで、以下のような取組を始めることとなった。

(3) 城南中学校の実態の把握

教師に対するアンケート調査や生徒の自己評価から、本校生徒の実態として自立心や基本的な倫理感・規範意識が充分にはぐくまれていないと考えられた。

このような実態から、「豊かな心」として定義されている六つの中の、特に生徒の意識が低い自立心、及び規範意識の高揚を本校の課題として取り組むこととした。

(4) 小中連携から明確になった課題とその改善に向けた城南中学校の三つの取組

- |                           |
|---------------------------|
| ① 生徒会を中心としたスリーアップ運動の推進    |
| ② 教育課程編成委員会による教育課程の見直しと改善 |
| ③ 校内研修の充実～城南わいわいクラブの実践～   |

① 生徒会を中心としたスリーアップ運動の推進

ア 自主的、自律的活動の場の設定

生徒の自立心を育成するためには、生徒自らが決定し、自らが行動する体験活動が必要である。本校では、平成17年度の2学期から生徒会を中心としたスリーアップ運動を展開し、専門委員会がそれぞれのテーマをもち、生徒の規範意識の高揚や学力向上、体力向上に向けた運動やキャンペーンを行った。同時に、生徒自身による評価と改善策の検討を生徒自らが行うことにより、一層の自立心の向上を図った。

イ 授業評価と単元評価の実施について

生徒会を中心としたスリーアップ運動の取組ごとに、資料1のような振り返りカードによる振り返りを実施した。生徒たちは、スリーアップ運動の評価と改善を繰り返す中から、新たな活動を生み出し、よりよい活動を目指そうとした。

資料1 スリーアップ運動の生徒による振り返りカード

スリーアップ運動 振り返りカード		名前
中央委員会		2年 2組
		評価 よくできた○ できなかった△
◎キャンペーンのテーマ「マナーアップキャンペーンを広げよう！」		
◆自分の目標「毎朝正門に立つのを忘れずに行う」		
1 制服登校キャンペーンについて	評価	気づいた点・努力点
制服登校キャンペーンを理解して取り組めた 制服登校キャンペーンに積極的に取り組めた	○	3年生が守れていない
自分の目標 みんなに声をかけていく	○	自分で忘れずよくできた。
2 あいさつキャンペーンについて	評価	
あいさつキャンペーンを理解して取り組めた あいさつキャンペーンに積極的に取り組めた	○	だんだんよくなった
自分の目標 自分から進んであいさつする	○	はずかしかったけど自分なりにがんばった。
3 自主学習クラスマッチについて	評価	
自主学習クラスマッチを理解して取り組めた 自主学習クラスマッチに積極的に取り組めた	○	みんなよくやっていた
自分の目標 毎日調べるのを忘れない	○	これからも続けたい
4 今回のキャンペーンについてこれからの課題を書いて下さい。		
城南中のみんなは、こちらから声をかけるとあいさつをかえしてくるが、自分からあいさつしてくれる人は、少ないので自分から声をかけられるように、もっと続けたい。		

一方、教職員も活動内容や指導の在り方等を評価し、スリーアップ運動の充実を図った。教師による単元評価によると、活動計画・活動方法等に改善の必要があるという評価が多かった。

このようなスリーアップ運動の中から、これまでの生徒会活動の見直しとともに、新たな活動を計画し、次頁の表1のような取組を行った。

表 1 授業評価と単元評価を基にした改善の取組

平成17年度の取組	平成18年度の取組	
① 生徒会専門委員会を中心となったスリーアップ (ThreeUp) 運動の推進 ア マナーアップ 中央委員会：制服登校・あいさつ運動 環境委員会：清掃の身支度運動 放送委員会：時間を守ろう運動 イ 学力アップ 中央委員会：自主学習クラスマッチ 図書委員会：朝の読書強化週間 ウ 体力アップ 体育委員会：城南チャレンジカップ 給食委員会：朝ご飯を食べよう運動 保健委員会：体力アップ健康運動 ② 生徒による評価の実施と活用 ア 生徒による評価項目の決定、評価の実施、評価の分析 イ 生徒による、学校集会の場での評価結果の公表と話し合い ③ 教職員による単元評価の実施 ア 評価内容の検討 イ 課題や改善策についての話し合い	授業評価・単元評価	① 生徒会専門委員会を中心となったスリーアップ (ThreeUp) + 1 運動の推進 ア マナーアップ 中央委員会：遅刻クラスマッチ、ポスター作り 制服登校・あいさつ運動 環境委員会：落書きをなくそうキャンペーン、 かかとつぶしをなくそうキャンペーン 放送委員会：時間を守ろう運動 イ 学力アップ 中央委員会：自主学習クラスマッチ 図書委員会：朝の読書強化週間 福祉委員会：あいさつ運動、時間を守ろう運動 ウ 体力アップ 体育委員会：城南チャレンジカップNo.1 城南チャレンジカップNo.2 給食委員会：残飯を減らそう運動 保健委員会：体力アップ健康運動 エ クリーンアップ 朝の清掃ボランティア活動 (有志による活動) ② 生徒による評価の実施と活用 (継続) ③ 教職員による単元評価の実施 (継続)

② 教育課程改善に向けた四つの部会の設定

ア 教育課程検討のための組織、各部会での検討事項等

下記のような四つの部会で検討を重ね、教育課程編成委員会で全体計画を検討した。

部会	検討事項	改善のための具体的施策	教育課程編成委員会
学校生活改善部会	①生徒の実態把握 ②めざす生徒像の明確化 ③生徒指導の見直し ④「生徒心得」の見直し	<ul style="list-style-type: none"> <li>マナーアップ活動の継続的な推進 (生徒会)</li> <li>学級、委員会、部活動を通じた、ボランティア活動の推進</li> <li>定期的な生徒集会の充実→マナーアップ活動、委員会、部活動からの呼びかけ</li> <li>2か月に1回学校生活アンケートの実施</li> <li>リーダーの育成→部活動キャプテン会議、生徒会、各委員会会長会議の充実</li> </ul>	
学力向上部会	①基礎・基本の徹底の方法 ②教科の定着度確認の在り方 ③総合的な学習の時間の改善 ④選択教科の見直し ⑤校内研修の在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>3教科 (英・数・国) を重点にした基礎的・基本的事項の徹底</li> <li>「城南検定」の実施による定着度の確認</li> <li>選択教科での技能教科は学年別実施</li> <li>授業の相互参観の推進</li> </ul>	
学校行事部会	①各種行事の見直し ②週時程の見直し	<ul style="list-style-type: none"> <li>職員朝会をなくし、毎日朝の読書の実施</li> <li>清掃を授業終了後から昼休みの前に移動</li> <li>各行事のねらいの再検討</li> </ul>	
特別活動部会	①学級活動の在り方 ②生徒会活動の内容 ③各種集会活動の在り方	<ul style="list-style-type: none"> <li>1年～3年にわたって系統的な指導計画作成</li> <li>代表委員会の充実</li> <li>フォーラムやパネルディスカッションの充実</li> <li>学級 (中央委員会) で→学年で→学校全体で</li> </ul>	

イ 教育課程編成委員会での検討内容について

平成17年度の小中連携による全体研修会等から出された課題，生徒による自己評価や教師による学校評価などの結果等を踏まえて，教育課程の見直しと改善に取り組んだ。

そこで，「基本的な生活習慣の定着」「基礎・基本の徹底」「各種行事の見直し」「生徒会活動の活性化」を学校改善の柱とし，四つの検討部会を設けた。そして，各部会が改善に向けた具体的施策を明確にし，教育活動全体からの改善を教育課程編成委員会で話し合った。

ウ 生徒会活動の見直しから教育活動全体の見直しへと発展

生徒による評価と改善策の検討を生徒自身が行うことにより，生徒は様々な活動を創り出すこととなった。その活動を教師が支え，より充実したものにするためには，既存の教育計画の改善が必要となった。例えば，各行事のねらいの再検討，基礎的・基本的な事項の徹底に向けた学習指導計画の見直し，職員集会のもち方等である。

そこで，教師集団がよりよい生徒会活動を展開するためにはどのような改善が必要かを話し合った。その結果，「生徒会活動の見直しだけでなく，教育活動全体からの見直し，学習指導の充実などが必要である。」との意見が出るようになった。

③ 協働体制を充実するための「わいわいクラブ」の実践

生徒の自立心を向上させ，規範意識の高揚を図るために，まず教師自身が自らを謙虚に振り返る必要があった。そして，一人一人の職員が，学校の教育活動の課題をより自分の問題としてとらえ，協働体制をつくる必要があった。

そこで，教職員が何でも言い合い，学年の枠や経験の差を超え，教育活動の工夫改善を組織として取り組むきっかけをつくる場を設定した。

ア 「わいわいクラブ」の内容と方法

- ・生徒指導を最重要課題として，教科の学習を充実させることを重点とし，月2回の割合で，特に配慮を要する生徒への学習状況改善への提言を全職員で練り上げていく。
- ・教科や学年部会などを単位として随時各自が研修し，互いに授業を見せ合うことを通して，学力向上の具体的な施策を練り上げる。

イ 評価シートによる教師の評価

校内研修を充実させるためには，与えられた研修から求める研修へと教職員の意識を変えていく必要がある。そのために，資料2のような評価シートにより，教職員一人一人が課題を整理し，明確な目標を持って研修に参加できるようにした。

資料2 教師による校内研修評価シート

評価 (○：課題なし，改善の必要なし △：課題あり，改善の必要あり)			
項目	評価内容	評価	気付いた点・改善策
取組 状況	1 研修の課題を実現できたか。	○	今回のプログラムについては，課題を達成できた。職員間の話し合いを深めることができた。
	2 研修に自主的に取り組めたか。	○	
	3 職員同士の話し合いは深まったか。	○	
研修 内容	4 研修内容の改善の必要があるか。	△	わいわいクラブに参加する人数が少なかったため，日程を工夫してほしい。職員の協力も必要である。
	5 研修方法の改善の必要があるか。	△	
	6 研修計画は改善の必要があるか。	○	
意見	プログラムの設定が，今の城南の課題に即していたので有意義であった。これからも継続して続けていきたい。		

このように、教職員が一人で抱え込んでいた課題をグループで共有したり、教職員全体で検討したりすることは、教職員の志気を高め、共通認識を図る上で成果があった。しかし、時間をどう確保するか、話し合われた内容をどのように具体化するかなどについて検討の場が十分でないので、これからの課題として検討し、協働体制をより充実したものにしていかなければならない。

#### 4 本校からの提言

##### (1) 小中連携について

同じ学区内の小中学校の教職員が9年間を見通して教育活動を展開しようとする事により、児童生徒の教育的ニーズに応じた指導の重点化やそれに必要な授業の時数配分等など、長期的視野に立って年間指導計画を改善する必要に迫られる。

一方、児童生徒の小中相互の交流活動は、小学生に安堵感を与えるとともに、中学生に自立心を芽生えさせる機会となった。特に、中学生は、自分たちの手で企画・運営等に取り組みたいという意識が高まる。

今後は、幼小及び中高の連携は見通しのある教育活動を行う上で大切であり、地域の校種間の連携を一層推進する必要を感じている。

##### (2) 「スリーアップ運動+1」の支援について

生徒の自立心や規範意識を育成するためには、生徒が主体的活動から成就感や達成感を実感できるように教師集団の側面からの支援が大切である。そこで、生徒の自治的活動をより一層充実したものにしようとして教職員が話し合うことにより、教職員は教育活動全体の見直しを行うことの大切さに気付き、教師と生徒が一緒になってよりよい学校づくりを考えようとする共感的関係がつけられてくる。

##### (3) 四つの部会による教育課程の検討について

教育課程編成にあたっては、教職員一人一人が教育課程の編成者であるという自覚をもち、学校の教育目標の実現に向けて教職員全員が組織的に、課題解決の具体的施策を検討する必要がある。

そのためには、四つの検討部会（学校生活改善部会、学力向上部会、学校行事部会、特別活動部会）を設置し、生徒の実態の分析を基に具体的施策を検討することは有効であった。

このように、四つの部会を設定することは、現在実践している活動をいろいろな角度から評価することとなり、組織的に全教職員で取り組みやすい具体的施策を明確にすることができる。

##### (4) 「わいわいクラブ」の実践

生徒の実態を読み取れる情報を基に、何でも言い合える場をもつことにより、教職員間に共感が起こり、つながりが生まれる。つながりは、他者と同じような実践をしてみようという試みとなって表れたり、何事にも全校体制で対応していこうという協働の意識を生み出す。その結果、教師集団の志気が高揚するとともに、教師と生徒の間に共感的関係を育てることとなる。

このように、共通の課題の解決に向かって努力していくためには、教職員間での十分な話し合いを積み上げていかなければならない。このことにより、一人一人の教職員が、学校の課題を自分の課題としてとらえるようになり、教職員の協働体制が充実する。

《高等学校実践事例》

「特活部を中心とした学校行事の評価・改善の取組」

茨城県立玉造工業高等学校 URL <http://www.tamatsukuri-th.ed.jp/>

1 学校の概要

本校は創立44年を迎える工業高校である。平成18年度より学科改編が実施され1学級減となったが、機械科・電気科・システム工学科に加え情報技術科を新設し、入試形態も工業に関する学科としてくくり募集となった。

全校生徒数は578人であり、卒業生の進路は就職する者が約70%、大学・短大・専門学校へ進学する者が約30%である。就職率は100%を誇る。

2 特に力を入れてきた取組

- (1) はぐくみたい豊かな心の明確化
- (2) 特活部会による単元評価の実施
- (3) 体育祭・文化祭等の学校行事の改善
- (4) 事前ホームルーム活動の充実

3 実践内容

- (1) はぐくみたい豊かな心の明確化

① 教職員を対象としたアンケート調査

本校教職員を対象としたアンケート調査(平成17年6月実施, 担任18人)を実施した結果, 担任が感じている本校生徒の現状は, 以下のようなものであった。(図1, 2)

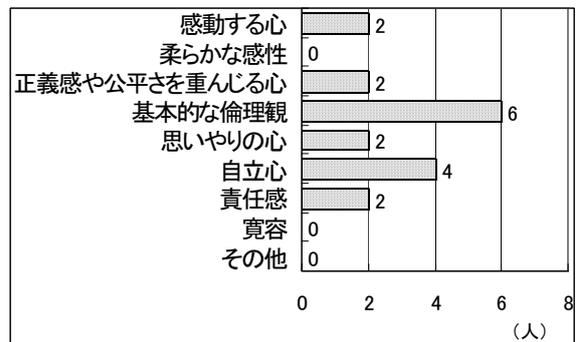
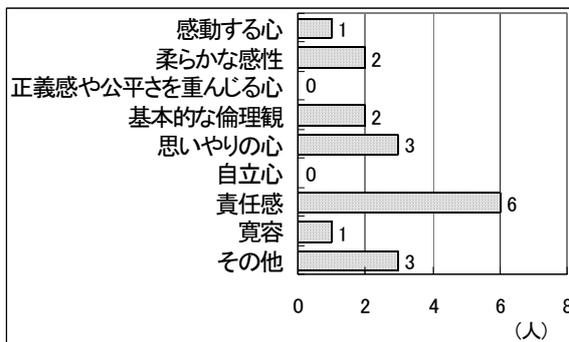


図1 最もはぐくまれていると思われる心

図2 最もはぐくまれていないと思われる心

豊かな心として最もはぐくまれていると感じているものは「責任感」であり、「正義感や公正さを重んじる心」や「自立心」を挙げる担任はいなかった。逆に、はぐくまれていないものとしては「基本的な倫理観」や「自立心」を挙げており、本校として豊かな心としてはぐくみたいものは「自立心」であるということが明らかになった。また、他のアンケート項目から、特に生徒の「コミュニケーション能力」が不足していることがわかった。さらに、豊かな心がはぐくまれた特別活動の実践としては、約半数の職員が「体育祭」や「文化祭」という学校行事を挙げていることも明らかになった。

② 生徒を対象としたアンケート調査

ア 平成17年度第1, 2学年生徒(現2, 3年生)に関するアンケート調査

研究を進めていく上で、本校生徒の実態を把握するために、豊かな心に関するア

アンケート調査を実施した(平成18年3月実施, 生徒数346人)。結果は以下の図3に示す。

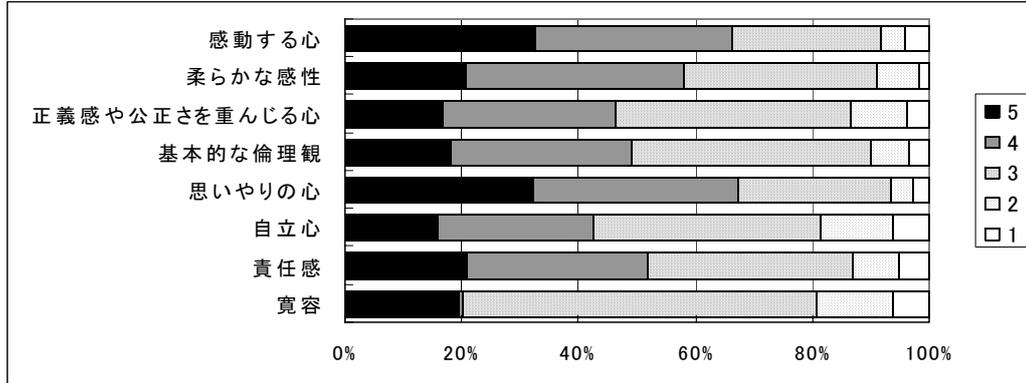


図3 生徒対象アンケート調査結果 (5:身に付いている~1:身に付いていない)

このアンケートの結果から、本校生徒の多くがはぐくまれていないと感じている豊かな心は、「寛容」「正義感や公正さを重んじる心」「自立心」であり、特に「自立心」については教職員アンケートの結果から見ても重視しなければならない項目である。

#### イ 平成18年度新入生に関するアンケート調査

平成17年度同様、新入生を対象にアンケートを実施した(平成18年5月実施, 生徒数153人)。

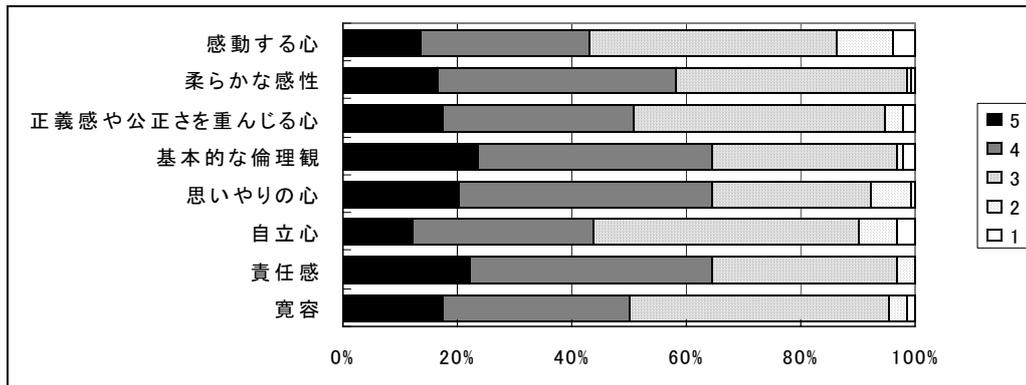


図4 新入生対象アンケート調査結果 (5:身に付いている~1:身に付いていない)

結果を見ると、2,3年生とは多少異なる点はあるが、やはり新入生においても「自立心」がはぐくまれていないと感じている生徒が多い。

#### ③ はぐくみたい心の明確化

豊かな心に関する教職員及び生徒へのアンケート調査を通して、はぐくまれていない豊かな心として「自立心」が共通して挙げられたが、新1年生については、さらに「感動する心」がはぐくまれていないという結果を得た。もちろん、様々な豊かな心をはぐくむことが人格形成上大切であるが、特に、本校では、はぐくまれていない「自立心」を重点的にはぐくむ必要があるということが明確になった。

#### (2) 平成17年度体育祭での取組

##### ① 縦割り活動を通して、コミュニケーション能力を高め、自立心をはぐくむ取組

前回までの体育祭はクラス対抗で実施してきたが、今回は学年を超えたコミュニケーションが図れるよう、一学年6クラスを三学年通しての縦割りチーム編成とした。

また、係活動や、各競技の準備活動に関しても、縦割り編成を生かして学年を超えたコミュニケーションをとりながら、できるだけ生徒が主体となって活動できる場を設け、自立心を育成することも図った。

② 特活部を中心とした単元評価の実施と改善

体育祭の実施に当たっては、実施要項にはぐくみたい心や身に付けさせたい態度を明示して全教職員に周知徹底を図った。

行事の後には教職員対象のアンケート調査を実施し、これを基に特活部で話し合いをもち、単元評価を実施し、自立心やコミュニケーション能力をはぐくむための課題を明確にし、その課題に対して次回への改善策を見いだした。

課 題：生徒が一生懸命取り組んでいて、仮装行列やその他競技も素晴らしくできたので多くの保護者に来校してもらいたい。
改善策：体育祭を休日に開催する。
課 題：仮装行列は全員で見られる工夫をしてほしい。
改善策：体育祭ではなかなか難しい点があるので、パフォーマンス大会として（文化祭の時に）体育館のステージなどで発表する。

(3) 平成18年度の取組

① 年間行事予定表への豊かな心の位置付け

前年度の単元評価等を基に、学校行事を見直し、年間行事予定を作成した。なお、その際、各行事に対してねらいやはぐくみたい豊かな心を明確に示した。

月	行 事	指導計画	ねらいやはぐくみたい豊かな心
4	部活動紹介	事前指導 生徒会、各部活動 評価改善 特活部会議 (4/12)	・学年を越えた人間関係の中で、豊かな心をはぐくむきっかけを作る
6	クラスマッチ (6/22)	事前指導 生徒会役員で種目決め HR指導 選手決め (6/2) 評価改善 全職員アンケート	・仲間との協力、団結心、愛級心、愛校心、自立心、コミュニケーション能力、感動する心
7	野球応援	バス内ホームルームの実施 生徒対象アンケート調査の実施 評価改善 特活部会議	・玉工生としての意識の高揚 ・愛校心、感動する心
	ホームルーム研修会	文化祭についての話し合い	・自立心、コミュニケーション能力、他との協力
10	文化祭	事前指導 実行委員会の結成 全体企画の立案 (生徒会) 各クラスでの企画立案 事後指導 生徒対象アンケート調査 評価改善 特活部会議、職員会議	・自己実現 (感動する心、自立心、コミュニケーション能力、他との協力、社会性)
11	マラソン大会	全員参加 (走れない者は集計作業) 評価改善 体育科会議	・自己実現、感動する心、団結心、愛級心
2	幼稚園生との交流会	事前指導 ボランティア委員、生徒会 事後指導 感想文 評価改善 特活部会議	・思いやりの心、幼い者を慈しむ心

以上のように、各行事のねらいやはぐくみたい心を明確にすることにより、それぞれの単元評価がしやすいようにした。また、一連の学校行事に際しての単元評価をそれぞれ蓄積することにより、それらを基に、一年間をふかんして各行事のねらいの達成度や行事間の連携などを評価する年間指導計画の評価につなげていこうと考えた。ここでは、学校行事の中でも中心的な行事である文化祭についての実践を詳細に示すこととする。

② 文化祭での取組

ア 前回の文化祭及び体育祭の単元評価に基づいた計画立案

平成16年度文化祭を実施して行った教職員対象アンケート調査を踏まえ、特活部で行った単元評価の結果に基づき、今回の文化祭に対して計画立案を行った。特に、前回の文化祭で良かった点は残し、課題に対しては積極的に改善を図った。前回好評だったために、今回も取り入れた点は、次の3点である。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラス企画を、まじめ企画とおもしろ企画の2本立てとする</li> <li>・ステージでのパフォーマンス発表</li> <li>・実行委員会、生徒会を中心とした生徒主体の活動</li> </ul>
---

また、今回の文化祭で変更改善した点を、次の表にまとめた。

企 画	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オープニングセレモニーの充実</li> <li>・県東地区合同ブラスバンドによる演奏、筑波大学ダンスサークルによる演技</li> <li>・本校生徒によるバンド演奏、本校生徒によるダンス共演</li> <li>・自動車部によるオイル交換サービス</li> <li>・外部団体の招待 介護老人保健施設「かすみがうら」、障害者福祉施設ワークス「りんりん」</li> </ul>
会 場	<ul style="list-style-type: none"> <li>・駐車場のスペースを利用し、テントを集約してテント村を作る</li> <li>・テント村に屋外ステージを作り、ダンスやバンドなどのパフォーマンスを発表する</li> </ul>

さらに、今回、新たに次のようなものを実施した。

<ul style="list-style-type: none"> <li>・新聞折り込み広告によるPR活動</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・乗馬体験</li> </ul>
--	---

なお、これらの取組は、文化祭のねらいでもある感動する心、自立心、コミュニケーション能力、協調性、社会性などをはぐくむために、今回の文化祭で改善を図ったものである。

イ 事前ホームルーム活動及び事後ホームルーム活動・事後調査

実行委員会を結成し（各クラス2人）、生徒会とともに、ポスター・プログラム作成、門装飾・製作、テーマ看板製作、野外ステージ装飾・製作、体育館ステージ装飾の各係が仕事を分担して活動した。各係では、生徒会を中心に立案した各種企画に基づいて準備計画を立て、製作等の作業に取り掛かった。また、実行委員は本部と各クラスとの仲介役となり、実行委員会で話し合われた内容や連絡事項をクラスに伝えるなど、ホームルーム活動において重要な役割を担った。事前ホームルーム活動では、始めに過去5回のテーマを提示し、全校生徒に今回のテーマを考えさせた。テーマの案は各クラスごとに提出させ、実行委員会で話し合い、今回のテーマを決定して全校生徒に公示した。クラス企画については、前回の文化祭を記録したビデオを視聴した上で立案させた。企画の決定に際しては、各クラスの実行委員が内容を委員会に持ち寄り、話し合いを重ねて決定した。その上で、クラス企画の準備活動を行わせた。

事後のホームルームではクラスごとに反省会を行い、個々の生徒の取組を振り返らせるとともに生徒対象のアンケート調査も実施した。

ウ 生徒及び教職員に対するアンケート調査(平成18年11月実施, 生徒数488人教職員53人)

生徒を対象としたアンケート調査を実施し、文化祭の目的である「はぐくみたい豊かな心」がはぐくまれたかを検証した(図5)。事前準備については、9割以上の生徒がしっかりできたと答え、特に、約8割の生徒が自分から積極的に取り組んだことがあったと回答しており、自力で物事をやっいていこうとする心構え、すなわち自立心がはぐくま

れていると考えられる。また、約7割の生徒が自分を表現することができ、9割以上の生徒が他の人と協力することができたと回答しており、生徒同士が交流し合い、コミュニケーション能力もはぐくまれたと考えられる。しかし、介護老人施設や障害者福祉施設の方々と接する機会があったと回答した生徒が2割に満たなかったのは次回の文化祭で改善する余地を残していると考えられる。

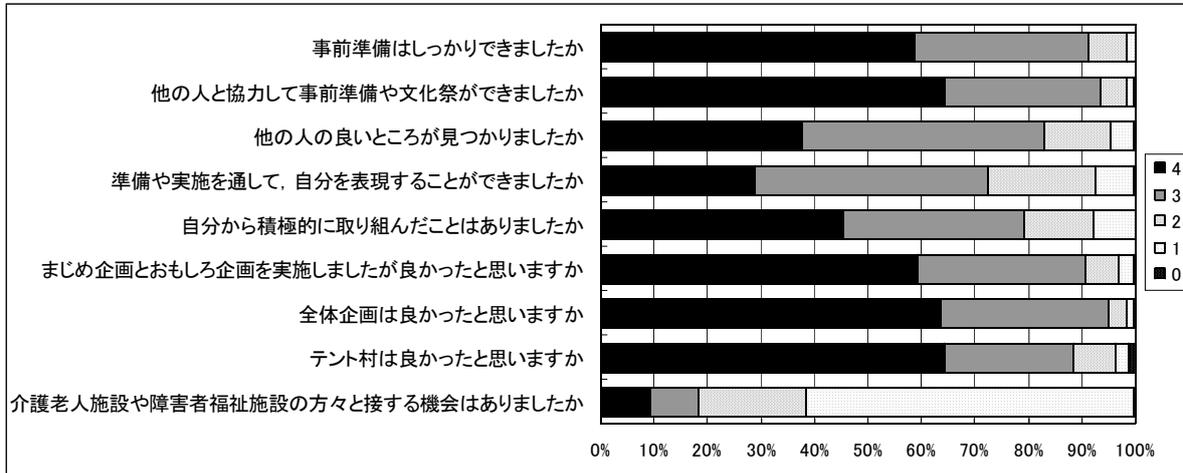


図5 生徒対象アンケート調査結果 (4:できた(思う・あった)~1:できない(思わない・ない) 0:無回答)

なお、自分から積極的に取り組んだことについて具体的に記述させたところ、次のような回答がみられた。事前準備等に積極的に関わった生徒が多いことが分かるが、事後の活動(掃除、後片付け)に対しても積極的にかかわった生徒もいることが分かる。

- ・クラス企画の事前準備 (141人)
- ・一般公開当日の販売等の仕事 (59人)
- ・宣伝, チラシ作り・配り, ポスター書き・貼り (46人)
- ・掃除, 後片付け (24人)

次に、教職員へのアンケート結果からは、今回の文化祭を実施しての成果と課題が浮かび上がった。成果としては、文化祭の目的について共通理解が図られたこと、企画についても概ね理解が得られたこと、そして何よりも9割以上の教職員が生徒の新たな側面を見付けることができたという点である。特に、生徒の変容があったという回答も9割近い数値になっている。課題としては、事前準備と教職員の連携という2点が明確になった。特に、教職員の連携については、できていたと答えた教職員が5割に満たない結果であった。

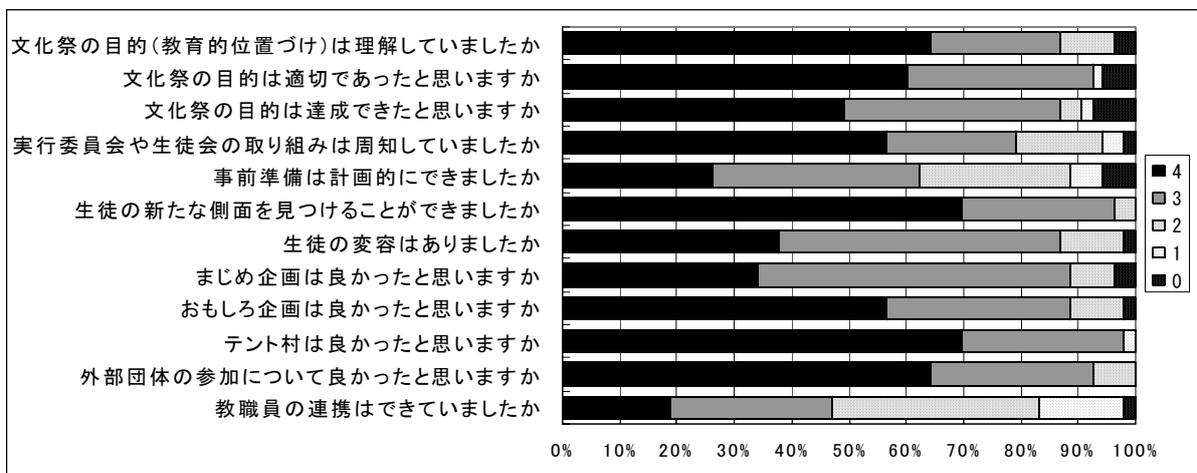


図6 教職員対象アンケート調査結果 (4:できた(思う・あった)~1:できない(思わない・ない) 0:無回答)

エ 特活部を中心とした単元評価の実施と改善

教職員および生徒のアンケート結果と、特活部の各先生が持ち寄った反省事項を基にして今回の文化祭の単元評価を行った。話し合いの中で明確になった課題は以下の4点で、それぞれについて改善策を検討した。

課題：事前準備・計画を早めるにはどうしたらよいか。
改善策：①全体の構想を夏休み前に決定する（始めのルールを敷く部分をしっかりと早めに行う）。 ②今回のデータをきちんとまとめて残し、次回へと引き継ぐ。③各係での打ち合わせ結果などが全職員に周知されるように、掲示板を作成する。
課題：まじめ企画へお客さんを呼び込むためにはどうしたらよいか。
改善策：①パビリオンのような順路を作成するとともに、テント村の屋外ステージでまじめ企画の宣伝をする。②ステージ発表の時間を決めて、まじめ企画へ足を運べる時間を作る。
課題：介護施設などの人たちと触れ合う機会がなかったと感じている生徒が多かったので、みんなが分かるようにできる方法はないか。
改善策：①文化祭の前に一度来ていただき、生徒と触れ合う機会を設ける。②車椅子の方が校内に入れるように事前にスロープ等を作る。③ボランティア委員会を中心に広報活動を行う。
課題：教職員の連携をよくするためにはどうしたらよいか。
改善策：①特活部以外の教職員にも各係を担当してもらい打ち合わせを密にする。②生徒会を中心に、各係の進ちょく状況やクラス企画、各団体企画の準備活動状況などをまとめて校内に掲示するなど、広報活動を行うことにより教職員や全校生徒への周知徹底を図る。

③ 単元評価を基に学校行事の年間指導計画の評価へ

上述したように、文化祭において、単元評価を行うことにより、課題が明確になり、いくつかの改善策を得ることができた。その他、特に野球応援については、近年全校生で観戦するだけの形式であったが、本校生としての意識を高め、愛校心や社会性をはぐくむことを目的として応援委員を中心とした全校応援に改善を図った。また、球場へ向かうバスの中をホームルームの時間とし、感動する心をはぐくむことをねらいとしたビデオ鑑賞を行った。事後のアンケート調査から、ビデオ鑑賞や応援で感動を得られた生徒は約8割となり、ねらいは達成できたと考えられる。このように、今年度の各学校行事の単元評価を蓄積していくことにより、学年末において、それらを基に、一年間をふかんして各行事のねらいの達成度や行事間の連携などを評価する年間指導計画の評価につなげていく予定である。

4 本校からの提言

- (1) 生徒が質問内容を理解できるよう質問の表現の工夫を図り、教職員および生徒を対象に豊かな心に関するアンケート調査を実施した。これらの調査により、本校としてはぐくみたい豊かな心を明確にすることができた。
- (2) 特活部を中心とした単元評価を実施することは、学校行事を実施する上での課題を明確にし、改善策を発見するために効果的な方法であった。さらに、逐次連絡や報告を行ったり、打ち合わせの機会を多くする等、全教職員の共通理解と連携を図る必要がある。
- (3) 平成17・18年度において、特に学校の中心的な行事である体育祭と文化祭について、特活部を中心とした単元評価をし、成果と課題を見だし、課題については改善策を考えることにより、学校行事の改善を図ることができた。
- (4) 自立心をはぐくむために各生徒が取り組めるように係活動を設定することや、コミュニケーション能力を高めるために話し合いの機会を多くするなど、事前のホームルーム活動を充実させることが、ねらいを達成する上で効果的であった。

## 『『豊かな心に関する意見発表会』の改善』

茨城県立三和高等学校 URL <http://www.sanwa-h.ed.jp/>

### 1 学校の概要

のどかな自然環境の中に現代的で美しい校舎が映える本校は、昨年度創立20周年を迎えた新しい学校である。地域に根ざした学校づくりを目指しており、地元中学校との連携協力体制も確立している。また、「誠心・精励・澁刺」を校訓に掲げ、心の教育に主眼を置き、誠意をもって物事に精一杯取り組むような澁刺とした生徒の育成に向けて、教職員が一丸となって教育活動に励んでいる。

### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) はぐくむべき豊かな心の明確化（意識調査）
- (2) 学校行事「豊かな心に関する意見発表会」の改善
- (3) 1学年対象「3行日記」「礼法指導」の実践

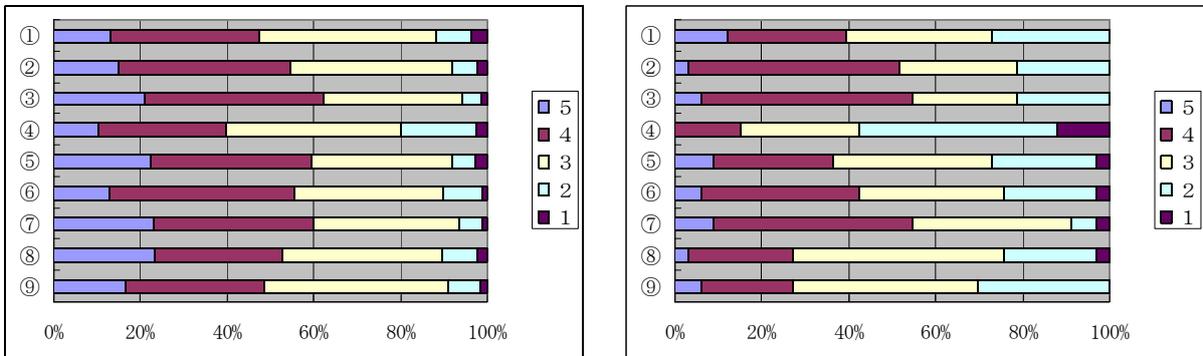
### 3 実践内容

- (1) はぐくむべき豊かな心の明確化（意識調査）

「豊かな心」に関するアンケート調査を全校生徒対象に実施した。また、同じ内容のアンケートを「教員側が願う生徒像」という趣旨で実施した。その結果、教員が見ている生徒像と生徒の実態は、概ね一致している。

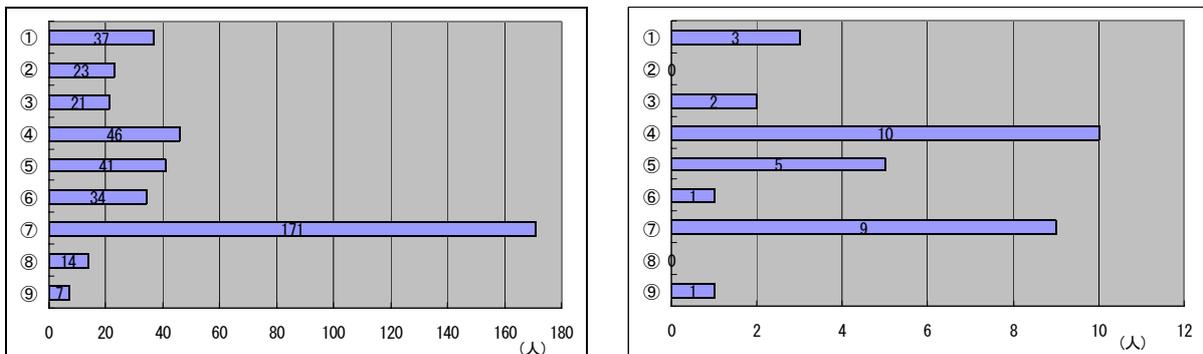
#### ◆ 身に付いていると考えている豊かな心

(左：生徒400人，右：教員33人 平成18年4月14日実施)



#### ◆ 一番必要だと思う豊かな心

(左：生徒394人，右：教員31人 平成18年4月14日実施)



「豊かな心」に関するアンケート調査用紙(1年生用)

- ◎ アンケート調査をおこなうにあたって  
 1年生の皆さんには、これから卒業まで三和高校で高校生活を送っていく中で、ホームルームや授業、たくさんの行事等を通して、学業のみならず心身ともに成長して行ってほしいと願っています。そこで、下に挙げる 10 項目の『心』について現在どの程度身に付いているか自己評価してみてください。  
 アンケートの結果は、今後の行事等で生かしていきたいと考えています。

- 1 性別(どちらかに○印)を書いてください。

学年	1年	性別	男 ・ 女
----	----	----	-------

- 2 下の①～⑩の項目について、現在どのくらい身に付いていると思いますか？  
 5段階で評価してください。(あてはまる数字に○印をつけてください)

番 号	項 目	5段階評価				
		大変よく身に付いている	←どちらとも言えない	→全然身に付いていない		
① 感動する心	美しい行為や話・芸術作品を見たり聞いたりして、心が満たされたという感じがしますか？	5	4	3	2	1
② 柔らかな感性	見たり聞いたりしたことに対して、何らかの印象を感じ取ったり、直感的に感じる心がありますか？	5	4	3	2	1
③ 倫理観	社会の中で守らなければいけないきまりや、善悪の基準が身に付いていますか？	5	4	3	2	1
④ 自立心	自分の力で物事に対処したり、自分の意見が言えますか？	5	4	3	2	1
⑤ 責任感	任された仕事は最後までやり遂げることができますか？	5	4	3	2	1
⑥ 正義感や公正さを重んじる心	不正を悪いことと感じたり、だれに対しても平等に対応できますか？	5	4	3	2	1
⑦ 思いやりの心	相手の気持ちになって考えたり、相手の立場に立って考える(同情の気持ちをもって)ことができますか？	5	4	3	2	1
⑧ 社会貢献の精神	社会に役立ちたいという気持ちはありますか？	5	4	3	2	1
⑨ 寛容	相手の失敗などをとがめだてしないで許したり、いい面を積極的に認めようとすることができますか？	5	4	3	2	1
⑩ その他 ( )	上記以外にあれば書いてください。	5	4	3	2	1

- 3 ①～⑨項目の『心』の中で、あなたにとって1番必要だと思う『心』は何番ですか？ ( )

**アンケートにご協力をいただきありがとうございました。**

① 教員が見ている生徒像と、生徒の意識・実態が一致している箇所

ア 教員も生徒も、本校生に一番欠けているのは「自立心」だと考えている。学級の決めごとや生徒会活動・部活動の参加に対して、極めて消極的で反応が悪く、自分の意見をなかなか言わない。そして、将来に向けての展望をもてないでいる生徒が非常に多いのが現状である。

イ 豊かな心の中で必要なのは、教員も生徒も「思いやりの心」であると考えている。本校において、ここ数年、一番多いトラブルの原因は「友人関係」である。教員側から見れば、ちょっとした友人の一言が、生徒には「学校をやめよう」と思うまでに発展してしまう。昼食を誰と食べるかまでが、学校が楽しいか楽しくないかの基準になってしまうようである。

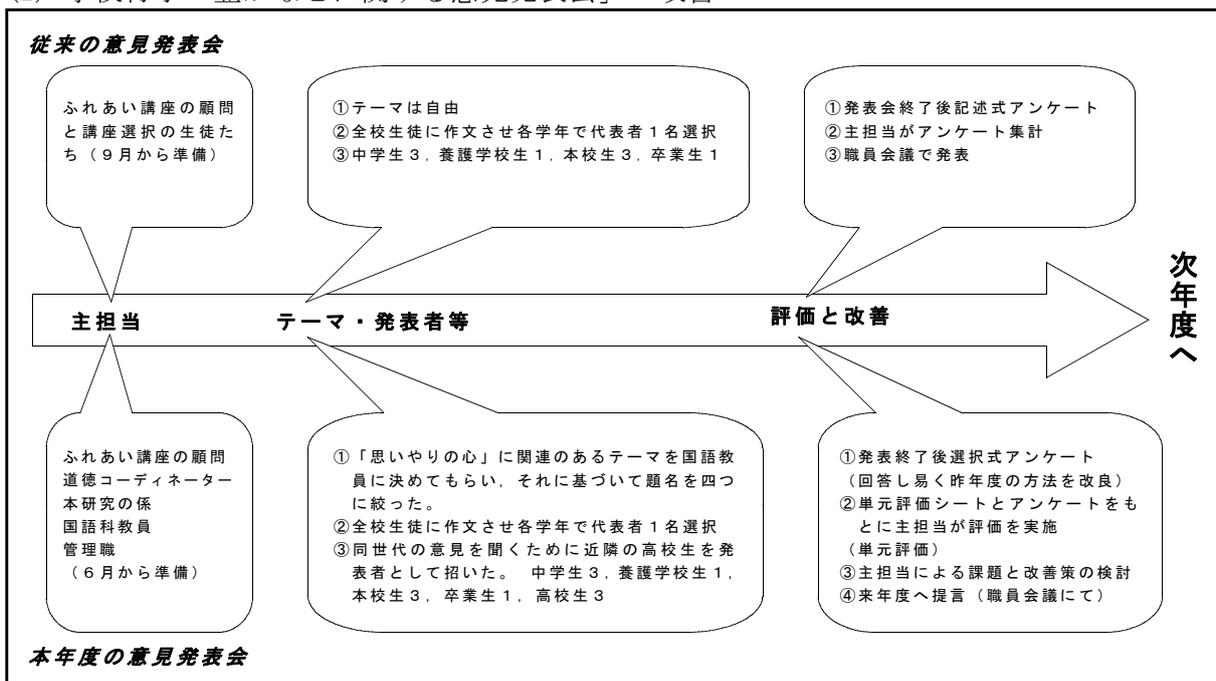
② 教員が見ている生徒像と、生徒の意識・実態が一致していない箇所

ア 部活動や生徒会・ボランティア活動をしている生徒は、責任感があってテキパキと動くことができるが、「生徒全体としては、責任感のある生徒はそれほど多くはない」と教員は実感している。しかしながら、教員の予想をはるかに超える人数の生徒達が、「自分には責任感がある」と回答している。教員側からすれば、「予想外の結果」である。

イ 多くの教員は、生徒に一番必要だと思う豊かな心は「自立心」であると考えているが、「自立心」が一番必要と考えている生徒はそれほど多くない。自力で物事を解決した経験が少ないために、それでいいと思っている生徒が多いと考える。

以上のことから、本校の生徒の意識・実態をうかがい知ることができると思う。自尊心があり、友達や親や教員との関わりを重要と思っているわりには、人との付き合い方が下手で、自信のないタイプが多いことである。さらに、学習意欲の低い生徒が多く入学している。これらの生徒に本校で「はぐくむべき豊かな心」は「思いやりの心」であり、友達や親や教員の立場、つまり、相手の立場になって考えられるようになることである。

(2) 学校行事「豊かな心に関する意見発表会」の改善



本学校行事は、他校種の人々の考え方や意見を聞くことにより、生徒が自分自身を見つめ直し、人間としての在り方・生き方を探求することを目的として平成15年度に始まったものであり、今年度で4回目を迎える。

① 今年度の変更点

ア サブタイトル及び課題テーマについて

昨年度まで、発表会のサブタイトルがなかった。そこで、今年度、本校ではぐくみたい「思いやりの心」を基に検討した結果、サブタイトルを「心と心のひびきあい」に決定した。

また、課題テーマは、これまでのテーマの中から、国語担当者に書きやすそうなものを選定してもらい、「友人との思い出」「ボランティア体験」「過去の自分を振り返って」「心に残るあの一言」の四つに決定した。本校の生徒もその他の発表者も、一番多く選んだテーマは「友人との思い出」であり、二番目は「過去の自分を振り返って」であった。「ボランティア体験」を選んだ発表者はいなかった。

イ 発表者について

昨年度まで、他の高校生の発表がなかった。そこで、他校の高校生はどんな考えをもっているのか、本校生にも知ってほしいと考え、今年度は、近隣の高校にも依頼することにした。一校目は、近隣にあつてライバル校と意識している「八千代高校」、二校目は、本校の模範にしたい学校ということで「岩井西高校」、三校目は、近隣の進学校ということで「境高校」に依頼した。三つの高校とも、本校の趣旨をくんで快諾していただいた。その結果、全参加校は本校を含め8校（発表者は合計11人）となった。内訳は以下の通りである。

- ・中学校 各1人（三和中学校，三和北中学校，三和東中学校）
- ・高等学校 各1人（八千代高校，岩井西高校，境高校）
- ・養護学校 1人（結城養護学校）
- ・本校生徒 各学年 1人
- ・本校卒業生 1人 ※ 各学校代表者の「学年」や「性別」は問わない。

ウ 評価について

発表後に行うアンケートは、昨年度まで記述式であったので、年度を追っての比較や集計が難しかった。そこで、今年度は選択式を取り入れることにした。さらに、単元評価シート（次ページ）を作成し、アンケートの集計結果を基に主担当で評価（単元評価）を試みた。その中から課題があると考えた二つについて、管理職を除く主担当がそれぞれ改善策をまとめ、12月の職員会議に諮って全職員の賛同を得た。

(3) 1学年対象「3行日記」「礼法指導」の実践

生徒に対する新しい取組は、1学年職員から提案されることが多い。2，3学年職員が1学年担当に戻ったときに、「こうすれば生徒が変わる」という新たな改革が生まれる。今年度の新しい取組とは、「3行日記」と「礼法指導」である。

① 「3行日記」について（タイトルは「今日の私を振り返って」）

ア 実施の目的・方法

- (ア) 1日の反省を通して自分の行動を見詰め直し、学習活動や生活態度を改める。
- (イ) 短い文に考えをまとめることによって、自己表現力を身に付ける。

(ウ) 毎日、放課後のHRの時間に記入する。

イ 「3行日記」から得られたもの

年度当初の日記の記述は、1行がやっとでひらがなばかりの文章や意味不明の内容、さらに誤字や脱字だらけのものもあった。ところが半年が過ぎ、1行だけだった記述が3行になり、漢字も増え、読んでいて分かりやすくなった。今後、5行日記や10行日記に発展し、自分の考えを作文に書いたり、日記や手紙が日常的に書けるようになることを期待したい。

また、この日記の記述がきっかけとなって、クラス内のいじめが見つかったケースもあった。

単元評価シート 「豊かな心に関する意見発表会」

平成 18 年 11 月 10 日 (金) 実施  
記入日：平成 18 年 11 月 17 日  
記入者：( )

評価 (課題特になし：○ 課題あり：△)

評価項目	評価	気付いた点および改善策等
1 ねらい(単元目標)が達成できたか。	○	・アンケート結果からも有意義であり、達成できた。
2 生徒は興味・関心を持って取り組んでいたか。	○	・70分及び発表を、最後まで集中して聞くことができた。 ・生徒の関心発表に喚起された手応えを感じた。 ・同世代の発表に興味・関心を持てた。 ・大人の話と異なり、身近な話題で興味深く聞いた。
3 運営については計画通りに実施できたか。	事前	△ ・隣の学校、教職員間で連携・連絡をとる、早い段階での準備があってもよい。 ・大周知なしで行った結果、事前に生徒へ1年大生が変化する状況をよく理解できていなかった。事前に詳しく指導すべき。
	当日	○ ・厳かに参加態度を良好に保つための手前が賓を、もう少しスムーズにすべき。
	事後	○ ・直後の生徒にアンケートを実施し、評価の模様がCDに録音し、記録として図書館に保存。参加した各学校にも配布した。
4 実施時期は適切であったか。	○	・文化祭前、生徒達の気が引き締まって祭りの行事と重なると、例年より2週間ほど遅い時期での開催となったが、妥当である。行事・学年行事を考えると、この時期がよい。
5 前年度の実践を生かした改善策は適切であったか。	○	・一人きりではなく、高生が参加したことによって、他校の代も参加しているという意識が広がった。高生が参加しているという意識が広がった。高生が参加しているという意識が広がった。
6 行事のねらいは適切であったか。	○	・大部分の生徒は、様々な意見・考え方を聞き、生徒それぞれが何かを感じながら、考えることのできる機会であった。
7 教職員の共通理解は図られていたか。	△	・もう少し早い時期から当日に向け、準備をすすめる。共通理解を図ることが必要。 ・教員は理解できているかもしれないが、1年生へ説明する点があり、担任がどう動くか分からない。
備考： 他校の高校生の発表が入り、非常に盛り上がった。		

② 礼法指導について

ア 指導の目的・方法

(ア) 3年次の進学・就職活動には必須である面接の基本を、1年次から身に付けておくことで、普段の生活の中でもあいさつや自然な歩き方、正しい服装などを意識できるようにする。

(イ) 毎週火曜・木曜の放課後（テスト1週間前を除く）に、各クラス2人程度を集めて実施している。

イ 礼法指導から得られたもの

学年主任中心の第1回目の礼法指導により、「生徒の性格」や「担任と生徒がかかわりをもつための重要なキーワード」の情報が得られ、各担任にフィードバックされた。これから第2回目の礼法指導が担任を中心に始まるが、「友達関係での悩み」や「家庭環境などの問題」等について各担任が発見できることを期待したい。

4 本校からの提言

(1) はぐくむべき豊かな心の明確化（意識調査）

本校は、「豊かな心」に関するアンケートの作成に際して、県であげている六つの「豊かな心」をさらに細分化し、九つとした。そして、それぞれの心がどのような心であるか具体的に示した。その結果、生徒はアンケートの内容を理解しやすくなり、それに対して答えやすくなったものとする。また、同じ内容のアンケートを教員対象にも実施し、生徒の意識と比較することができたので、本校ではぐくみたい豊かな心がより一層明確になったと思われる。さらに、保護者を対象にアンケートを実施することも検討したい。

(2) 学校行事「豊かな心に関する意見発表会」の改善

この発表会に際しては、まず、生徒全員に四つのテーマから作文を書いてもらい、その代表として各学年1人の発表者を選出するという方法を採用している。

現在の高校教育において、知識の習得としての「インプット」には多くの時間を割いているが、自分の考えを発表したり書いたりする「アウトプット」の時間は少ないと思われる。各学校において方法は様々あると思うが、自分の考えをしっかりと、それを発表する機会は必要であるとする。

また、作成した単元評価シートを基に、担当者で単元評価を実施することにより、問題点を明確にして改善策を速やかにまとめることができた。そして、職員会議において来年度への提言をすることができ、改善の方向が明らかとなった。

(3) 1学年対象「3行日記」「礼法指導」の実践

今年度の新しい取組である「3行日記」「礼法指導」の実践は、2、3学年を担当した職員が1学年担当に戻った時の「こうすれば生徒が変わる」という改革意識から生まれたものである。これらの実践は生徒のコミュニケーション能力の向上につながり、また、生徒と担任とのかかわりが強くなる等の成果を着実に上げている。どんな小さなアイデアでも、まず実践してみることが大切であるとする。そして、その成果を蓄積するとともに、実践の結果見えてくる課題を改善して次の学年に引き継ぐことで、学校全体としての大きな成果につながるとと思われる。このように本校においては、教員同士が協力連携し、協働して指導に当たる態勢が構築されてきている。

## 《特殊教育諸学校実践事例》

「自立心をはぐくむために幼・小・中・高の系統性を考えた体験学習の取組」  
茨城県立水戸聾学校 URL <http://www.mito-sd.ed.jp/>

### 1 学校の概要

本校は、千波湖の南約1.5kmに位置し、周りは住宅地である。明治41年に私立茨城盲啞学校として創立され、平成19年度には100周年を迎える。聾学校は、本県に2校であるため学区が広く18市3郡（平成18年5月）に渡っている。本校には、幼稚部、小学部、中学部、高等部があり、幼児・児童・生徒数は85人である。また、乳幼児の支援として0歳児からの早期教育や小中学校に在籍する児童生徒の支援として通級指導教室も行っている。

### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) 系統性を考えた「自立心」についての共通理解
- (2) 「自立心」をはぐくむための体験的な学習のカリキュラムの改善に向けた授業評価・単元評価
- (3) 幼・小・中・高の系統性を考えたカリキュラムの改善の取組

### 3 実践内容

- (1) 系統性を考えた「自立心」についての共通理解

#### ① 各学部間ではぐくみたい心のとらえ

平成17年度に実施した教職員によるアンケートでは、はぐくまれていると思われる心は「思いやりの心」「感動する心」で、はぐくんでいく必要があると思われる心は、「自立心」であった。そこで教育課程編成委員会では、自立心に関する幼児・児童・生徒の実態と自立心をどのようにとらえるかについて話し合った。幼稚部から高等部まで発達段階に大きな差があるが、実態として「親や教師に対して依存的な態度が見られることがある。」であった。

自立は幼稚部段階の身辺自立から高等部段階で具体的に考えられる社会自立までを含む。そこで、アンケート結果を基に、教育課程編成委員会では学校全体として「自立心」を「自分の力で生活しようとする気持ち」ととらえた。これを踏まえて各学部では、「自立心」の具体的な幼児・児童・生徒の姿について話し合い、各学部では「自立心」を下記に示すような具体的な姿としてあらわした。

- <幼稚部>・自分のことやまわりのことのできることはひとりでしようとする気持ち  
・まわりの人に頼らずに自分から行動しようとする気持ち
- <小学部>・自分がやらなければならないことをしっかりやろうとする気持ち  
・自分の役割を自覚し、自発的にやるべきことをしようとする気持ち
- <中学部>・自分のすべきことを自主的に考え責任を持って実行しようとする気持ち
- <高等部>・自己実現や社会自立に向けて主体的に考え、行動しようとする気持ち

#### ② 教育課程編成委員会の活用

系統性を考えた「自立心」について指導と実践をしていくにあたり、これまでの「教育課程編成委員会」をその中心に位置づけた。(図1) これまでの教育課程編成委員会では、教育課程や行事の検討を中心に行ってきたが、今年度はさらに「自立心」をはぐくむための体験学習について幼小中高の系統性をもたせるための中心的な役割をもたせるようにした。

学部会では、発達段階に応じた自立心の内容を明確にし、それをはぐくむというねらいを念頭に、学部行事や地域交流事業の目的や内容について検討した。

教科会では、教科・領域ごとに指導計画や内容について話し合いを行い、幼小中高の指導内容の系統性についても検討した。こうした学部会や教科会で検討したことを教育課程編成委員会において協議し、自立心のと

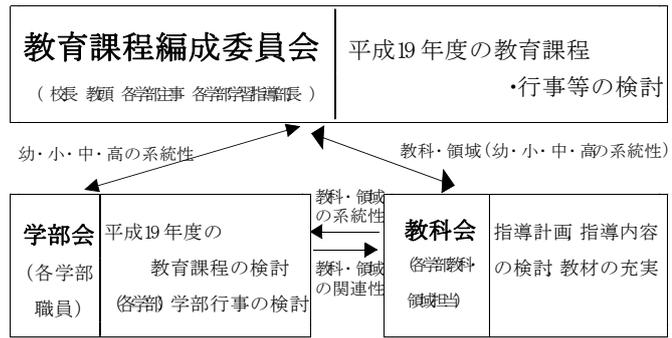


図1 教育課程編成のための組織図

らえや体験的な学習の内容について、幼小中高の系統性を意識した検討を行った。検討結果は、各学部の委員が学部にもち寄り全学部で共通理解のもと系統性を意識した実践に取り組んだ。

③ 全体構想

自立心「自分の力で生活しようとする気持ち」					
各学部の「自立心」のとらえ	学部	学部行事		地域交流	教科・領域
		a	b	c	
・自己実現や社会自立に向けて主体的に考え、行動できる気持ちや態度	高 等 部	春の遠足 宿泊学習 修学旅行	進路に関する研修会 社会見学 現場実習 職場見学	スポーツ交流 (水戸短大附属高等学校・大成女子高等学校)	各教科・自立活動 学活 総合的な学習の時間
・自分のすべきことを自主的に考え責任をもって実行しようとする気持ち	中 学 部	春の遠足 宿泊学習 修学旅行	進路に関する研修会 社会体験学習	作品展示 (故郷千波を創る会) スポーツ交流・授業交流 (平磯中学校) 交流 (霞ヶ浦豊学校)	各教科・自立活動 学活・道徳 総合的な学習の時間
・自分がやらなければならないことをしっかりやろうとする気持ち ・自分の役割を自覚し、自発的にやるべきことをしようとする気持ち	小 学 部	春の遠足 秋の遠足 宿泊学習 修学旅行	社会科見学 (高学年) 心と心のふれあいフェスティバル	作品交流 レクリエーション 交流 クリスマス会 (葉山荘) 文化祭 運動会 プール交流 (茨城朝鮮学校)	各教科・自立活動 学活・道徳 総合的な学習の時間
・自分のことやまわりのことのできることは一人でしようとする気持ち ・まわりの人に頼らずに自分から行動しようとする気持ち	幼 稚 部	5領域 自立活動		5領域 自立活動	保育 (なかよし活動 ⇒わくわくタイム)
		春の遠足 社会見学 セツ発表会 すもう大会 どんぐり拾い クリスマス会 まめまき ひな祭り発表会 お店屋さんごっこ		お楽しみ会 運動会 保育発表会 (千波保育園)	

a 自然・文化・芸術に親しむ活動 b 勤労生産及び職場・職業就労に関する活動 c 交流に関わる活動

体験的な学習は、主に学部行事（学部単位で行う行事）や地域交流で行い、これらの学習を各学部が自立心をはぐくむための取組として系統的に行っていくことで、本校でとらえた自立心の具体的な姿である「自分の力で生活しようとする気持ち」に近づけることができると考えた。

(2) 体験的な学習の計画・実践・評価・改善

① 幼稚部「なかよし活動」から「わくわくタイム」へ

ア 「なかよし活動」

幼稚部では、異年齢児の自主的な関わりや幼児一人一人が自分で考え行動しようとする力をはぐくむことを目的として「なかよし活動」を行ってきた。本年度は「遠足ごっこ」「新聞紙で遊ぼう」「お菓子作り」等をテーマに、4～9月まで4、5歳児11人3グループにより活動を行ってきた。

イ 活動の評価および改善

10月より3歳児6人を含めてグループを再編成するにあたり、評価表を基に教師間で前期の「なかよし活動」の単元評価を行った。その結果を基に10月からの活動について検討し、「なかよし活動」に代わり「わくわくタイム」を新たに設定した。活動の改善点は以下の通りである。

	な か よ し 活 動	単元評価結果	わ く わ く タ イ ム
グループ編成	3～5歳児を4～5人の縦割	・活動メンバーが固定化 ・活動時間が短い ・幼児が主体的に遊びを工夫する場面が限られている。	グループは編成しない
活動時間	40分		1時間20分
活動内容	教師が活動内容を設定		幼児が自主的に活動
活動のねらい	幼児一人一人の課題に合わせてねらいを設定		幼児の主体的な活動への参加、遊びの創造、コミュニケーション力の育成等

ウ 「わくわくタイム」

「わくわくタイム」は、幼児が互いにコミュニケーションを図り、主体的に活動に参加することで人や物への関わりを深めることを目的とした活動である。さらに、自分で考え工夫する経験を通して、自主性を高めるとともに「やった」「できた」という喜びを味わい、自立心をはぐくむことができるのではないかと考えた。

② 小学部低学年「心と心のふれあいフェスティバル」

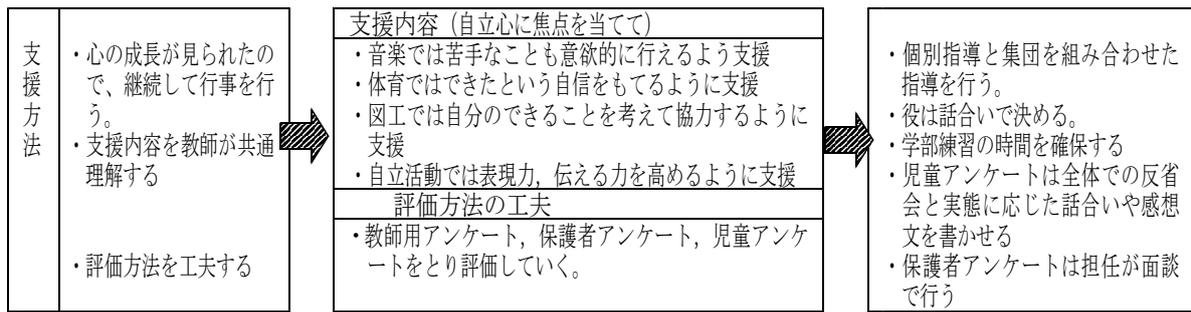
ア 活動内容

小学部では、豊かな心をはぐくむ活動の一つとして毎年「心と心のふれあいフェスティバル」に参加し、劇の発表を行ってきた。この活動で、児童は想像を膨らませながら生き生きと練習に取り組み、発表では一丸となって一つのものを創るという達成感をしっかりと味わえ、自立心を育てる大きな力になっている。

イ 評価及び改善

「心と心のふれあいフェスティバル」について、事前・事後の活動も含めて低学年担当教師で単元評価を行った。その際に、指導計画と支援内容の二つの面から評価し次年度の改善につなげていった。

17年度単元評価		18年度改善点			18年度単元評価	
指導計画	・授業時数を確保する ・指導内容をはっきりさせる ・練習時間を確保する	教科領域	時数	学習内容（事前学習に関する各教科との関連）		
		音楽	4	「ちょう」のダンスを踊る。（表現）		
		体育	4	友達と一緒に表現活動を楽しむ。（表現運動）		
		図工	4	協力して大道具・小道具を作る。（表現）		
		自立活動	24	いろいろな物語に親しむ（4月から週1回）配役を決める。決まった役で練習をする。登場人物の心情などを豊かに表現する。		
				・共通理解のもと支援できた。 ・教育課程が組みやすく、他の教科も計画に沿って行えた。 ・今後も、行事と各教科を関連づけて計画する。		



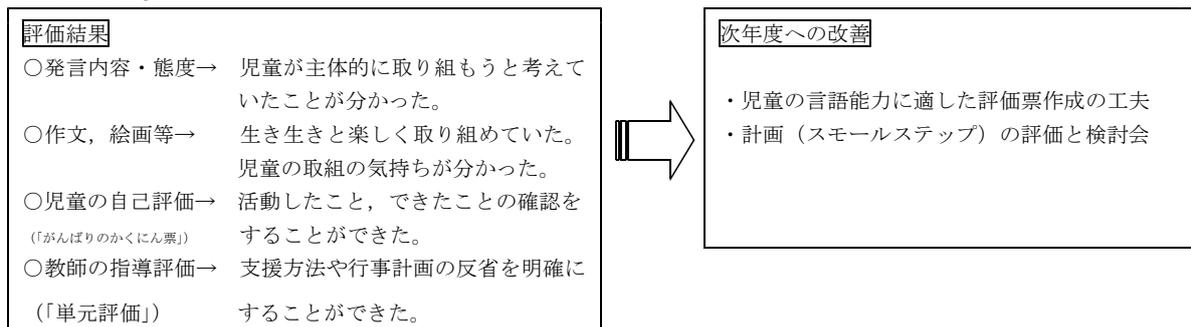
③ 小学部高学年「文化祭」

ア 活動の内容

文化祭は、児童にとって高学年としての自覚をもち、積極的に活動できる行事である。文化祭における一連の活動である、事前の話し合い活動、当日の活動、事後の活動を通して、自分の役割を自覚し、自発的にやるべきことをしようとする気持ちをはぐくんでいきたいと考えた。

イ 評価方法の改善

事前の話し合い活動での発言内容・態度、活動を通しての児童の自己評価（「がんばりのかくにん票」）や作文、絵画等を基に、単元評価を行い、次年度への改善点を明らかにした。



④ 中学部「社会体験学習」

ア 活動の内容

この取組は、学校以外の場所で様々な経験をするにより、自ら考え行動しようとする気持ちをはぐくみ、障害の理解を深められるようにしたいということで一昨年度から始めた。内容は、近隣の事業所に協力してもらい、それぞれの店舗で一日仕事の体験を行うものである。評価、指導計画、内容及び教科領域との関係は下図のとおりである。

指導計画	内 容 (19時間扱い)	評 価
事前学習 (7時間)	(自立活動) (道徳) 学習の内容 職業 コミュニケーション ルール・マナー	自己評価
体験 (6時間)	社会体験 (自立活動)	自己評価 お店の方の評価
事後学習 (6時間)	発表会 (総合的な学習の時間) <発表の準備> <発表会>	アンケート (保護者)
	自己評価 お店の方の評価 アンケートを基に評価	単元評価(教員)

イ 活動の評価及び改善

平成17・18年度の社会体験学習の評価は、「事前学習における生徒の自己評価結果」「体

験後の自己評価結果」,「お店の方の評価結果」,「発表会に参加した保護者のアンケート結果」を資料としてまとめ、事前に学部内の教師に単元評価シートと一緒に配布した。単元評価の話合いの前に、それぞれの教師は資料を参考にしながら、単元評価のそれぞれの項目について個人で評価し話合いにのぞんだ。

単元評価の話合いでは、それぞれの教師の単元評価シートの評価結果を集計し、それを基に気付いた点や次年度に向けての改善点を出し合った(図2)。

その結果、平成17年度から19年度に向けての社会体験学習の改善の推移は下図の通りである。

評価 (○:課題ありなし △:課題あり) 評価者 中学部職員 8人

単元・題材名		社会体験学習	
学部・学年・組	実施期日	平成17年11月1日~12月2日	
項目	評価内容	○	△
学習状況	・個人の目標を実現できたか。	8	0
	・興味・関心を持って学習していたか。	8	0
学習内容	・障害の実態に適した内容であったか。	7	1
	・分かりやすい内容であったか。	8	0
方法	・個に応じた指導は行えたか。	8	0
	・教材教具は適切であったか。	8	0
	・学習形態は適切であったか。	8	0
	・ITは有効に機能していたか。	8	0
計画	・指導計画通りに実施できたか。	7	1
	・個別の目標は、適切であったか。	8	0
	・指導時間数は適切であったか。	5	3
	・年間指導計画に基づいて実施されているか。	7	1
その他	・教育資源の有効活用ができたか。	7	1
	・次年度も実施すべき内容か。	8	0
備考	徐々に職種の幅を広げて、ある程度、自分の希望の職で経験できるとよいと思う。社会に聾学校の子どものことも理解してもらえるのでお互いによいと思う。生徒にも社会体験という刺激があって第三者から認められ励みにもなると思う。 社会体験という貴重な職業体験を通して、大人が働くということの大変さを実感した生徒が多かった。社会体験学習は内容に深みが出ている。		

図2 単元評価シート(17年度)

	体験の場所	事前指導	発表会
17年度	1年 Aスーパーマーケット 2年 Bスーパーマーケット 3年 Cスーパーマーケット	・ 職種、自分に合う仕事 ・ コミュニケーションについて ・ ルール・マナーについて	・ 平日に実施 (保護者の参加4人)
評価結果	・ 職種の幅を広げて、生徒の希望の職業で経験できるとよい。 ・ 事業所の数や種類が増えると発展的な指導ができる。	・ 保護者もこの取組に関心をもっている。保護者と連携した活動にできるのではないかと。 ・ 確実に伝わる方法として筆談を考えている事業所もあった。	・ 発表会を保護者参観の形で行うことには意義がある。
18年度	1年 A, B, Cスーパーマーケット 2年 (希望) 図書館, 聴覚障害者作業所 グルーミングスクール 3年 (実態を考慮) ホームセンター	・ 職業について (保護者への聞き取り) ・ コミュニケーションについて (確実に伝えるための方法) ・ ルール・マナーについて (高等部生徒の中学部生徒に対するメッセージ)	・ 保護者会の日に実施 保護者の参加15人 寄宿舎職員等の参加もあった。
評価結果	・ 希望の場所を取り入れたことで生徒の意欲が高まった。 ・ いろいろな職種を体験して、働くことについて考えることができる。	・ 現場実習の体験談や保護者への聞き取りを教材に使いよくなった。 ・ 視聴覚教材が有効に使えた。	・ 保護者の参加が増えた。 ・ 活動の様子を知ってもらうことで将来について家庭で話し合うきっかけになる。
19年度	1年 A, B, Cスーパーマーケット 2年 希望場所を考慮し体験場所を決める 3年 希望場所を考慮し体験場所を決める	・ 平成18年度と同様に実施する。	・ 平成18年度と同様に実施する。

⑤ 高等部「現場実習」

ア 活動内容

将来の社会参加や自立に向けて、企業等での生活や仕事を通して、働くことの大切さや人との関わりを学んでいく。実習は1年生から始まり、期間は5～10日間。事前・事後の学習は、自立活動、総合的な学習の時間で行っている。

イ 評価方法の改善

今年度まで行ってきた生徒の自己評価、実習先の評価、保護者の評価に基づいて見直しをした結果、下図のようになった。

	評価者(評価方法)	評価についての検討結果	次年度への改善点
実習中	自己評価 [実習日誌]	・実習生にとって、実習内容を毎日振り返ることは大変意義がある。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特に問題なし。</li> <li>・現行の形でよいと思われる。</li> <li>・実習日誌を基に評価項目による自己評価を行い、感想文を書き、今後の実習プランを考える手だてとする。</li> <li>・保護者の感想・意見の他に評価項目を設定し、保護者の立場から見た評価を加えていく。</li> <li>・自己評価や実習先からの評価等の記録を高等部内で回覧し、高等部職員が生徒の実習に関する様子を知り、情報を共有できる体制をつくる。</li> </ul>
	実習先の評価 [実習日誌]	・実習生の励みになり、保護者にも実習先での様子を伝えることができて良い。	
	保護者の評価 [実習日誌]	・保護者と生徒が実習について話し合うきっかけとなっている。	
実習後	自己評価 [実習日誌]	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己評価および感想を毎日記入しているので、実習後に反省しやすい。</li> <li>・実習日誌を利用して実習の反省をしているだけである。評価項目による自己評価や感想について考えることも必要である。</li> </ul>	
	実習先の評価 [評価票]	・約30の評価項目に○を付ける形なので記入しやすい。	
	保護者の評価 [感想アンケート]	・評価項目を設定し、保護者から見た生徒の取組について考えてもらうことも大切である。	

4 本校からの提言

- (1) 「自立心」については、教職員のアンケート結果や幼児・児童・生徒の実態等から、学校全体としての「自立心」を考える。それを受けて、各学部において十分な話し合いをして発達段階に応じた「自立心」についての具体的な姿をとらえることが必要である。これにより、各学部が、同じ方向を目指して実践することができる。
- (2) 体験的な学習を中心にして「自立心」をはぐくむにあたっては、教科領域とも関連させながら「自立心」をはぐくむという視点でカリキュラムを見直していくこと、そして見直しにあたっては、取組に応じた評価シートを作成し、それを基に各学部で話し合いをすることが大切である。本校では、評価シートを使用することで、話し合いのポイントや改善点が明確になり、学部教師間の共通理解のもと、次年度の「自立心」をはぐくむための体験的な学習のカリキュラムの改善にいかすことができた。
- (3) 系統性を持たせた取組をするにあたっては、教育課程編成委員会のような校内で中心的な役割を果たす組織を作り、機能させることが必要である。本校では自立心の捉えや体験的な学習について、各学部で検討したことを、教育課程編成委員会で検討した。それにより、幼・小・中・高の系統性を意識した取組に改善することができた。また、委員会で検討したことが各学部によく伝わっていくことで、隣接学部への関心も高くなり、他学部の行事を見学する教師や児童生徒が多く見られるようになった。

## 「人とのかかわりの中で自立心をはぐくむための交流教育の改善」

茨城県立協和養護学校 URL <http://www.kyowa-sh.ed.jp/>

### 1 学校の概要

筑西市の東部（旧協和町）に位置し、畑や水田、木々に囲まれ自然に恵まれたのどかな環境の中に立地している。本校は、小学部生から高等部生まで在籍する知的障害教育の養護学校である。ほとんどの児童生徒は、スクールバスを利用して登下校しているが、自転車等を利用して自力で通学している生徒（13人）もいる。基本的な生活習慣の確立や将来の社会生活に必要な力を身に付けるため個別の教育計画に沿った学習を進めている。児童生徒数(H18.11.1現在)は、小学部55人、中学部41人、高等部48人の計144人である。

### 2 特に力を入れてきた取組

- (1) 全教職員による「特にはぐくみたい心」の明確化
- (2) 交流教育についての学部間連携の工夫と授業評価
- (3) 評価から始まる交流教育活動計画の改善

### 3 実践内容

- (1) 「特にはぐくみたい心」の明確化

#### ① 明確化までの手順

全教職員で「豊かな心」を共通理解するにあたり、図1のような手順で「特にはぐくみたい心」を明確にしていった。

#### ア アンケートの実施

本校の児童生徒にどのような心をはぐくまれているか、本校職員を対象にアンケートを実施した。その結果、はぐくまれている心としては、「思いやりの心」と「感動する心」が多く挙げられ、「自立心」がはぐくまれていないという結果が出された。また、人間関係づくりが不得手な児童生徒の割合については、「5割以上いる」という回答が多かった。

#### イ 全職員による「特にはぐくみたい心」の明確化

アンケートの結果を基に、「はぐくみたい心」について各学部やカリキュラム係会で検討した結果、『**思いやりの心、感動する心、自立心、人とのかかわりを**

**大切に思う心**』の四つの心としてとらえることとした。本校の児童生徒は障害があるため支えてもらうことが多くなってしまい、人とかかわる場面が限られてしまうという実態がある。そこで様々な人とかかわり合いながら自分の考えもしっかりとって生きていける力を身につけて欲しいという思いが、本校職員の共通の願いとして確認された。その結果、この四つの心の中から、本校の児童生徒にはぐくまれているとされた「思いやりの心」と「感動する心」を大切にしながら、十分にははぐくまれていない「自立心」と「人とのかかわりを大切に思う心」が特にはぐくみたい心として絞られていった。

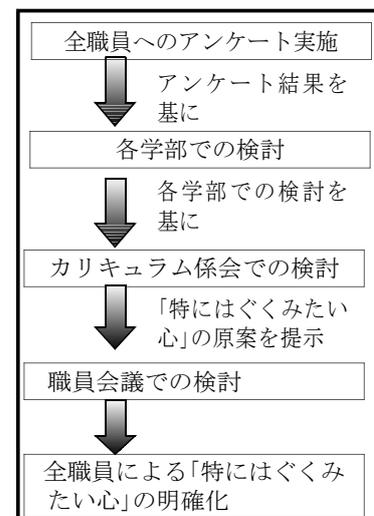


図1 明確化の手順

② 交流教育（平成16年、障害者基本法の一部改正により「交流及び共同学習」と定められた）の重視

本校の児童生徒にとって本校以外の児童生徒や地域の方々とかかわる機会は、限られており、交流教育における人とかかわりや様々な体験は、社会性を養い、好ましい人間関係を育てる上で貴重なものである。この機会に交流教育を見直し、「はぐくみたい心」に目を向けて評価・改善していくことは、意義のあることと考えた。また、交流教育は、小中・高すべての学部で行われているものであり、系統的に見ていくこともできないのではないかと考え、交流教育を取り上げて研究していくこととした。

③ 学校教育目標との関連

研究の全体構想図で示したように、本校で「特にはぐくみたい心」とした「自立心」と「人とかかわりを大切に思う心」は、本校の研究テーマである「生きる力を高める」こととも関連して研究できるものと考えた。「自立と人とかかわり」は、本校の児童生徒に身に付けて欲しい「豊かな心」であり「生きる力」であることが、あらためて確認された。「自立心」については、「自分の力で」から「自己選択」「自己実現」へ、「人とかかわりを大切に思う心」については、「仲良くする、かかわりを受け入れる」から「自分からかかわる」「人のために何かをする」へ、発達段階に応じて系統的にはぐくんでいきたいと考えた。

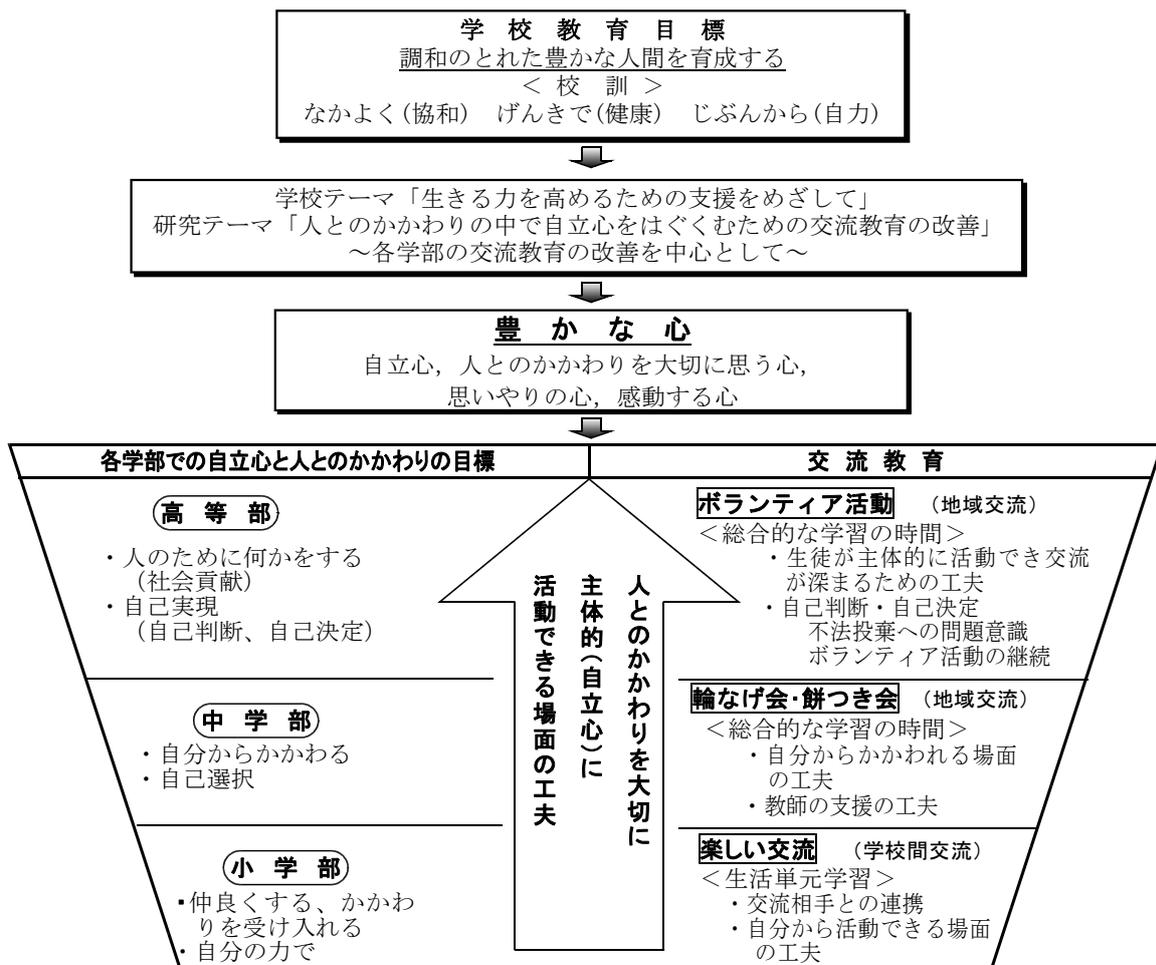


図2 研究の全体構想図

(2) 交流教育についての学部間連携の工夫と授業評価

① 系統性をもった指導のための組織の工夫

これまで交流教育は各学部ごとに実施してきたため、学部のみでの評価でしかなかった。今回の研究をうけ、学校全体で交流教育のカリキュラムの改善に取り組むために「カリキュラム係会」を組織した。「カリキュラム係会」のメンバーは図3のように各学部の主事と交流担当者、支援部地域交流係員、研究協力員、教務主任、管理職であり、

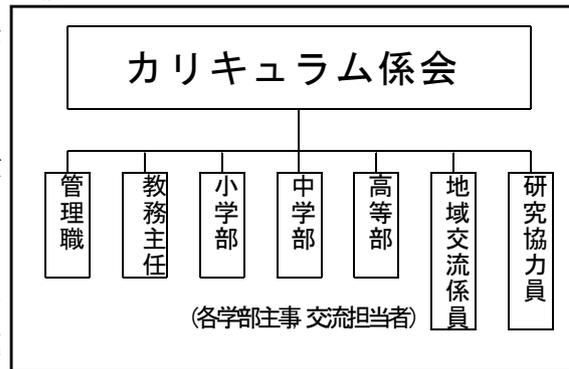


図3 カリキュラム係会組織図

係会の会合は、年4回程度とし、児童生徒の活動状況や目標に対する実現状況、実施後の評価結果、改善策等について係会の中で話し合い、各学部での改善につなげることを考えた。

② 評価の方法と観点

評価の方法としては、教師間の反省、児童生徒へのアンケートや感想、表情等による気持ちの読み取り、また交流相手の感想やアンケート、保護者へのアンケート等を考えた。そして、児童生徒の実態に応じて学部ごとに感想やアンケートの結果を分析したり、活動内容シートで活動場面ごとの「豊かな心」のはぐくみについて確認したりして、改善につなげるようにした。

(3) 評価から始まる交流教育活動計画の改善 (各学部の実践)

① 小学部：学校間交流「楽しい交流」本校4・5・6年生と古里小学校4年生

17年度 (1年次)	改善 (A)	18年度 (2年次)	改善 (A)	次年度の交流活動
<b>活動内容 (P, D)</b> ①ゲームやオリエンテーリング ②運動会予行練習 (古里小) ③文化祭見学 (協和養護) ④作って食べよう <b>評価 (C)</b> 活動内容シート ・観点毎の活動の振り返りによる気づき 感想 ・児童主体の活動の不足と必要性 授業評価 ・実態の理解	両児童の連携の工夫 (主体的活動の場設定) 児童の活動の工夫 (活動の場設定) 児童の活動の工夫 (活動の場設定)	<b>活動内容 (P, D)</b> ①ゲームやオリエンテーリング ②運動会練習参加 (協和養護) ③一緒に遊ぼう (古里小) ④ゲームをしよう <b>評価 (C)</b> 活動内容シート ・児童主体の活動への意識の向上 ・活動内容の見直しの必要性 ・実態に基づくねらいの明確化 感想 ・実態の理解 授業評価	両児童の連携の工夫 (主体的活動の場設定) 児童の活動の工夫 (活動の場設定) 児童の活動の工夫 (活動の場設定)	

ア 1年次の取組

交流活動において一つ一つの活動を振り返り、評価・改善に取り組んだ。方法としては、活動内容シート (図4) に記入し評価するものであり、それにより改善点が明確になり、内容や取り組み方を児童主体にするなどの工夫も行った。古里小学校とは以前からの交流もあるため、活動の内容は大きくは変えず、実施に至るまでの連携と児童主体の活動を重視し、計画した。

イ 2年次の取組

交流活動を生活単元学習の年間指導計画に位置づけし、活動のねらいを再確認して取り組んだ。両校での活動計画の話し合いの中で、児童の自発的な活動を尊重し、連携を図りながら行った。また、自主性や自発性の向上のため本校では、代表委員会を発足し児童主体で計画を進めた。

活動名 「いっしょにがんばろう」

実施日 平成18年9月20日(水)

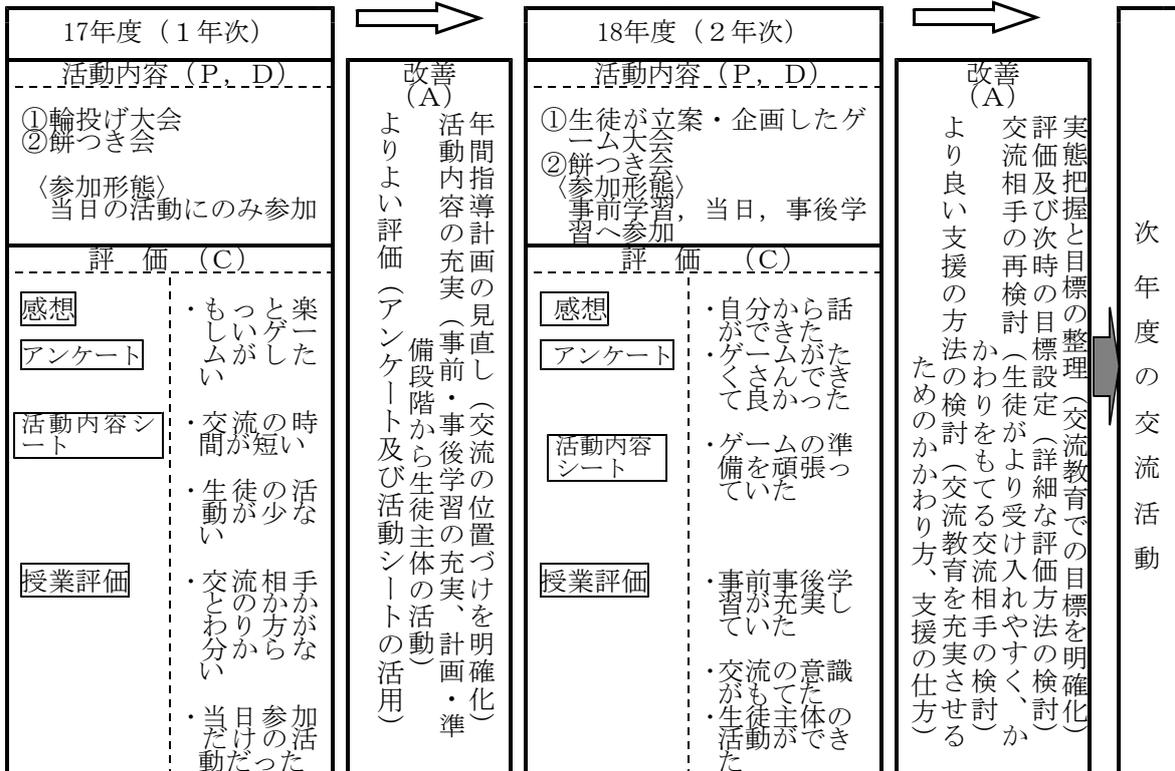
	自立心	仲良くする心
代表委員会	・代表委員会で使用する作業テーブルを、始まる前に自分で用意していた。 ・早め集まった児童が、まだ来ていない児童を「呼んでくるね」と教師に伝え呼びに行った。等	
交流当日	・二人組になる相手を自分で選び、「一緒にやろう」と誘うことができた。 ・照れてしまい自分から「やろう」となぐさめか相手に言い出せなかった児童も、教師に意思を伝えた後、相手の児童こきちんと意思を伝えることができた。等	・登校時、相手校の児童を見つけると「来たよ」と大喜びしていた。 ・チーム戦だったため、作戦会議では両校の児童が協力してペア決めを行った。等
連絡帳	・交流後、代表委員の児童に「終わりの言葉、前より上手だったね」と褒めてあげると、「練習したもん」と自慢気になっていた。等	・前日から「楽しみにしているようです」と連絡帳に記してあった。

ウ 次年度へ向けて

図4 18年度活動内容シート（一部抜粋）

活動の計画を行う際に学部として捉えた「豊かな心」を高めるためのねらいを明確にすることは交流活動だけでなく教育活動全般において必要なことである。小学部では学校間交流のほかに地域交流として近隣の方々とのフォークダンスや高校生との餅つきなどの交流も行っており、その中でも豊かな心をはぐくむことができるように活動の工夫をした。今後も記録による評価を続け実態を的確に把握し、それに基づき目標の明確化を図り、児童が興味関心をもって取り組む中で主体性や自発性もはぐくんでいきたい。

② 中学部：地域交流「いろいろな人と交流しよう」谷永島老人会・ライオンズクラブ



ア 1年次の取組

活動については、豊かな心がどんな場面ではぐくめるのかといった観点を整理するため、活動内容シートを作成した。また、評価方法として交流相手や生徒自身、教員に対

しアンケート調査や聞き取り調査を行い、次の活動にいかせるようにした。特に生徒のアンケート結果を丁寧に取  
り上げ、「恥ずかしい」「かかわり方が  
分からない」「もっと楽しい遊びがし  
たい」など課題となる評価に注目し、内  
容の吟味または、内容の変更・活動時  
間の工夫・場の設定の工夫・相手にか  
かわろうとすることへの支援等につい  
て次年度への方向性を出した。

1	自分たちでゲームの内容を計画でき ましたか？	よくできた あまりできなかった
2	自分から準備・片づけができた か？	よくできた あまりできなかった
3	友達と協力して進めることができた か？	よくできた あまりできなかった
4	おじいさんやおばあさんたちと楽し く活動できましたか？	よくできた あまりできなかった
5	自分から頑張れたことを書いてみま しょう。	

イ 2年次の取組

1年次の取組を受け、年間指導計画  
の見直しに際し、交流教育の位置付け

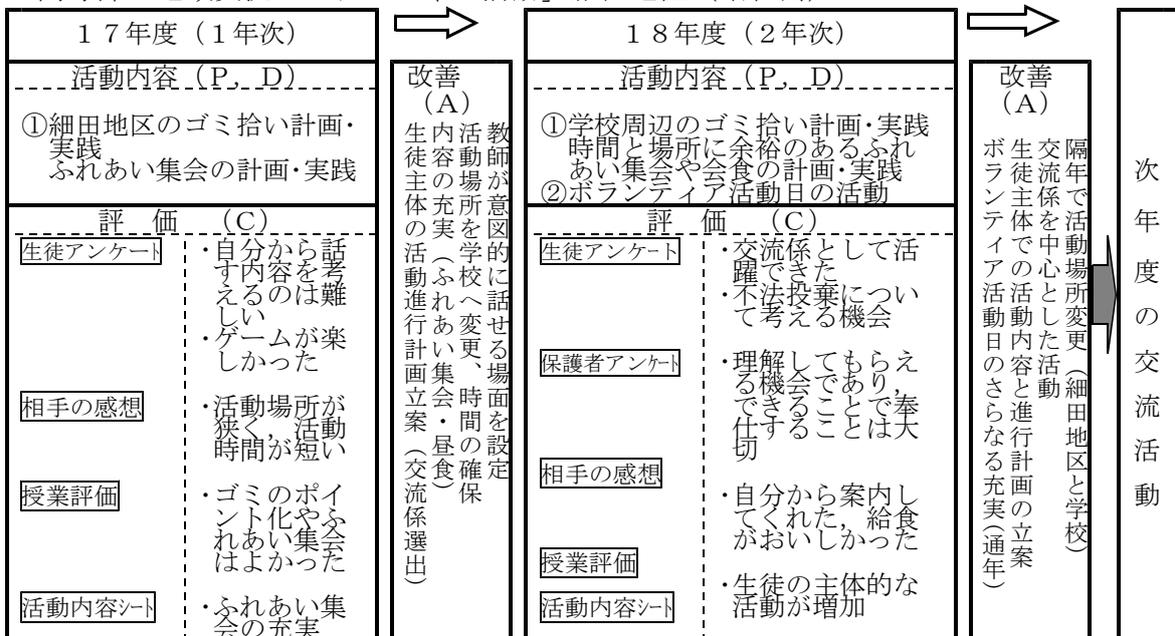
図5 生徒用アンケート用紙

を明確にし、生徒自らが内容を決めて選択できる活動の選出や内容の精選を行った。活  
動内容の充実に関しては、昨年度の課題となる評価の改善という観点から、内容の充実  
や支援の方法、時間の確保等、生徒が主体的に取り組むことができるように設定した。

ウ 次年度へ向けて

交流活動を通した豊かな心をはぐくむための取組は、2年間の活動を進めていく中で  
整理・改善されてきたが、さらにより良いものにするためには、交流相手を再検討する  
こと、個々の実態に応じて交流活動における目標を詳細に設定し明確化すること、さら  
により良い支援の方法や評価方法などを検討していくことが必要である。

③ 高等部：地域交流「ボランティア活動」細田地区（昭和会）



ア 1年次の取組

高等部では、現場実習、学校行事、校外学習、外部講師を招いての授業等で学校外の  
人とかかわる機会が多いが、交流教育については、細田地区の方々との「ボランティア

活動」のみである。今回の研究をうけて、全生徒が参加できる期日を設定し、ゴミにポイントをつけて意欲を高めたり、ふれあい集会でかかわり合える場面を意図的に増やしたりするなどの工夫をした。また、活動内容シートを作成して活動場面で「豊かな心」のはぐくみについて評価し次年度への改善を明確にした。

#### イ 2年次の取組

1年次の評価を基に、生徒が主体的に活動でき、交流が深まるための改善を考えた。具体的には、場所や内容の工夫、時間の確保等であり、今回初めて細田地区の方々を、PTAの奉仕作業日に学校に招待して、運動会の持久走コースのゴミ拾いを実施した。活動後、保護者にも「ボランティア活動」についてアンケートを実施した。結果からは、理解を深めてもらえる機会であり、自分たちのできることで役に立つことは大切なので継続した活動を望むという意見が多かった。また、細田地区の方々からも、生徒のこれまでとは違う生き生きとした表情や積極的な場面を見ることができたという感想が聞かれた。ボランティア活動の発展として、「ボランティア活動日」を設定して、年間を通して生徒が主体的に校内の清掃活動を実施した。

#### ウ 次年度へ向けて

交流教育については、社会貢献や自己決定、自己判断できる活動内容を実行委員の生徒を中心に計画し、ボランティア活動日についても、生徒の主体性を大切にしながら定着した活動として充実させていきたい。さらに、すべての教育活動を通して「豊かな心」をはぐくむという考えから、年間指導計画の見直しを行い、すべての領域・教科のねらいに「主体的に、自ら考える」「友達と協力して、相手に伝えるように」等の言葉で本校の「特にはぐくみたい心」が明記されていた。

### 4 本校からの提言

- (1) 「特にはぐくみたい心」を明確にするために、全教職員によるアンケートを実施し、児童生徒の実態を把握した。それを基に、各学部で十分な話し合いを通して、課題となっている「自立心」「人とのかかわりを大切に思う心」を本校の「特にはぐくみたい心」として絞り込んでいった。その絞り込んでいった心を発達段階に応じて各学部で具体化していくことで、小学部・中学部・高等部の系統性を持った指導の重要性が全教職員の間で再認識できた。
- (2) 学校全体で交流教育の改善に取り組むにあたって、その中心的な役割を果たす組織体制をつくるのが大切である。本校では「カリキュラム係会」を組織し、各学部の児童生徒の交流教育についての活動状況や目標に対する実現状況、実施後の評価結果や改善策等についての話し合いを重ねていった。その結果、交流教育だけでなく、教科や領域等においても系統性を意識した取組がみられるようになった。
- (3) 活動計画の改善にあたっては、新しいことを始めるのではなく、これまで行ってきた活動を評価し、そこから課題を見つけ、改善策を学部全体で検討していくことが必要である。評価にあたっては、教師による評価だけでなく、児童生徒・保護者・交流先の方などからも感想やアンケートをとり、それを基に観点を絞って評価していく。その結果、活動計画や内容についての改善点が明確になり、教師の取り組み方が変わると同時に、このような評価・改善の繰り返しを通して児童生徒の「豊かな心」がはぐくんでいける。

## IV 豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善（資料編）

### 1 「豊かな心をはぐくむ取組」に関する意識・実態調査の概要

#### (1) 調査のねらい

現在、各学校で行われている豊かな心をはぐくむ取組の状況を把握するとともに、その成果と課題を明らかにし、「豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善」に関する研究の資料を得る。

#### (2) 調査方法及び調査内容

質問紙調査〔豊かな心をはぐくむ取組に関する意識・実態調査【資料】p.86〕

#### (3) 調査時期

平成18年1月

#### (4) 調査対象

茨城県内の市町村立小学校	577校
市町村立中学校	234校
県立高等学校	113校
公立特殊教育諸学校（分校を含む）	21校

#### (5) 調査回答者

教務主任

#### (6) 調査項目

##### ① 豊かな心をはぐくむ取組の実施状況

ア 豊かな心のうち、最もはぐくまれていると思われるものと最もはぐくまれていないと思われるもの

イ 豊かな心のうち、今年度はぐくみたいと重視しているもの

ウ 豊かな心をはぐくむために重視している教育活動

エ 豊かな心をはぐくむために工夫して実践していること

##### ② 豊かな心をはぐくむ取組についての成果と課題

ア 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の成果

イ 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の課題

#### (7) 「豊かな心」について

本調査においては、「豊かな心」を茨城県教育委員会が示している次の六つととらえた。

- 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- 正義感や公正さを重んじる心
- 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- 自立心、自己抑制力、責任感
- 他者との共生や異質なものへの寛容

## 2 意識・実態調査の結果

### (1) 集計結果の表示

茨城県内の市町村立小学校，市町村立中学校，県立高等学校，公立特殊教育諸学校から寄せられた回答用紙を，校種毎に集計した。

グラフは，すべて百分率で表示した。

小学校，中学校，高等学校，および特殊教育諸学校をそれぞれ，小，中，高，および特と示した。

### (2) 集計結果

#### ① 豊かな心をはぐくむ取組の実施状況

##### ア 豊かな心のうち，最もはぐくまれていると思われるものと最もはぐくまれていないと思われるもの

最もはぐくまれていると思われるものについては，小・中・高では，「他人を思いやる心や社会貢献の精神（小30.3%，中38.5%，高30.1%）」，「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性（小27.0%，中21.8%，高16.8%）」，「生命を大切にし，人権を尊重する心などの基本的な倫理観（小23.9%，中16.7%，高16.8%）」が相対的に多く，特では，「美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性（38.1%）」が多い。

一方，最もはぐくまれていないと思われるものについては，どの校種も「自立心，自己抑制力，責任感（小57.7%，中48.3%，高52.2%，特28.6%）」が多い。

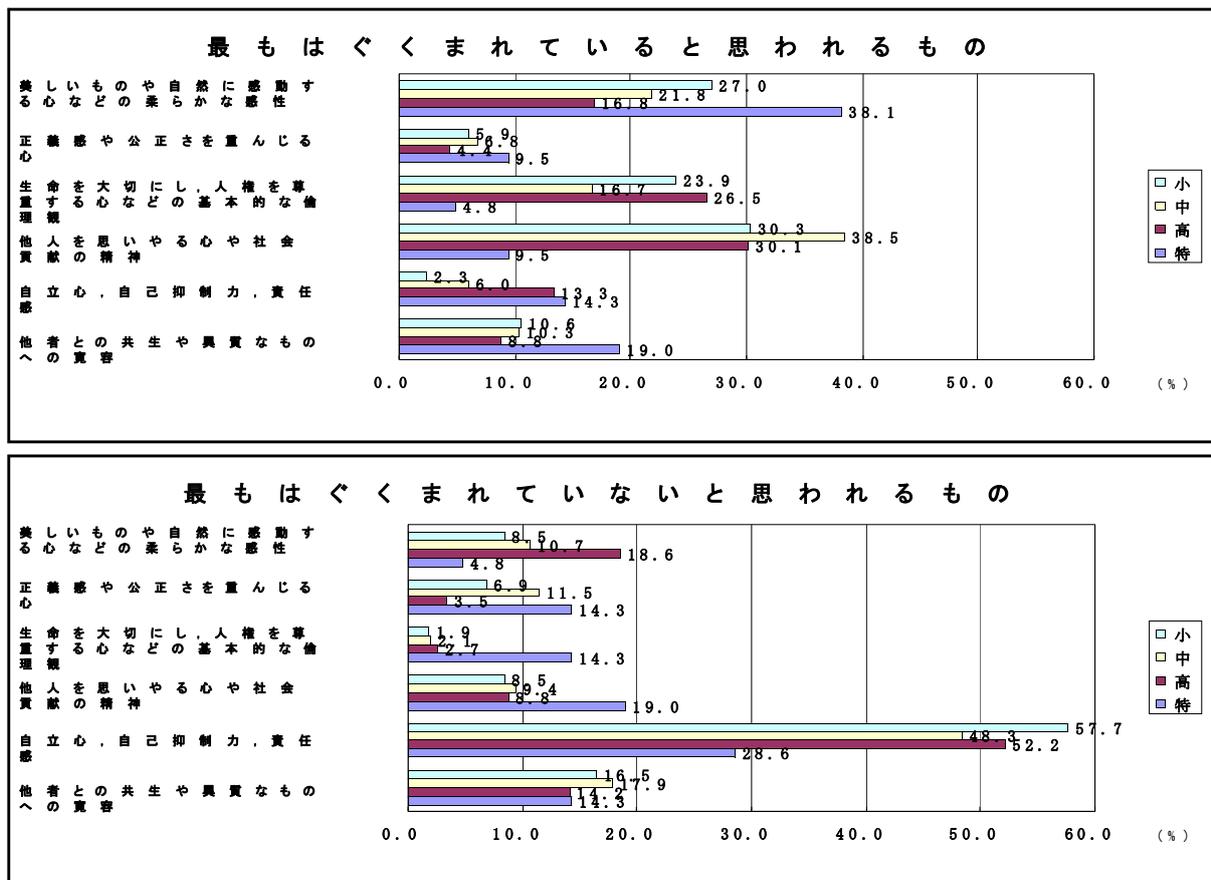


図1 最もはぐくまれていると思われるものと最もはぐくまれていないと思われるもの

## イ 豊かな心のうち、学校で今年度はぐくみたいと重視しているもの

今年度重視しているものは校種を問わず共通しており、「他人を思いやる心や社会貢献の精神（小68.3%、中62.4%、高58.4%、特66.7%）」、「自立心、自己抑制力、責任感（小53.2%、中62.8%、高65.5%、特71.4%）」、「生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観（小54.2%、中38.0%、高46.0%、特38.1%）」が上位を占めている。前述のアの結果と併せて考えると、「自立心、自己抑制力、責任感」については、重視しているにもかかわらず、最もはぐくまれていないととらえている学校が多い。

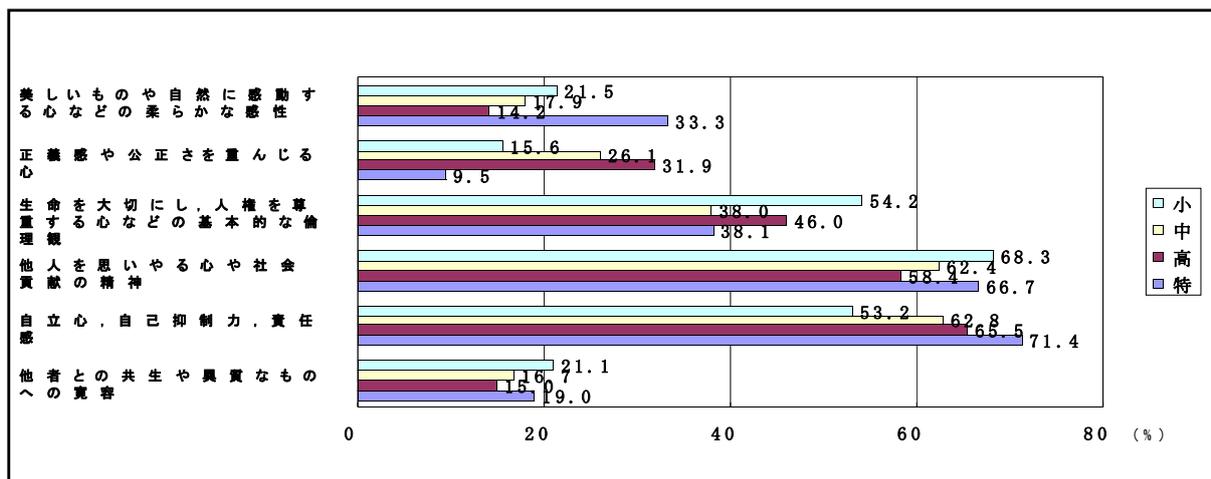
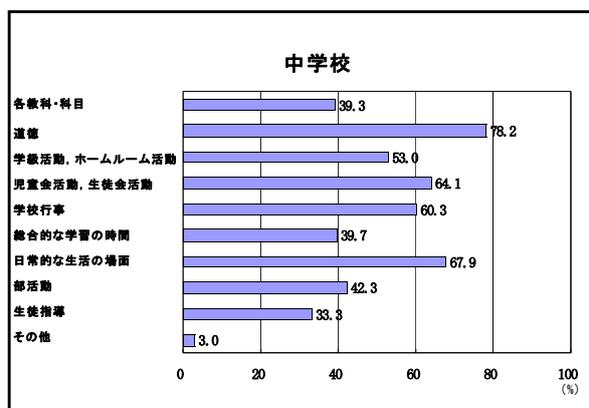
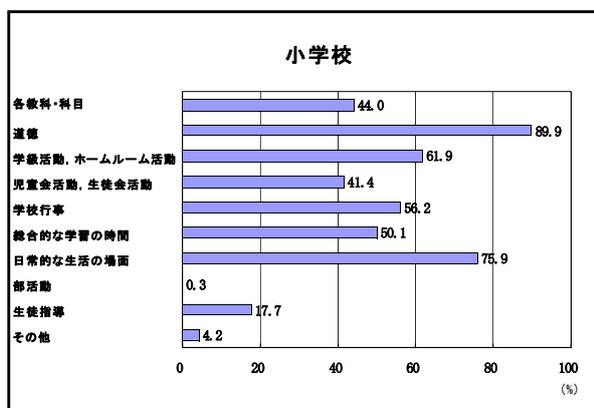


図2 豊かな心のうち、学校で今年度はぐくみたいと重視しているもの（複数回答）

## ウ 豊かな心をはぐくむために重視している教育活動

どの校種ともに様々な教育活動を通して豊かな心をはぐくもうとしている。その中でも、「日常的な生活の場面（小75.9%、中67.9%、高59.3%、特85.7%）」を通してはぐくもうとしている学校が多い。また、小・中では「道徳（小89.9%、中78.2%）」の時間を重視し、高では「ホームルーム活動（75.2%）」の時間や「学校行事（69.9%）」を重視している。特では、「学級活動・ホームルーム活動（57.1%）」の時間を重視している。

その他として、「学校裁量の時間」「読書タイム」「作業学習（特）」「生活単元学習（特）」が挙げられている。



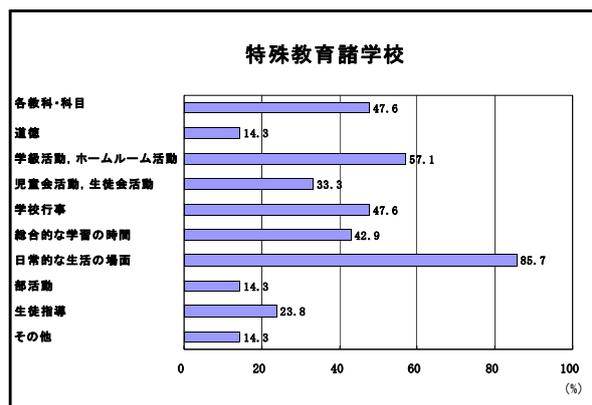
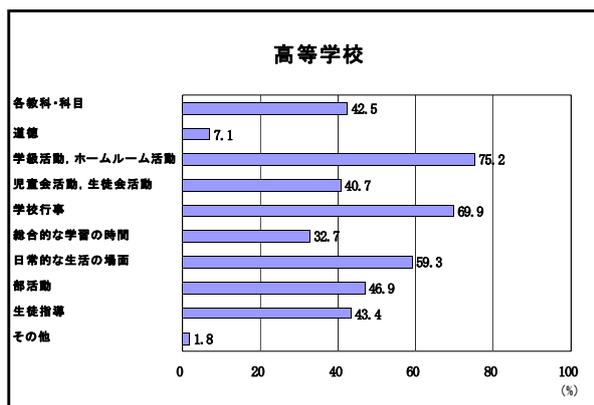


図3 豊かな心をはぐくむために重視している教育活動（複数回答）

## エ 豊かな心をはぐくむために重視している教育活動を行うにあたり、工夫して実践していること

どの校種においても、「児童生徒同士および児童生徒と教師相互の良好な人間関係づくり（小70.9%、中76.1%、高60.2%、特61.9%）」や「家庭や地域社会との連携（小61.9%、中51.3%、高51.3%、特71.4%）」を工夫して実践している学校が多い。

また、小・中・高では、「ボランティア活動、自然体験活動等の体験活動の充実（小69.0%、中62.8%、高51.3%）」を挙げている学校が多い。

一方、「他の学校種との連携（小8.1%、中10.7%、高13.3%、特14.3%）」を工夫して実践している学校は少ない。

その他として「縦割り活動」「マナーアップ運動」「ピアサポート活動」「リーダーとなる生徒の育成」「個別の指導計画（特）」を挙げている。

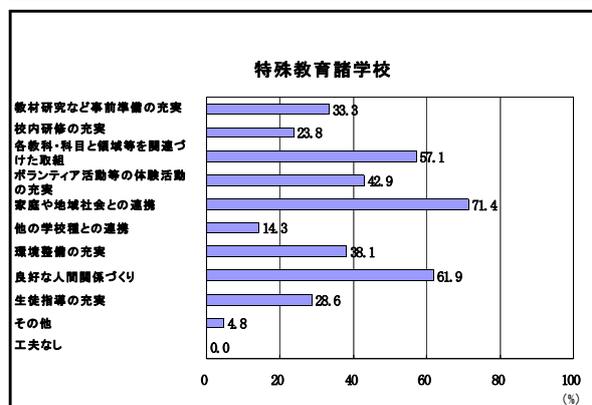
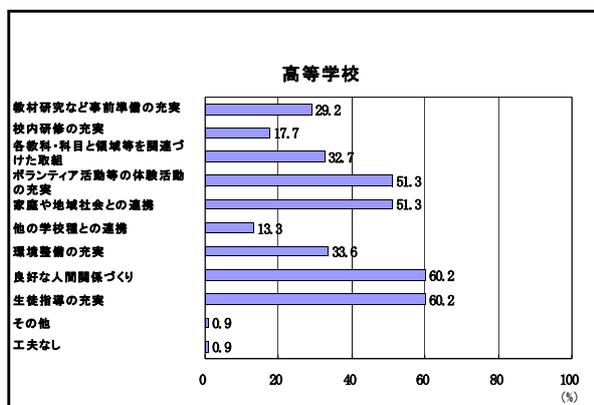
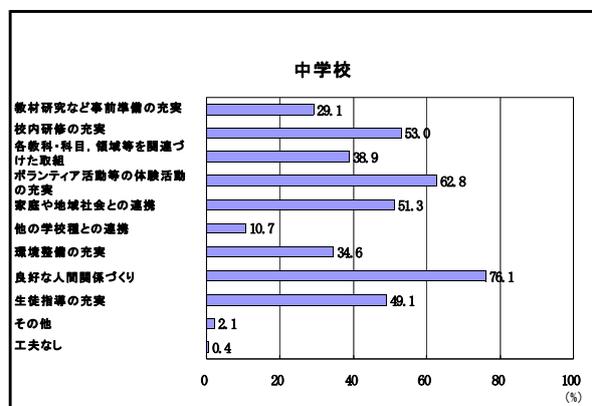
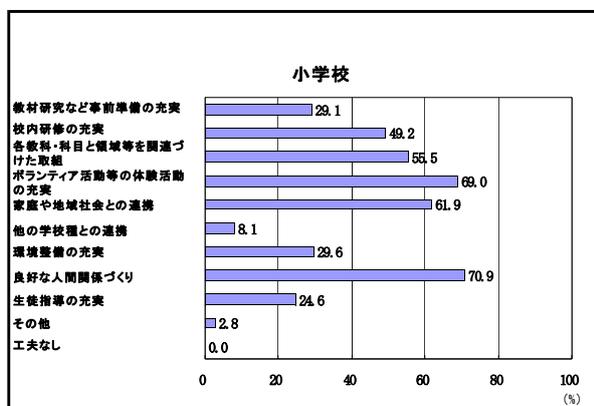


図4 重視している教育活動を行うにあたり、工夫して実践していること（複数回答）

② 豊かな心をはぐくむ取組についての成果と課題

ア 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の成果

「成果が見られない」と答えた学校はなく、どの校種とも、ほとんどの学校が「ある程度成果が見られる」と回答している。しかし、「大いに成果が見られる」と考えている学校は少ない。

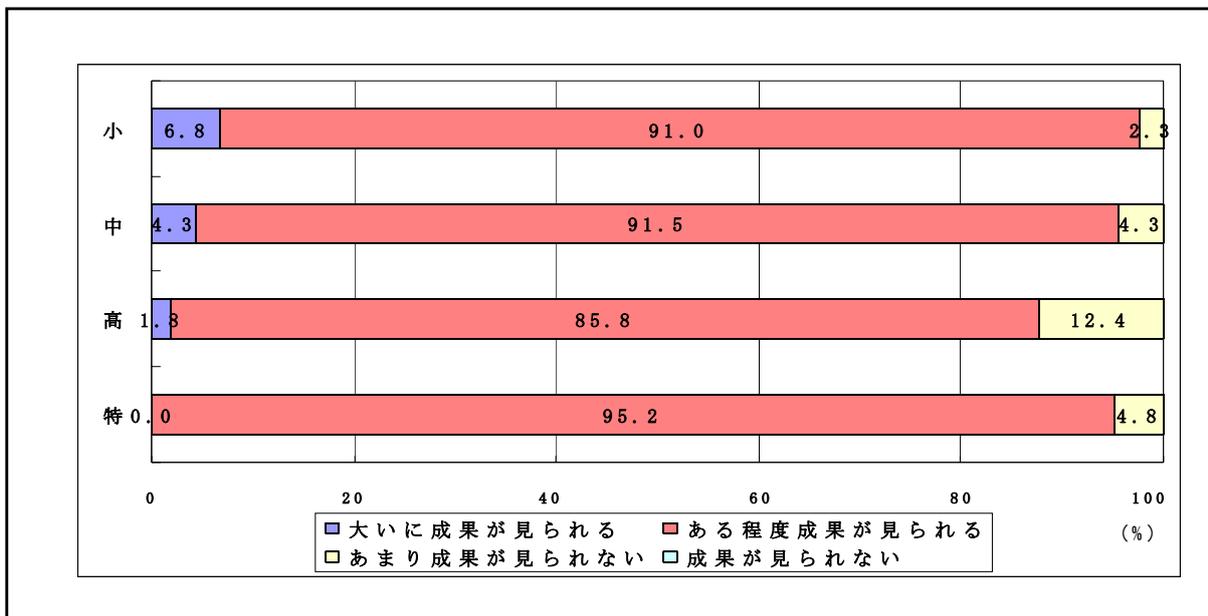


図5 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の成果

イ 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の課題

どの校種においても、各段階において課題を感じている。小・中では「評価・改善の段階（小63.8%、中65.4%）」、高では「実施の段階（54.0%）」、特では「計画の段階（52.4%）」に課題を感じている学校が多い。

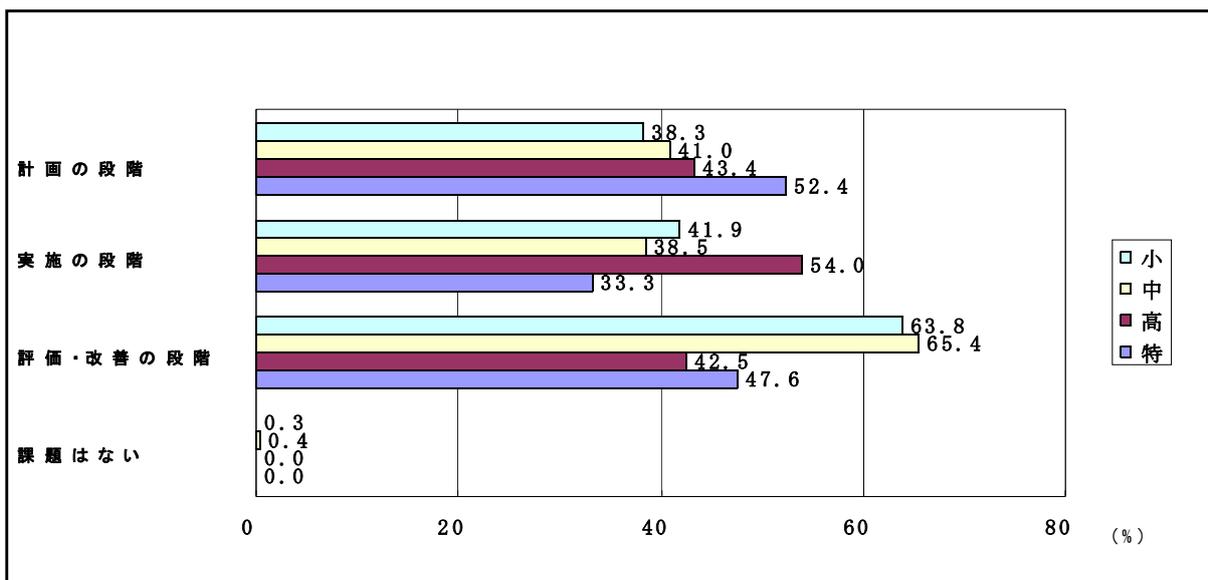


図6 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の課題 —課題のある段階—（複数回答）

具体的な課題については、どの校種でも、今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動についていろいろな課題があると考えている。小では、「評価方法の明確化（48.4%）」を課題ととらえている学校が多い。中では、「評価方法の明確化（49.6%）」や「教職員の話し合い等の時間の確保（45.3%）」を課題ととらえている学校が多い。高では、「教職員の協働態勢（48.7%）」を課題ととらえている学校が多い。特では、「評価方法の明確化（52.4%）」を課題ととらえている学校が多い。

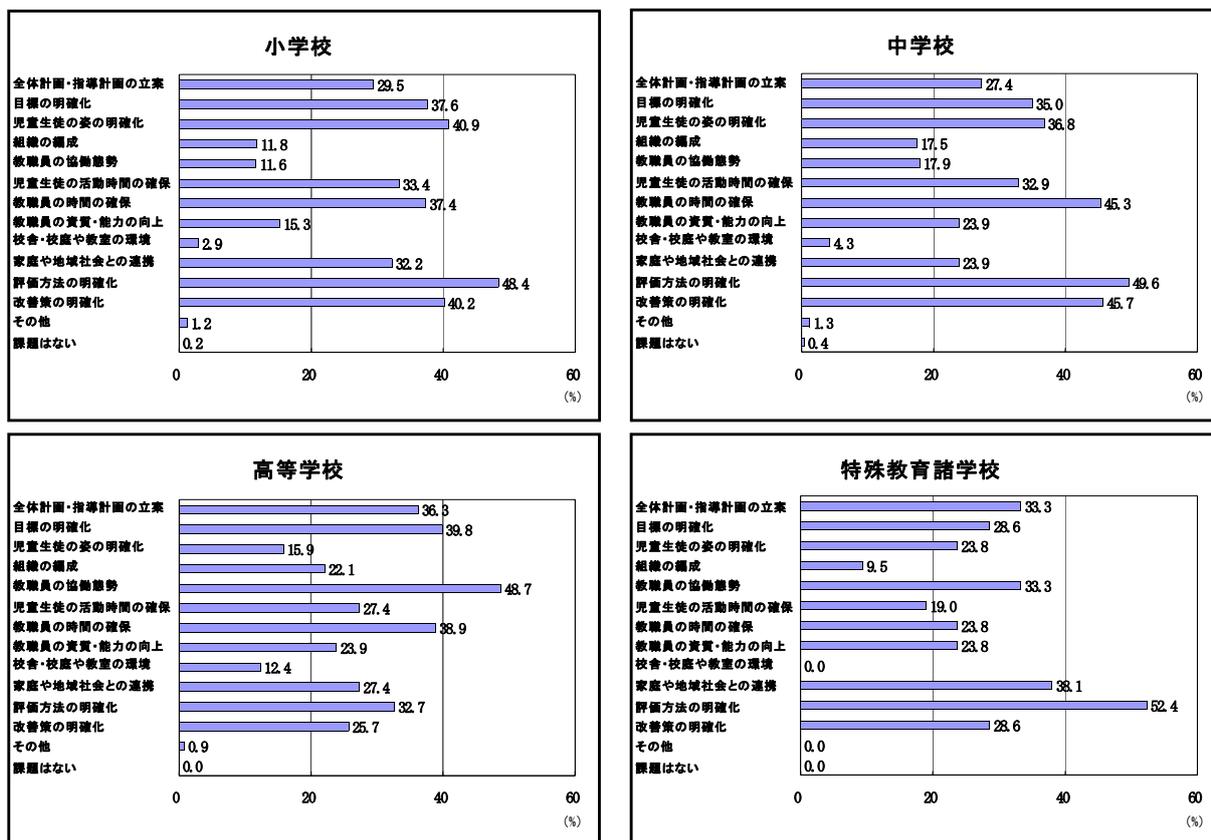


図7 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の課題 —具体的な課題—（複数回答）

以上のことから、各学校ではそれぞれ次のような点に注意して豊かな心をはぐくむ取組をすすめていく必要があると思われる。

小学校では、自立心等を道徳の時間だけでなく、特別活動や生徒指導などで創意工夫してはぐくみ、全職員の共通理解のもとその活動を評価・改善していくこと。

中学校では、教科や担任による個々の取組を、組織としての取組に変えていくこと。具体的には、教科等を関連づけた取組や地域・家庭との連携等が挙げられる。

高等学校では、生徒の自己評価や意識・実態調査、教師による授業評価や単元評価などの資料を収集し、どのように活用するか、教職員の共通理解を図るために教師間で話し合いを重ねていくこと。

特殊教育諸学校では、評価について校内研修等で理解を深め、児童生徒の豊かな心をはぐくむための指導に生かしていくこと。

資料

「豊かな心をはぐくむ取組」に関する意識・実態調査（質問紙）

茨城県教育委員会では、「本県の幼児児童生徒に『はぐくみたい大切な心』」の中で、豊かな心について、次のように例示しています。

- ① 美しいものや自然に感動する心などの柔らかな感性
- ② 正義感や公正さを重んじる心
- ③ 生命を大切にし、人権を尊重する心などの基本的な倫理観
- ④ 他人を思いやる心や社会貢献の精神
- ⑤ 自立心、自己抑制力、責任感
- ⑥ 他者との共生や異質なものへの寛容

次の1～6の質問にお答えください。

※ 回答は、すべて回答用紙に①, ②, . . . の番号でお書きください。

※ 「その他 ( )」を選択された場合は、具体的な内容を括弧内にお書きください。

- 1 豊かな心（上の①～⑥）のうち、あなたの学校で**最もはぐくまれている**と思われるものと**最もはぐくまれていない**と思われるものを、一つずつ選んでください。
- 2 豊かな心（上の①～⑥）のうち、あなたの学校で今年度はぐくみたいと重視しているものを選んでください。（複数回答可）
- 3 2で選んだ豊かな心をはぐくむために重視している教育活動は何ですか。次の中から重視しているものを選んでください。（複数回答可）
  - ① 各教科・科目
  - ② 道徳
  - ③ 学級活動、ホームルーム活動
  - ④ 児童会活動、生徒会活動
  - ⑤ 学校行事
  - ⑥ 総合的な学習の時間
  - ⑦ 日常的な生活の場面（始業前・放課後、休憩時間、朝や帰りの会、SHR、給食の時間、清掃の時間等）
  - ⑧ 部活動
  - ⑨ 生徒指導
  - ⑩ その他 ( )
- 4 3の重視している教育活動を行うにあたり、工夫して実践していることは何ですか。次の中から工夫して実践しているものを選んでください。（複数回答可）
  - ① 教材研究など事前準備の充実
  - ② 校内研修の充実
  - ③ 各教科・科目、道徳、特別活動、総合的な学習の時間を互に関連づけた取組
  - ④ ボランティア活動、自然体験活動等の体験活動の充実
  - ⑤ 家庭や地域社会との連携
  - ⑥ 他の学校種との連携
  - ⑦ 校舎・校庭や教室の環境整備の充実
  - ⑧ 児童生徒同士および児童生徒と教師相互の良好な人間関係づくり
  - ⑨ 生徒指導の充実
  - ⑩ その他 ( )
  - ⑪ 工夫していることはない
- 5 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の成果について、どのようにとらえていますか。
  - ① 大いに成果が見られる
  - ② ある程度成果が見られる
  - ③ あまり成果が見られない
  - ④ 成果が見られない
- 6 今年度の豊かな心をはぐくむための教育活動の課題について、どのようにとらえていますか。
  - (1) 次のどの段階に課題がありますか。次の中から選んでください。（複数回答可）
    - ① 計画の段階
    - ② 実施の段階
    - ③ 評価・改善の段階
    - ④ 課題はない
  - (2) その課題は何ですか。次の中から選んでください。（複数回答可）
    - ① 全体計画・指導計画の立案
    - ② はぐくみたい豊かな心についての目標の明確化
    - ③ 豊かな心をはぐくまれた児童生徒の姿の明確化
    - ④ 組織の編成
    - ⑤ 教職員の協働態勢
    - ⑥ 児童生徒の活動時間の確保
    - ⑦ 教職員の話し合い等の時間の確保
    - ⑧ 教職員の資質・能力の向上
    - ⑨ 校舎・校庭や教室の環境
    - ⑩ 家庭や地域社会との連携
    - ⑪ 評価方法の明確化
    - ⑫ 評価結果に基づく改善策の明確化
    - ⑬ その他 ( )
    - ⑭ 課題はない

### 3 参考文献

- 田中統治 『学力向上をめざす管理職の実践課題 第1巻 確かな学力を育てるカリキュラム・マネジメント』教育開発研究所 平成17年6月
- 『“信頼される学校づくり”に向けたカリキュラム・マネジメント 第1巻 カリキュラム評価の考え方・進め方』教育開発研究所 平成17年12月
- 「教科別指導計画作成の配慮と工夫」木岡一明編『チェックポイント・学校評価 No.6 学年・学級の指導点検とカリキュラム開発』教育開発研究所 平成16年3月
- 「自己点検・自己評価の結果をどう活用するか」高階玲治編『誰もが活用したい「学校の自己評価・外部評価」100の実践ポイント』教育開発研究所 平成16年10月
- 「改善されない社会性育成の課題とは」高階玲治編『シリーズ・学校力 第4巻 豊かな心を育てる「社会性育成」力』ぎょうせい 平成17年5月
- 山口 満 「学校におけるカリキュラム開発の仕組みを変える」財団法人教育調査研究所編『教育展望1998年3月号』財団法人教育調査研究所 平成10年3月
- 安彦忠彦 『カリキュラム開発で進める学校改革』明治図書 平成15年10月
- 中留武昭編 『カリキュラムマネジメントの定着過程』教育開発研究所 平成17年10月
- 中留武昭・田村知子著 『カリキュラムマネジメントが学校を変える』学事出版 平成16年6月
- 高階玲治編 『21世紀の学校づくりをめざす学校経営相談12ヵ月 第3巻 教育課程経営』教育開発研究所 平成13年10月
- 木岡一明編 『チェックポイント・学校評価 No.6 学年・学級の指導点検とカリキュラム開発』教育開発研究所 平成16年3月
- 田中耕治編 『“信頼される学校づくり”に向けたカリキュラムマネジメント 第4巻 カリキュラムをつくる教師の力量形成』教育開発研究所 平成18年6月
- 村川雅弘編 『授業にいかす 教師がいきる ワークショップ型研修のすすめ』ぎょうせい 平成17年7月
- 日本カリキュラム学会編 『現代カリキュラム事典』ぎょうせい 平成13年2月
- 上越教育大学附属小学校 『Curriculum カリキュラムの評価改善2003』平成15年11月
- 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 心豊かに生きるVol.1』平成16年11月
- 『心豊かに生きる子どもをはぐくむ教育課程の創造 心豊かに生きるVol.2』平成17年6月
- 上越市立高志小学校 平成17年度研究集録『喜んで登校し生き生きと学ぶ子供』平成18年3月
- 上越市立大手町小学校 平成17年度研究紀要『自ら学び、よりよく生きようとする子どもの育成』平成18年3月
- 茨城県教育研修センター 『学校改善につながる学校評価Q&A（平成16年度版）』平成17年3月

## V 研究協力校での実践から見える成果と課題

国立大学法人筑波大学 教授 田中 統治

今回のテーマには「カリキュラムの改善」という用語が使われている。これまで、教育課程は使われてもカリキュラムが用いられることは少なかった。カリキュラムの用語はこれまで教育課程と同義と考えられてきたけれども、しかし、その意味する内容は奥が深い。すなわち、カリキュラムは、学びの履歴と言われるように一人ひとりが組み立てる個人的な学習経験から、その経験を意味付ける上で重要な人間関係、生活場面、及び環境を含む社会的な学習（隠れたカリキュラム）まで意味する。研究対象が質的に広がっている。このため、カリキュラムを改善するには、教育計画のみならず、学校内外の環境や文化まで視野に収める必要がある。しかも、「豊かな心をはぐくむ」カリキュラムである。子どもにとって豊かな心とは何かを議論し始めると、その内容は無限に広がるだろう。このように本共同研究は、最初からの絞りにくいところから出発した。

改善という仕事は、今行っている活動を全体的に位置付けて見直すことから始まる。現行の教育活動をカリキュラムの観点から点検し評価していくこと、つまり、カリキュラム評価が1年目の大事な研究であった。すると、これまで慣習的に行ってきた学校行事や体験活動などのもつ意味が問い直され、その成果を話し合う機会も生み出された。その過程で、本校では豊かな心をはぐくむためこの活動がどれほど「教育的に意味ある経験」を児童生徒にもたらしめているのかという点が問題とされた。ふだんは何気なく行っている活動の一つひとつについて、このような問いかけがなされる。すると、成果と課題を確かめるために、何らかのデータが必要なことが自覚され始める。つまり、カリキュラム評価のための情報収集が行われるわけである。と同時に、はぐくみたい豊かな心の中身について、漠然と考えるのではなく、それを児童生徒の「教育的なニーズ」として明確に把握したいという動きが生み出される。

例えば、それは「社会的な自立」を促すための学習活動としてねらいが自覚され、そのために必要な単元計画と評価が試みられた。また、研究組織などの改善に結びついた事例もある。というのも、年間指導計画を練り直すためには、誰がいつそれをやるのかという計画が立てられないと、結局、改善まで進まないからである。これはカリキュラム・マネジメントへの自然な流れである。PDCAのサイクルは、まず現状の成果と課題をよく見ること、つまり、C(Check:点検)をもとにしたA(Action:改善)から始まることがよく分かる。体験活動や学校行事についても、「思いやりの心」をはぐくむことに重点化することにより、総合的な学習や各教科と関連付けた、学びや出会いの場が考え出された。これらは従来の活動をリニューアルし、リフォームしていく試みであると言ってよい。

さらに、「豊かな心」は広い意味での学力とつながっていることにも気付かされた。脳科学やEQ(情動的知能)、あるいはPISAが強調する「コンピタンス」(competence)を引き合いに出さなくても、人間力としての総合的な力は「豊かな心」を包摂している。したがって、「確かな学力」で言う「確かさ」も豊かな心をベースにしていることが分かる。学習習慣の定着は、それを支えるような「落ち着き」、「集中力」、「自信」などの総合力に裏打ちされている。生徒指導も同様である。これまで、この点が忘れられがちであったために、挨拶運動のようなどちらかと言えば外面的な礼儀指導が重視されがちであった。けれども、礼儀やマナーを内面から促す力としての「コミュニケーション力」をはぐくむことが、いまの子どもたちの教育的なニーズであるという点が確かめられた。こうした根源的な力をはぐくむには、全学年のカリキュラムを系統付けて考える視点が必要であり、「カリキュラム改善は教務の仕事ではなく、全教員が取り組むべき仕事」という共通理解が校内で求められている。

残された課題として、いくつか指摘すれば、豊かな心をはぐくまれるメカニズムとその成果をみとるための手立てがほしいと考える。豊かな心は評定すべきものではないが、しかし、カリキュラム改善にとっては評価情報が不可欠である。今回は、アンケートや自己評価シートなど、どちらかと言えば、子どもにセルフチェックさせる方式に依存しすぎたきらいがあった。こうした方法によらずとも、教員集団の専門的な目を磨くことによって、豊かな心への変容過程をとらえることができるはずである。たとえば、子どもの絵や作品、発表物、話し合い、質問の内容などをビデオなどに記録しておいて、それを素材にカリキュラムを評価する方法が開発されてもよい。最近、自己評価に飽きてしまった子どもの姿をよく見受けるので、自己評価が「隠れたカリキュラム」として弊害をもたらすことがないように、この点は少し改善していきたい。

また、豊かな心に限らず、カリキュラム・マネジメントの方法を普及させてほしい。これは学校種間の連携においても必要な方法である。学びの履歴からみれば、下級学校や上級学校とのカリキュラム面での連携が必要である。豊かな心をはぐくむ試みは、単一学校の努力だけでなく、こうした地域での連携教育によって十分に展開する。とくに、小中の連携はカリキュラムの改善によって推進していただきたい。

以上、感想めいたことばかり述べましたがけれども、研究協力校の先生方には、お忙しいところをさらに無理をお願いしたにもかかわらず、快く共同研究に加わっていただき、厚くお礼を申し述べます。今回も、茨城県の先生方のもつ底力を実感した次第です。また、県教委、教育研修センターの次長先生をはじめ、所員の先生方にも大変お世話をかけました。二年間、誠に有難うございました。

## VI 研究関係者一覧

### 1 研究助言者

国立大学法人筑波大学 教授 田中 統治

### 2 研究協力校・研究協力員

水戸市立常磐小学校 教諭 清水 恒孝

土浦市立右舂小学校 教諭 露木 則子 (平成18年度), 小祝 良信 (平成17年度)

古河市立八俣小学校 教諭 関 明男 (平成18年度), 宇梶 敏弘 (平成17年度)

日立市立多賀中学校 教諭 関根 暢生

鹿嶋市立鹿野中学校 教諭 幡 康弘

龍ヶ崎市立城南中学校 教諭 浅野 恵次

県立玉造工業高等学校 教諭 田中 一豪

県立三和高等学校 教諭 中島 泉 (平成18年度), 渡辺 和司 (平成17年度)

県立水戸聾学校 教諭 深作 純子

県立協和養護学校 教諭 古川 早苗

### 3 教育庁

義務教育課指導主事 増田 年男 (平成18年度), 小島 久男 (平成17年度)

高校教育課指導主事 澤畑 保男

特別支援教育課指導主事 大沢 靖司 (平成18年度), 加瀬 俊一 (平成17年度)

保健体育課指導主事 金澤 彰

### 4 教育研修センター

所 長 大川 秀一 (平成18年度), 大金 文郎 (平成17年度)

次 長 伊藤 進央

次長兼教職教育課長 福田 栄

教職教育課指導主事 稲生 耕一, 黒田 裕之, 木村 益巳, 黒澤 明良

同 大林 邦仁, 菊池 彰, 市毛 栄

同 小野口 吉政, 森田 泰司 (平成18年度)

同 石井 誠二, 古川 善久 (平成17年度)

特別支援教育課指導主事 椎木 久夫, 木原 利憲

研究報告書第59号

カリキュラムに関する研究

**豊かな心をはぐくむカリキュラムの改善**

平成17・18年度

平成19年3月発行

編集 茨城県教育研修センター教職教育課

発行 茨城県教育研修センター

〒309-1722 茨城県笠間市平町1410

TEL 0296(78)3212 (教職教育課直通)

FAX 0296(78)2122

URL <http://www.center.ibk.ed.jp/>